

うちはの生ける炎

律可

無貌	約束	一儀	成長	離別	天啓	応報	因果	縁組	庇護	初陣	長男	次男	始まり
184	168	151	133	123	107	86	68	55	38	26	15	4	1

目次

始まり

十一月十日

どうやら母が狂っている。

最愛の母が知らないうちにこんなことに、とショックだし、気づきたくはなかったし、いずれわたしも母と同じ道を辿るのかと思うとふざけるなよとしか言えない。

わたしはケイカ。うちはケイカ。“うちはの生ける炎”うちはトウカのただひとりの娘。

今日から日記をつけることにした。

その日にあつたことを、感じたことを、できるだけ客観的に見つめるために。

いつかわたしが母のように狂い果てたとき、過去を見て正氣に戻ってこられるように。

炎の邪神とやらに心奪われることのないように。

わたしは今日九歳になった。

九歳になったら、戦場へ出してくださいと頼むと決めていた。

うちはは女を戦場へは出さない。女は家を守り、子を産み、次代の戦力を生み出す存在であつて、よほどの例外でなければ男衆に混じつて戦場に立つことはない。

その「よほどの例外」が母だつた。

母は幼少から忍の才に恵まれ、特に火遁の才能は常軌を逸していたのだという。

母を見た当時の頭領は、敵を、特にあの千手一族を滅ぼすために母を戦忍として使うことを決めた。

そのとき母は九歳だつた。

それから母は敵を殺して、殺して、とにかく殺してきたのだという。その卓越した火遁の才で。

わたしの父と番い、わたしを産み、夫を亡くして尚、母はまだ戦場に立っている。

「うちのは生ける炎」という異名を轟かせ、敵を屠り続けている。憧れた。強く美しく、いつも微笑んでいる母に。

家を守ることに子も産むことにも興味は持てず、わたしは母と同じように戦場に立ちたいと、立つのだと、いつからか決めていた。

敵が憎い訳ではない。殺したい気持ちはない。

わたしは同胞を殺した敵を、最大の宿敵である千手一族を憎いとは思っていない。

だって母様がいつも言っていたのだ、人間に上下も貴賤もないと。

「人は焼ければ灰になるの。どれだけ強くても、賢くても、どれほどの名声があつたとしても」

「燃えて仕舞えばみんな同じなのよ。ケイカ、あなたにはそれをわかつていてほしいの。あなたが生まれや育ちで人を区別することのないように」

口癖のように「人は燃えれば同じ」と言う母を尊敬していた。敵を、千手を憎いと思わなくなった。

けれど母は、これから戦場へ出してほしいと願ったわたしに言ったのだ。

「この世でもっとも尊いものは、全てを燃やす炎そのもの」と。

それまでも薄らと感じていた母への違和感が形を持ちはじめた。

押し黙るわたしに母は言った。

この世に炎ほど尊いものはない。

炎ほど偉大なものはない。

炎の輝き、その強さに比べれば、うちとは千手の諍いも、散つていった同胞の命も、些細な事象に過ぎないのだと。

「あなたは私と同じ、火の才を持っている。きつといつか、私と同じようにあの方の炎を賜うことができる。だからケイカ、あなたはこれから戦場で多くの敵を燃やすだろうけれど、それを気に病む必要なんてないのよ。神聖な炎に焼かれるのだもの、感謝されてもいいくらいなのだから」

何を言っているんだこの女——と、わたしは母に対して初めて思った。

冗談を言っているようにはまるで見えなかった。母は相変わらぬ美しく、泰然として、娘であるわたしが明らかに怯えているのに微笑んでいた。

そして何ごともなかったかのようになり、「明日にでもタジマ様に、あなたを戦に出す許可をいただきましょね」と言った。

言うべきことがたくさんある気もしたけれど何も言い出せず、わたしは結局、「あの方」は何なのかと聞いた。

聞いたことを後悔している。

その時の母の顔が、眼が、

思い出したくもない。

それは古い神なのだという。

かつて母の前に降臨し、その圧倒的な力で全てを焼き尽くし、母に炎を残したのだという。

秋の夜空に輝く南のひとつ星に封じられたその神の名を、わたしはここに記さない。

母はその神を愛している。娘であるわたしを愛するよりもずっと。

そう言われたわけではないけれど、わかってしまった。気づいてしまった。

そして、わたし自身がいつかきつと母のように成り果てるだろう奇妙な確信があった。

火の熱に、何もかも飲み込むその強さに、惹かれているのはわたしも同じなのだから。

ひどく疲れた。

今日はもう寝る。

次男

十一月十一日

昨日はわたしの人生最悪の一日と言ってもよかったが、今日は今日で色々なことがあった。

うちは頭領たるタジマ様にお会いし、何故かその次男のマダラ様と手合わせをし、実力を認められ、戦場に出る許可をいただいた。

マダラ様は結構かわいかった。顔が。中身はあまりかわいくなかった。頭領の息子に求められるのはかわいさではなく力だろうか、かわいくなくても支障はないんだろうけども。

母にタジマ様のところへ連れていかれ判明したのだが、母はタジマ様の幼馴染だったらしい。そのうえ、タジマ様の火遁の師だったのだという。母が現頭領の師匠だったというのは割と驚天動地というか、言えよ、と思つた。今日まで知らなかった。

母は幼少から火遁の才は図抜けていたらしいが、それにしてももつと誇つてもいいんじゃないだろうか。未来の頭領の師匠だぞ？

タジマ様はお優しい方で、わたしを見て「やはり、お母上に似ていますね」と言つた。

母は美貌の人なので、お世辞にしる誉め言葉だと思ふのだが、聞いたこともない神を狂信している母に似ていると言われ半笑いで返してしまった。

タジマ様は母の信仰をご存じなんだろうか。

おそらく知らないのだろう。知っているなら止めてほしい。

「私が初めて戦場に出た歳と同じ九歳になったので、ケイカを戦力に加えてほしい」とタジマ様に伝えた母にタジマ様はしばらく考え、そして物陰に向かつて「出てきなさい」と言つた。

渋々といった感じで現れたのはマダラ様で、どうやらわたしたちを覗き見ていたようだった。

わたしは特にマダラ様に興味はなかったので「マダラ様だなあ」としか思わなかったのだが、マダラ様には何故か睨まれた。なんでだ。未だにわからない。

そこでタジマ様に「今から二人で組手をするように」と命じられ、意味がわからず頭領を二度見するというなかなか失礼なことをしてしまったが拒否権はなく、わたしとマダラ様は組手をした。で、勝った。

勝ちましたがマダラ様はやたら強く、これで六歳かよ、と思った。マダラ様の兄、跡取りの若君とは知らない仲ではないが彼もまあ強いので、頭領の子というのはおしなべて強いのもかもしれない。

おそらくあと数年もしないうちに、わたしはマダラ様に勝てなくなるだろう。

今日勝てたのは年齢差のおかげだ。

組手が終わったあと更に睨まれた。

タジマ様には「流石はうちはトウカの娘」とお褒めの言葉をいただいた。半笑いで返した。

次の戦から、わたしを戦力として考えると約束してくださいました。

これは素直に嬉しい。快拳だと思う。

じゃあそういうことで、と帰ろうとしたら呼び止められ、「マダラの師匠になってくれますか」と言われた。

相手が頭領でなければ「目の方、節穴でいらっしやいますか？」くらいは言ったと思う。

わたしがマダラ様に勝てたのは単に年齢差があったからであって、それだけで師匠に抜擢するのは少しばかり頭がおかしい。

マダラ様もマジかよみたいな顔でお父上を見ていた。

全力かつ丁重にお断りしようとしたが「火遁だけ見てくれればよろしい」「私もかつて貴女の母に火遁を教えられ、飛躍的に上達した」「弟のようなものだと思ってくれていい」など言葉を重ねられ、「ここで断ったらこちらが失礼」みたいな空気にされ、母はただ微笑んでいるだけで、マダラ様はマダラ様で不満そうに、だが声に出して嫌だという訳でもなく黙っていて、結果、わたしは今日からマダラ様の火遁限定師匠らしい。

次にマダラ様と会う日取りまで決められてしまった。

さて明日からどうしよう。

確かにわたしは母ほどではなくても火遁は得意で、というか火遁しか得意じゃないし興味もない感じなのだが、それを人に教えられるかという話が変わってくる。

下手な教え方をしてマダラ様に変な癖をつけたり、火傷を負わせたり、最悪殺してしまったりしたらどう責任を取ればいいのか見当もつかない。

その際はマダラ様と共にわたしも焼身自殺するくらいしか手がないだろう。

マダラ様に「人からものを教えられる才能」があることを祈る。

その前にわたしは、まず自分が生き残れるかを心配した方がいいのかもしれない。

戦場に出された子どものうち、半数近くは初陣で死ぬらしい。

こんなことをしていて、よく滅びていないな忍は、と思う。

まだ滅びていないだけで、そのうち滅びるのかもしれないが。

いつか千手との争いが終わる日は来るのだろうか。

わたしが生きているうちには来ない気がするが、もしそうなら、千手にうちは以上の火遁の使い手がいるか聞いてみたいし手合わせをしてみたい。

いや平和になったら千手との手合わせはできなくなるのだろうか。

なら殺し合っていた方がいいのかもしれない。どうだろう。

争いが終わる日が来てから考えよう。

◇ ◆

十一月十二日

思い出したのだが、わたしはマダラ様のおしめを変えたことがある。

あれはマダラ様が生まれて間もない日、つまり六年ほど前でわたしは三歳だったはずだ。

母と共にうちは宗家に呼び出され、幼いながらも何ごとだと思つたことを薄く覚えている。

タジマ様は母とわたしに、生まれたてのマダラ様を見せてくださつた。

その頃はまだタジマ様の御内儀もご健在で、彼女ともお会いした記憶がある。

さすがにわたしも幼く記憶があいまいだが、ちょうどわたしがマダラ様の手に触れていた時に、マダラ様が漏らしたのだと思う。

それに気付いたわたしがマダラ様のおしめを替えたがった、のだと思う。確か。

わたしには弟も妹もおらず、赤ん坊と触れ合ったことがなかったの
で、見た目も喃語も唐突に漏らすところも、何もかも面白かったのだ。

そして幼いわたしはタジマ様方のご厚意でマダラ様のおしめを替えさせてもらった。

ということを、昨日マダラ様にお会いして思い出した。

マダラ様ご本人は覚えていないだろう。

しかしわたしがマダラ様のおしめを替えたということは紛れもない事実であり、今後、もしマダラ様がわたしを虐げるようなことがあればこの事実を盾にしていきたい。

あなたはわたしの前で漏らしたうえ、その後始末をわたしにつけさせたことがあるのですよ、と。

このことを思い出したこと以外は特筆すべきことのない一日だった。



十一月十三日

母は星を見ることが好きで、わたしも夜空は好きなので我が母ながら風流で実にいい趣味だ、お金もかからないし、と思っていたのだが、星を見るのが好きというより「星に封じられている信仰対象の邪神に祈るのが好き」ということが発覚し何もかも嫌になってしまった。

母が知らない神（しかも邪神らしい）を信仰し、同胞よりもわたしよりもその神を愛しているとわかったのはたったの三日前だ。

こちらからその話題を振らない限り、母は今まで通りたおやかで優しい母なので油断していた。

南の空にぼつんと明るく輝く星を熱心に見る母に、気軽に話しかけるんじやなかった。

確かに母は、母が信仰する神は星に封じられているのだと言っていた。
×言っていたのに聞いたわたしが悪い。うかつだった。

×様が降臨された時のことは今でも覚えている、この世の何よりも美しく強い炎だったと語る母の言葉を聞き流しつつも、正直、そんなに美しく強い炎を見てみたいと思っってしまった。

×しかし見た結果が発狂なのは嫌だ。

××という神の名を口にするとき、母は明らかに狂人の目をしていく。
×狂人を見たことがないわたしが「なるほどこれが狂気か」と思うくらいなのだから相当だ。

よく今まで気づかなかったものだと思う。

否、うつすらと「なんだかうちの母親、変だな」と思っていないこともなかったのだが、よその母親とそもそも異なる点が多すぎて（戦場に出ている女うちには母しかいない）気づきが遅れたのだ。

夜に起こったこの出来事のせいで気分が落ち込んだが、昼間に悪くはない出来事もあった。

若君がわたしの顔を見にいらしてくれた。

将来のわたしが呆けた場合、もしくは狂った場合に備えて記しておくが、若君というのはうちは宗家の御長男、未来のうちは当主であり、マダラ様の兄だ。

わたしと同一年で生まれた日も近しく、知人以上幼馴染以下くらいの親しさである。

急に来たので「なんですか、金なら貸しませんよ」「借りに来るわけがないだろうが」という心温まる会話をしてしまった。

若君は若君と呼ぶと毎回若干嫌そうな顔をするのだが、その嫌そうな顔が魅力的な方のため、何度訂正されようと若君と呼び続けている。

何の用かと思えば、わざわざ「マダラをよろしく頼む」と言いにくいたらしかった。

九歳とは思えないほど律儀で聡明ですねあなたは、と言ったら「同年のお前が言うな」と返された。

お前ほど賢しい子どもはお前以外に見たことがないとも言われた。お世辞なのか若君の周囲の子どもが全員残念なのかどうかは知らないが、誉め言葉として素直に受け取っておきたい。

俺の火遁の師にはなつてくれないのかと問われ、嫌です、と丁寧に辞退した。

次期頭領に同い年の分家の女がものを教えるというのは駄目だろう。マダラ様に火遁を教えることだって、本来はアウトだろうに。わたしがあのうちはトウカの娘だから許されているようなものだ。

若君はわたしに、次の春に千手との大きな戦があるだろうこと、そこにわたしの母とわたしが投入されるだろうことを教えてくれた。

おい情報漏洩じゃないのか、いくら同族相手としても、と思つたしそう言つたが、若君はしれつと「お前が誰にも言わなければ露呈しない」と言つた。

相変わらずいい性格をしている。

トウカさんは大丈夫だろうがお前が心配だ、守つてやれないかもしれない。と言われ、幻聴かと思いきや若君は至極真面目だったので笑つてしまった。

ムツとされたが、いやこれは笑うだろう。宗家の長男が分家の娘を守つてどうするというのか。

頑張つて生き残りますので、お気になさらず。と言つた。

若君はしばらく黙つてから、マダラももうじき戦場へ出ることになると静かに言つた。

兄としてそれがやりきれないが、その気持ちを誰にも言えないと。マダラ本人も戦場に出ることを誉れとしているが、それでも嫌だ、弟を戦場に出したい兄がどこにいるんだと。

誰にも言えないとおっしゃいましたが、いま言っているじゃないですが、わたしに。と言つたら、お前は良いんだと返された。

もしかしてわたしは若君に人扱いされていないのだろうか。家の壁みたいな存在と思われている可能性がある。

若君はまた「マダラのことをよろしく頼む」と言い置いてから帰つて行つた。

若君曰く「マダラはお前に懐くだろう」とのことだったが全くそんな気はしていない。なんならちよつと嫌われている感じすらある。だがまあいいだろう。わたしは肅々とタジマ様の命をこなすだけだ。

マダラ様を丸焼きにしないよう気を付けつつ、彼の火遁の腕が上がるよう最善を尽くしていこうと思う。

尽くし方がよくわからないが。



十一月十九日

マダラ様との初稽古の日だった。

火遁のみとはいえ立場上「師」であるわたしに敬意を払うべきと思ったのか、マダラ様は稽古中はわたしに対して敬語だった。

礼儀のなってる子どもだな、さすがは若君の弟。と思ったのだが稽古終了後即座に「お前」呼びされたので評価が「若君の弟さん」から「調子乗ってる砂利」に変更されてしまった。

変更されたので、まあこれくらいはいいだろと思いきマダラ様のほつぺたをつねった。

マダラ様はこちらの想定以上に愕然としており、父様にだってつねられたことなんてない、と言った。

だからどうした、わたしはあなたをつねりたいと思った時にはもうつねり終わってしまいましたよ、と言ったところつねり返されそうになり、それをいなして両頬をつねったら少し泣かれそうになりさすがに焦った。

若君やタジマ様にチクられたらどうしよう。

宗家次男の頬をつねって泣かせかけるといのはどれくらいの罪の重さなのだろうか。

万一密告されたら「わたしはあなたのおしめを替えたことがある」と伝えマダラ様がそれ以上都合の悪いことを言わないよう釘を刺そう。

替えててよかった、おしめ。



うちはマダラはその日まで、うちはケイカとほとんど会ったことも会話しこともなかった。

そもそも宗家とケイカの家はあまり接点がない。

同じうちはであつても宗家と分家、ケイカの家は特別宗家に近い血というわけでもない。

ケイカの母、うちはトウカは女だてらに戦場に立ち、その圧倒的な火力で周囲を地獄に変えては敵味方から恐れられている女だ。ケイカはその娘であり、注目されやすい立場ではあつたが。それでも彼女とマダラが直接交流する機会はほぼなかった。

マダラがケイカを見たのは数度、年始の挨拶などでケイカが母と共に宗家を訪れたときくらいだった。

にこにこ愛想のいい母親と違いケイカは表情が乏しく、無表情とまではいかないが常につまらなそうな顔をしている少女だった。

せつかくの大きな瞳も怠そうに伏せ気味で、気力というものが感じられない。

それだけならマダラは気にも留めなかつただろう。

だがマダラは彼女が好きではない。

敬愛する兄が彼女のことをやたら気にかけているからだ。

兄は強く、優しく、一族想いで、次期頭領として期待されている。

マダラは兄に愛されている自信があつたし、兄を愛していた。

その兄が言うのだ、「ケイカは他の子どもとは違う」「周囲におもねることなく自分の目で物事を見ている」と。

時折虚しいような、遠くを見る目をする兄が、自分には話してもくれない想いや悩みを彼女には伝えていくらしいことも業腹だった。

いそいそとケイカに会いに行つた兄がすつきりした顔で楽し気に帰ってくるのを見るたび悔しかった。

兄を取られた弟の幼い嫉妬だ。

けれど幼いゆえに真つすぐに濁りない感情で、マダラは彼女を嫌いではあつても悪意はなく、「遠くないうちにケイカ以上に兄さんに信

頼されるようになる、悩みもなにもかも、兄さんがあいつに話さなくてもいいようにする」と考え、嫉妬をモチベーションに変えていた。うちは始まって以来とすら言われるほどの忍の才を持って生まれたマダラは六歳になった。もう戦に出ることのできる年齢だ。

兄さんの力になるんだ、弟たちを守るんだと誓うマダラの前に、うちはケイカはしれつと現れた。

彼女の母であるうちはトウカと共に、マダラの父であり頭領であるタジマに会いに来たのだ。「ケイカを戦忍として戦に出してくれ」と言つて。

彼女が来ると聞きつけて物陰から様子を窺っていたマダラは、「女の子なのに」とまず思った。

女の子は戦場に出ない。家を守り、子と共に夫を待ち、いずれうちはのために戦う子を育てることが仕事だ。

それが当然と信じていたマダラは、ケイカを見て「大丈夫なのかな」と心配になった。それまでの敵愾心を忘れ、心配になったのだ。

戦場は危ない。怪我をするし、命だつて落とす。マダラの兄や父でさえ、傷を負って戻ってくることは多かった。

あんなに強い父さんや兄さんですら無傷で戻ってこられない場所に、たつた三つ年上の女の子を行かせるべきじゃないだろう。マダラはそう思い、思つたところで覗き見を察知していたらしい父に呼び寄せられた。

そして彼女と戦うよう言われた。

負けた。

負けたこと自体はそれなりに衝撃で、それでも酷くショックというほどではなかった。接戦だったし、次は負けない自信もあった。

マダラが啞然としたのは、組手のあとに見た彼女の炎にだった。

父に促され、いくつかの火遁を披露した彼女の炎の強さ、大きさ、精度の高さは決して九つの子どもが持つていていいものではなかった。

火遁の才があるとか、そんな言葉で表現できるものではなかった。

マダラは彼女の炎を見て思つたのだ、火の神に愛されていると。

ケイカ本人が聞けば複雑極まりない顔をするだろうその言葉はし

かし彼女に相応しい賛辞で、彼女は手足を動かすような気軽さで火を操り、「これ以上火力を強めるとお屋敷を燃やしてしまいますので」とうちは宗家を全焼させることも可能と仄めかした。

それは強がりでもなんでもなく、ただの事実だったのだろう。

そしてうちはケイカはマダラの師になった。

師と言っても火遁のみ教われればよいとのことだったが、それでも異例も異例、大抜擢である。分家の娘が宗家の男子に、うちはお家芸である火遁の手解きをするなど。

ケイカはそのプレッシャーを感じているのかいないのか、平然とした顔で「これからよろしくお願いします、マダラ様」と言った。

マダラは彼女を心配したことも忘れイラつきを覚えた。

年上のお姉さんが先生となることに一瞬でもときめきを感じた己への苛立ちだった。

年上のお姉さんこうちはケイカは師匠としては割と優秀かつ真摯であり、「火遁だけ」として始まったはずの修行にはマダラの要望により体術や幻術も組み込まれた。

ケイカは繰り返し「わたしは火遁しか能がない」と言ったがマダラは押し通した。

この女よりも強くなる。

そして兄さんから引き離す。

マダラはまだ小さな胸にそう誓っていた。

腹立たしいことにケイカは体術も幻術もそこそこ使え、マダラは幾度も地に伏せた。

ケイカの辞書は「大人気」という言葉が落丁しているようで、年齢差故に体格で劣るマダラをのしては「若君からもマダラ様をよろしくと言われていきますので」と助け起こし、またひっくり返した。

兄を「若君」などと敬った呼び方をするくせにマダラへの敬意は感じられず、一度それを指摘したら「様付けで呼んでいるじゃないですか」と怠そうに言い返された。

ただ義務で付けられる敬称も敬語も苛立つただけだと訴えたところ、「ならわたしが心から敬いたいと思える方に成長してください。生ま

れがどうあれ人は燃えれば灰です」と言いながら火遁を放ってきて、マダラはこの件で彼女とこれ以上対話することを諦めた。

短い師弟関係の中で、既に彼女の気が長くはないこと、面倒になったら文字通り火を吹いてくること、その火をまともに喰らえば灰すら残らないことを知っていたからだ。

かくしてうちはマダラとうちはケイカの縁は始まった。

長い付き合いになることを、両名ともまだ知らない。

長男

十一月二十七日

若君にご自宅へ招かれた。

自宅というのはつまりうちは宗家のことで、あまり気軽に足を踏み入れたい場所ではない。

マダラが世話になるのだから共に昼食でもどうか、下の弟達とも会わせたいのご意向で、わたしとしては知らんがなとしか言いようがなかったのだが、ウキウキ若君に連行されるようにお呼ばれしてしまった。

タジマ様がいらしたら嫌だな、大人しくしていなければならぬから、と思っていたがご不在で、招かれた部屋にはうちは五兄弟しかいなかった。

「タジマ様がいらつしやらないのであれば大暴れしても大丈夫ですね」と言ったところ、マダラ様に何をする気だと怯えられた。

本当に全兄弟を紹介されたのだが、若君を含め五人のうちには宗家男子、その末弟であるイズナ様（二歳）はまるで女の子のように愛らしく、唇がふるふるで、「食べてしまいたいほどですね」と言ったら青褪めたマダラ様がわたしからイズナ様を引き離した。

マダラ様に鬼か山姥だと思われている可能性が高い。食うわけねえだろ。

一方でイズナ様は何故かわたしに懐いた。人を見る目が無さすぎて今後のイズナ様の人生が不安だ。

わたしは生まれつき体温が異様に高く、常に瀕死の高熱を出している人みたいなので、肌に触れたら熱くて面白かったのかもしれない。

三男のテン様と四男のカゴメ様は最初わたしを警戒していたものの、イズナ様がわたしに触れて「あつい、あつい」とキヤツキヤしてゐるのを見て好奇心が刺激されたらしく、わたしの手にそつと触れては「熱い」「お熱があるの？」など言っていて面白かった。

そのうち「そばにしていると寒さが凌げて快適」と気付いたらしく、わたしを挟んで座り込んで「あつたかい」と言っていたのも面白かった。

わたしに気安い長男と末っ子、生きている温石だと思っっている三男と四男、腰が引けている次男のマダラ様、という布陣になった。

マダラ様は何故わたしに対し常にちよつと引いているのだろうか。ご馳走になった昼食はたいへん美味だった。

若君に「俺のぶんも食べていいぞ」と言われ、そうですか食べます、と頂いたら若君は笑い、それに釣られてイズナ様もキャツキャと笑い、マダラ様は一人でキレていた。何？ 食えと言われたら食べるが？

◇ ◆

十二月一日

師走に入った。

うちは一族は戦を生業とするが流石に毎日戦場にいるわけではなく、年末年始から雪解けまでは家にいることが多い。

単純にクソ寒い、年の瀬まで血生臭いこととしてられるか、というのもあるだろうが、雇用主である国の権力者たちが「ほら……年末年始は流石にさ……」と普段我々忍を使い捨ての手足のように使うくせに日和るため、仕事がなくなるのだ。

鍛えられた肉体や卓越した術を持っていながら傭兵として使い潰される忍、終わりのない陣取り合戦を続ける大名、果たしてどこの誰がいちばん愚かなのか。

死んでいく数と生まれてくる数の均衡が取れず、そう遠くない先に忍は全滅する気がしているし、なのに休戦する気など欠片もなく戦い続ける忍たちは敵味方で手を繋いで崖に向かって走っているようなものなんじゃないだろうか。

という話を遊びに来た若君にしたところ、マジでわかる、ほんとそれな、的全力同意をされた。

若君はこの争いに先はないと思っており、千手とも停戦したいそう

だ。
しかしたただ停戦しただけでは食い扶持を失い一族は飢えるので、大名の使い捨ての駒という今の立場を脱却し、なんかこういう感じにしたいらしい。

真面目な話になってきた後半はなかば聞き流してしまっただが、千手と手を取り合いたいんだよ俺は、というパッションは嫌というほど伝わってきた。

しかしその思いを現頭領であるタジマ様や弟達にはとても言えないのだそうだ。

それについては「そりやそう」としか返せない。

千手はあまりにうちはを殺しすぎたし、うちははあまりに千手を殺しすぎた。

わたしの父だって千手に致命傷を負わされたのだという。

恨み骨髓に徹する、ここで会ったが百年目、な相手と手を取り合っ
て仲良くしまししょう、など夢物語どころか一族への叛意と捉えられかねない。

タジマ様に言ったらよくて顔面殴打、悪くて打首獄門市中引き回し
だろう。

「実は千手の跡取り息子もまったく同じ思想を持っていた」くらいの
奇跡がなければ不可能だ。

そしてそんな奇跡は起こらない。

などと思いつつ戦闘訓練を重ね、春には自らも戦場に出る気満々の
わたしも当然愚かだ。

女らしく家の奥に引きこもっていたとしても、うちはが滅びるなら
死ぬだろう。

であればせめて戦場で、できれば炎の中で死にたい。

◇ ◆

十二月三日

マダラ様との稽古の日。

天才、麒麟児、天与の才の持ち主、なんと表現してもいいが、マダ
ラ様が優秀すぎて面白い。なんだろうこの子は、うちの祖の生まれ
変わりですとか言われても信じる。

びっくりするほど飲み込みがいい。教えたことは一度で理解し数
度でマスターするし、何をやらせてもセンスがいい。

根本的な疑問だが、わたし、要るか？

と思い本人に「わたしなんかを師匠にしなくてもあなたは強くなれると思います」と進言したところ、「少なくとも火遁でお前を越えるまではお前を師と呼んでやる」と言われた。

　　「つまりわたしと一生師弟関係でいたいということですか」と返したら怒られた。

　　「絶対お前より強くなる、兄さんの目を覚まさせる」とのことだった。若君は寝てるのだろうか。水でもかければ起きるでしょうよと言ったらますます怒られた。

　　若い子の気持ちはわからない。



十二月二十四日

今日はとても寒かった。

らしい。

　　らしいというのは年の瀬だというのに律儀にわたしとの稽古に来たマダラ様が凍えていて、凍えながらも「なんでお前はそんなに薄着なんだ」と指摘してくるまでわからなかったからだ。

　　わたしには「寒い」という感覚がわからない。常に「普通」しか外気温に対して思うところがない。

　　もともとの体温が異常に高いらしく、真冬に全裸で雪の中に放り出されても死なない自信がある。社会的には死ぬかもしれないが。

　　マダラ様は案外優しいところがあり、自分が凍えているというのに自分の上着を脱いでわたしに羽織らせようとしてきた。

　　わたしのことは好きではないだろうに甘いというか、若君に似ている。

　　わたし自身が常に発熱しているようなものなので、寒くはないのですよ、ほら温かいでしょうとマダラ様を抱きかかえたら打ち上げられた魚のようにびちびちと抵抗された。

　　こちらもムキになり「死んでも離さん」と拘束したところ、わたしが本当に全身温かいことに気付いたらしく大人しくなった。

　　どうしてお前はこんなに温かいんだ、熱い風呂から出てすぐの人みたいだ、と言われたがわたしにもわからない。生まれた時からこう

だったので。

大人しいマダラ様が面白く、そのまましばらくじっとしていた。

そのうち雪が降ってきて、わたしは全く寒くはないが流石にマダラ様をご自宅に送り届けた方がいいか、と考えていると若君がやってきた。

マダラ様の様子を見にきたようだが、その弟はわたしの膝に抱っこされており、痴態を見られたと思っただけらしいマダラ様がパニックを起こしたしを突き飛ばし、それにバチギレしたわたしがマダラ様を巴投げ、慌てて仲裁に入る若君、というドタバタを経て帰宅となった。

わたしは自宅へ帰ろうとしたのだが若君に引き留められ、そこで今日がマダラ様のお誕生日だったことが発覚した。

「夕飯が豪華だからお前も一緒にどうか」とのことで、流石にマダラ様に悪いと辞退しようとしたが、そのマダラ様が「別に来てもいい」とおっしゃり、結局ご相伴に与ってしまった。

今回はタジマ様もいらしたので無駄に緊張した。

いや嘘だ。日記の中で嘘を書いてどうする。特に緊張はしなかった。

ひと月ぶりだがイズナ様はわたしを覚えていて、「あつたかいおねえちゃん」と言いながらくつついてきて面白かった。発熱装置だと思われる感がある。

イズナ様はわたしに物を食べさせたいらしく、「はいどーぞ」と言いつつわたしの口元に無限に食べ物押し付けてきた。

困ったが、嫌ではなかった。

タジマ様に「マダラとの稽古はどうか」と尋ねられ、「マジ御子息天才っすよ、半端ねえっす」的なことを言っておいた。

タジマ様も若君も嬉しそうだったし、マダラ様も盆をひっくり返すなどはしなかったので不快ではなかったのだろう。

少しお酒も入ってご機嫌なタジマ様が、母の話をしてくれた。

母とタジマ様は幼馴染で、母は幼少から火の扱いに秀でておりタジマ様の火遁の師だった。

そこまでは既に聞いていたが、タジマ様曰く、母はとにかくマイ

ペースな人だったそうだ。

宗家の長男だったタジマ様になんの遠慮容赦もなく、火遁の稽古では幾度も死にかけてらしい。タジマ様が。

母はそんなタジマ様を見て「人はいずれ死にます、それが今であっても三十年後であつても大差ないのでは？」とか言つたらしい。

宗家の跡取りにそんなこと言うか？ 我が母ながら怖い物なしすぎる。蛮勇だぞそれは。

若君が「流石はケイカの母君ですね」と言つた。どういう意味だ、わたしはそこまでしない。

タジマ様曰く、そのマイペースさに当時のタジマ様は救われてもいたらしい。

母を、うちはトウカを見ていると、この世の大抵のことは此事で、思い悩む方が馬鹿らしいのでは、と思うことができたのだと。

その思考はかなり危険だと思う。しっかりしてほしい。自分を見失うな。

それでも母はそれなりに社交性はあつたそうなのだが、十代の半ばに戦場で類を見ないほど大きな火遁を放ち、あたりを文字通り焼き尽くし、敵方に甚大な被害を与えた。

その日以降、あまり他人と関わらなくなっていったのだという。

タジマ様との関わりも薄くなり、ただ戦場に立ち、そうでない時は星を眺めて過ごすようになった。

間もなくうちはの男性が母に求婚し、子をもうけ、それがわたしで、父は他界し、今に至る。

父が他界してからますます世間と関わらなくなったそうだ。父はいったい何者なんだという話である。

あの母に妻となることを受け入れさせた時点で「すげえな!？」という感じだ。父のことをほとんど覚えていないのが悔やまれる。

母は父のことを滅多に語らないのだが、優しく、穏やかな人だつとは聞いている。

戦に向く人ではなかったこと、けれど戦場で死んだことも聞いたがそれくらいだ。

母の信仰について知っていたのか、それをどう思っていたのかくらいは本人から聞いておきたかった。

帰り道、若君とマダラ様の家まで送ってくれた。

◇ ◆

一月二日

年が明けて二日目。

三が日のうちに宗家に顔を出さねばならず、「この風習、宗家的にもダルいんじゃないのか」と思いつつ母と共に宗家のお屋敷に向かった。

分家生まれでよかった。宗家は色々と面倒くさそうだ。

若君たちは正月らしく少しめかし込んでいて、防寒より見目を優先させているぶん寒いらしく、イズナ様がわたしを見た途端駆け寄って抱きついてきた。

完全に温石だと認識されている。

わたしも正月用の着物で行ったが、若君が語彙を尽くしてお世辞を言ってくれたのでよかった。着た甲斐があったというものだ。

テン様とカゴメ様も「似合ってる」「きれいです」と言ってくれた。

流石は宗家、躰がなっている。

尚マダラ様からは「馬子にも衣装だな」という教養溢れる最高のコメントをいただいた。

保護者の目を盗んで頬をつねっておいた。

いつかマダラ様も嫁を取るのだろうか、女性の扱いが下手すぎて結婚三日で三行半を突きつけられそうだ。

そのときわたしがまだ生きていたら、指を差して笑おうと思う。

それくらいは許されるはずだ。師匠だし。

◇ ◆

二月十四日

若君が遊びにきた。

わたしはかなり真剣に手裏剣術の稽古をしており、そこに予約もなしにやってきたため「帰れ」と言いかけたが一緒に修行することになった。

やはり若君はお強い。マダラ様は幼さもあり出力にブレがあるが、常にそつなくなんでもこなす安定感が若君にはある。

若君のテンションがやたら低いのが気にかかり、どうしました、誰かに悪口でも言われましたか、今からそいつを殴りに行きましょうかと言ってみたが「違う」とのこと、よくよく話を聞くとこれから起こるだろう戦のことで胸を痛めていたらしい。

早死にしそうなメンタリテイだな相変わらず、と思った。

どうにもならないことは考えるべきではないし、それでもどうにかしたいなら落ち込んでいないで出来ることをすべきなんじゃないのか。

必殺「自分を柵に上げての正論」を繰り出したところ、怒るかと思われた若君は「確かにケイカの言う通りだ」などと言い出したので本気で心配してしまった。

うちは宗家の長男がこんな感じで大丈夫だろうか。

次男であるマダラ様がしつかり者だし大丈夫だろう。わたしは知らん。

若君曰く、「弟たちにもお前にも死んでほしくない」だそう。

素直に、優しい人だな、と思う。

とはいえ祈りだけでは人は守れず、死ぬときは死ぬ。

「俺より先に死なないと約束してくれるか」と言われ、いや確約できねえな、と思ったので「約束はできかねます」と言った。

「んもうー」みたいな顔をされた。

「マダラたちを守ってくれるか」とも言われ、それも確約はできねえなと思ったため「努力はしますが結果は保証できません」と伝えた。

この返事にはそこそこ満足してもらえたようで、若君は笑って「お前は誠実だな」と言った。

イズナ様にも感じたが、若君もなかなか人を見る目がない。

うちは宗家の跡取り集団五名のうち二名に人を見る目がなくて大丈夫だろうか。

微妙に敵を見る目でわたしを見てくるマダラ様が一番の慧眼なのかもしれない。

それはそれとして生意気に睨まれた時にちよつと頬をつねってしまふことは許されたい。



母に似ていると言われ複雑そうな顔をしていたケイカだが、彼女は確かに御母堂に似ている、とうちはキセノは思っている。

うちは頭領の長子であるキセノは、立場上父と話す機会が多い。

大抵は戦場での立ち居振る舞いや一族の今後について、など真面目な話で、けれどたまに、父は気まぐれのように、己が少年だった頃の話をしてくれた。

父の幼馴染だったうちはトウカはそれはもう、嘘でしょ？ というレベルでマイペースな娘で、人の話を全然聞かず、気の向くまま行動し、それでいて立ち回りが上手く、大人に叱られるのはいつも父だったそうだ。

「彼女に比べたらケイカさんはかなり大人しい」と父は言った。

当時を思い出しか頭の痛そうな顔で話す父はどこか楽しそうで、ああ、トウカさんのことが好きだったんだろうなあ、とキセノは思った。

それが恋慕だったのか親愛だったのかはわからない。亡き実母のためにも深入りするところではないだろう。

それでも社交性はあったというトウカと異なり、ケイカは人間関係にあまり興味がないようだ。

同じうちはの少女たちと遊んでいるところもほぼ見かけず、一度ケイカに聞いてみたところ「シンプルに話が合わない」と返された。

母のように戦場に出ようとしているケイカと、うちはの女として内助の功を良しとする娘たちでは価値観が違う。どちらが正しいという話ではない、皆が皆ケイカのような家族が成り立たなくなる。

ケイカは母トウカよりも控えめな性質らしいが、周囲に流されないところはよく似ている。

そこがとてもいい、とキセノは思っている。

キセノがケイカと初めて会った時、彼女はキセノのことをひどく静かな目で見た。

うちの御曹司であるキセノを敬うでもなく、媚びるでもなく、かといつて下に見るわけでもなく、「ただそこにいる人」を見る目を見た。

惹かれるものがあり、一緒に遊ぼうと声をかけたら「今、火を見るから」と返されたことをキセノは今でも覚えている（ケイカは一人で焚火を眺めていた）。

「優先度で火に負けた」ことがそれなりにショックで、「ほら、火なら俺も出せるから」と豪火球の術を披露したら倍の大きさの豪火球を返されたのも衝撃で、なんだこの子、面白いぞ、と思った。

一週間後また彼女に会い、あの日の彼女のそれに勝る豪火球を見せた。

その時彼女はその大きな目を丸くして、「……面白い子ですね、あなた」と言った。

お前が言うのか、それを。

この時点でキセノはケイカのことがかかなり好きになっており、絶対友達になる、と心に決めた。

鬱陶しく思われないうギリギリを攻めて彼女のもとへ通い、とにかく火を愛するらしい彼女の火遁の修行を手伝い、うっかり離れの屋敷を半焼させ、うちのは大人に説教されている最中も説教している側が不安になるほどの堂々たるケイカの佇まいに見惚れた。

遂に彼女が「わたしなんかこんななにごうのは、あなたくらいですよ」と言った時は嬉しかったし、愛想笑いでない彼女の笑顔を見た時は万歳三唱しそうになった。

キセノはもう、自分が彼女に向ける感情が恋慕なのか親愛なのかを自覚している。

彼女が戦場に出るのは嫌だ。本当は集落で自分の帰りを待っていてほしい。

だがそれを彼女に言ったところでどういう反応が返ってくるかは

予想できるし（「は？」「嫌です」彼女がうちはにとって重要な戦力になるだろうこともわかる。

いつか、自分がうちはの頭領として認められたら。うちはだけでなく千手と、他の一族とも共存できる未来がほしい。

そのとき隣にはケイカがいてほしい。弟たちが一人も欠けることなく笑っていてほしい。

それだけがうちはキセノの願いだ。

他には何も望まない。

初陣

三月二十五日

というわけで明日、戦場デビューだ。

戦に出るわたしを心配している人ランキング堂々の一位は若君で、二位が意外にもマダラ様、三位に他の弟君たち、四位にタジマ様と続く。

母は四十二位くらいだと思う。

初陣で死ぬ率の高さを知らないはずがないだろうに、母はわたしのことを全然、まったく、ほんの少しも心配する素振りを見せなかった。あまりにもいつも通りなので「あの、わたし明日初陣なんだけど」と話しかけてしまった。

母は「そうね、頑張ってきてね」と言った。

わたしが戻ってくることを確信しているのか、戻ってこなくてもいいと思っっているのか。

流星にそれを聞く勇氣はないぞ、と思った時、「あなたはこんなところでは死なない」と母は言った。

前者だった、流星に後者ではなかったぞとテンションが上がった。「あなたはわたしの子だから、きつと火に愛されている。あの方ともいつか会える。その日まで死ぬはずがないわ」と続けられ、上がったテンションが地に落ちた。

あの方って誰だ、いや知っっているから言わなくていい。

胡散臭さと微かな憧憬を感じている、おそらく母以外は知らない神様だが、加護があるならありがたく受け取っておきたい。

だが受け取るのは加護だけでいい。「あの方」を語る時の母のような狂氣を得たくはない。

若君が、約束はできないと言っているのに再三「気を付けてくれ、無事に戻ってきてくれ」と言ってくる。

わたしと同日に初陣になるマダラ様にその心配を向けた方がいいのでは、と言ったらマダラのことは血を吐きそうになるほど心配している、お前のことも死にそうに心配だ、と返された。

他人にここまで心を砕けるのは一種の才能だと思う。

わたしが死体で戻ってきたらさぞ落ち込むだろうし、何より初陣で死ぬのは格好悪いか流石に、とも思う。

マダラ様もなんだかんで嫌な気持ちにはなるかもしれない。

あの兄弟のため、というわけではないけれども、五体満足で帰ってこれるように頑張つてこようと思う。

なお母も同じ戦場に立つはずだが全く心配する気にならない。確実に無傷で帰ってくるだろうからだ。



三月二十九日

五体満足で帰還。思ったよりすぐ戻つてこれた。

戦場のヤバさ以上に実母のヤバさを目の当たりにした初陣だった。

戦場は戦場で最悪だったのだが（想像以上にばんばか人が死ぬ、死んだ人は邪魔でしかない、血と泥と死臭で息をするだけで不快、案外暇な時間もありそれはそれで嫌など）母が本気で戦っている姿を初めて見て、なんだあの人、怖、と心底感じた。

母が集落でも周りから若干距離を取られていることは知っていた。男衆に交じつて戦う異端の女うちはだし、愛想はいいが自分から集団に交じりに行く人でもないのに特に気にしてはいなかった。

あれは距離を取る。怖いもんな。

母がうちは随一の火遁の使い手とは聞いていたし見せてもらったこともあるにはあったが、戦場で見た母の炎は凄いななんてものじゃなかった。

「火の神です」と自己紹介されたとしたら「そうでしょうね」としか言えない、そんな姿だった。

母が出てきた途端、うちは一族が蜘蛛の子を散らすように逃げた。うちはがだ。

一拍遅れて敵も退避しようとして、その一拍が致命的だった。そこからはただ一方的な暴力だった。

①母が炎を放つ。

②相手は死ぬ。

以上。

離れた場所から見ながら、なんじゃありやと思った。

わたしもそこそこ火遁は使える方だとは思っていたが次元が違う。忍界全てひっくるめてもあれだけの火遁の使い手はいないだろう。

感嘆すると同時に、あれだけの火遁の使い手たる母がいてまだ千手に勝ち切れていないのは、単に千手が手ごわいからだけでなく、母が戦力として使いづらいせいもあるのだろうなと気付いた。

火力が強すぎて、味方も、土地も傷つけるのだ。

しかも聞いたところによると、母はその火力を抑える気がほとんどないようだ。身内が危険に晒されようとおかまいなしに炎で周囲を蹂躪しているらしい。

それはもう敵じゃないか？

それでも母が戦場に居ることを許されているのは、手放すには戦力としてあまりに惜しいからなのだろう。

瞳術もなしにうちは一族と渡り合い続けているあの千手を滅ぼすため、うちはは母を利用するしかない。

その母は千手のことどころかうちはのことも、本音ではどうでもいいのだろうか。

戦う母を見ていて確信した。

あの人は周囲を燃やせればそれでいいのだ。

灼熱の中に一人立つ母は美しく、無邪気に楽しそうだった。

その気持ち、少しわかる気がしてしまった。

ちなみにマダラ様も無事に生還されたらしい。別部隊なので守るもなにもなかったが何よりだ。

これで若君が無事じゃなかったら笑えない、と思っていたが若君も無事だった。

落ち着いたら挨拶にでも行こうか。

あちらから来そうな気もするが。

◇ ◆

三月三十日

本当にあちらから来た。若君とマダラ様、二人セットで来た。

若君は「二人とも無事でよかった」と計十二回言った。

マダラ様は子どもらしからぬ神妙な顔をしていた。その顔で「お前が無事でよかった」と言った。わたしに。

正直びっくりした。思ったより好感度を稼いでいたのだろうか。

マダラ様もご無事で何よりです、と返した。本心だった。

しばらく三人で雑談した。戦とは関係のない、雑談としか言えない話をだらだらとした。

なんとなく、このうちの誰かが死んでいたら、こんな無為なことすらできなかつたんだなと思った。

若君が席を外しているとき、マダラ様がぼつりと「弟を戦場にやりたくない」と言った。

「兄さんがオレを心配してた気持ち初めて心からわかった」とも。

どう返すのが正解だったのか未だにわからない。

わたしには兄弟はいない。若君たちが弟を想う気持ちを芯から理解することはできないだろう。

マダラ様はそれきり黙ってしまい、わたしとしたことが「何か返した方がいいのでは」と考え「そうですか」「弟さんを戦場にやりたくないんですね」「ですがそれは難しいでしょう、あなたがそうだったように」と言った。

オウム返し十話の否定、という考え得る限り最悪の返答だった。まだ壁に話しかけた方がマシだ。

案の定マダラ様は怒りすらしなかったので、「いや流石にこれは」と思い、「千手と手を取り合い、戦そのものをなくせば弟さんは戦場へ行かなくて済みますね」と付け足した。

我ながら実現可能性の低い提案をしてしまった。しかもさも「わたしのオリジナルアイデアです」みたいな澄まし顔で言ってしまった。がこれは若君の考えだ。思想の盗難も罪になるのだろうか。

マダラ様はとてもびっくりした顔をして、その顔は年相応の気の抜けた顔だったのでそれはよかったのだが、わたしに「できると思うか、そんなことが」と言った。

ぜってームリだと思う。

思ってるんで！ 千手を皆殺しにするまでわたしの夜は明けないんで！」と叫ぶのもどうかと思うし、マダラ様に「は？ そんな勘違いなんてするわけがないだろうが、馬鹿か？」とか言われた日には自分がマダラ様に何をするかわからない。

それにわたしは千手と和解したくないわけではないのだ。憎くは思っていないから。

ただ、無理だろうなあと思っただけ。

内心は戦に倦んでいて、けれどどうしようもないから何も考えないようにして戦場に出ている者は探せば結構いるのかもしれない。その層が多数派になればあるいは、とも思うが、問題はその時にはもう色々と手遅れになっていそうなことだ。

緩やかな衰退に向かう忍世界を留めるには、やはり若君の言うように争いをやめ和解するしかないのだろうか。

そういう、他人とわかり合うとか手を取り合うとかみたいなのは正直苦手だ。

これは勘だが、マダラ様も苦手だと思う。

といってもマダラ様はまだ幼いので、これからコミュニケーション強者に成長する可能性も秘めてはいるけれども。

千手との和解は無理だと思う、思うが、そうなればきつと若君とマダラ様は喜ぶのだろう。大切な家族が死なずにすむ世界になるのだから。

夢物語だとしてもそれは良い夢だと思う。わたしにできることはおそろくないが、影ながら応援したい。

などと考えていたら夕刻になりタジマ様に呼び出された。

なんだよ……最近敵以外は焼いていないし怒られる筋合いはないぞ……とビビりつつも参上したところ、怒られるどころか褒められた。

要約すると「初陣にもかかわらず実に堂々とした立ち居振る舞い、まるで歴戦の者の如くであり、戦場で揮われた火遁は流石の一言に尽きる」だそうだ。

堂々として見えたのは戦場よりも母にビビっていてそれどころで

はなかったからだろう。

火遁についてはありがとうございます。初めて「敵」に火遁を行使したところを見られていたのだろうか。

あのとき近くにタジマ様はいなかったと思っていたが、いらしたのか。それとも部下からの伝聞だろうか。どちらでも構わないが。

褒めるためだけに呼んだのかと思っていたら、今後のわたしの意思確認でもあったようだった。「引き続き現場に出すつもりだけどオツケー？」と聞かれたので「オツケー」と返した。

実際はこんなフランクではなかったが内容としては同じだ。

これを書くとき自分が狂人のようでイヤなのだが、敵とはいえ人間を傷つける不快感よりも、広い場所で思うさま火遁を揮える喜びの方がわずかに、ほんのわずかになのだけれど、大きかった。

また戦場に出たい。

ただこれだけは確かなのだが、わたしは人を殺すのは好きではない。

殺すのが好きだから燃やすのではないのだ。火が好きで、燃やすのも好きで、燃やした結果人が死ぬのだ。

うちの者として戦場に出ている以上許されないが、極論、敵を燃やせるならその敵が死ななくても構わない。わたしが見たいのは「火が燃える」という過程であり、結果死んだ、という終わりには興味がない。

「火遁をブチかませるのが楽しいので戦場怖くないですよ、だから心配しなくていいんですよ」と若君に言おうか言うまいか悩んでいる。多分ドン引きされるだろうなという思いと、それで若君に嫌われるのはちよつとなあ、という思いがある。

嫌われるのを回避しようとする相手なんて若君くらいしかわたしにはいない。

そんな貴重な相手を引かせることもないだろう。

◇ ◆

七月八日

気持ちのいい快晴。青い空白い雲、輝く緑。弁当でも持って散策に

繰り出すにはいい日和だろう。

だというのに戦。

ここ最近ちまちました小競り合いが多い。

規模の小さい戦いにはわたしのような若輩が駆り出されることが多い。大規模な争いに比べればまだ危険度が低いので、死なせずに経験を積ませることができからだ。

主戦力をいたずらに疲弊させたくないというのもあるだろうが。

ただ、危険度はあくまで「まだマシ」であって安全なわけではない。死ぬときは死ぬし、実際、わたしと同じ年くらいの分家の子がわたしの傍で死んだ。

いくら他人とコミュニケーションを取るのが下手なわたしでも、戦の最中は同胞を守ろうとはしている。今回は守れなかった。

いちいち同胞の死に動揺していたらその隙を突かれて今度は自分が死ぬので「死んだ！ はい次！」くらいの意識の切り替えが必要だ。写輪眼を開眼している同胞が死んだら、その眼が敵に渡らないよう遺体を燃やすか、最低でも眼を潰せと言われている。

わたしの傍で死んだその子は写輪眼は持つておらず、遺体を家族のもとへ返してあげられればよかったのかもしれないが、無理だった。

戦場で死んだら遺体はたいてい戻ってこない。持つて帰るだけの余裕がないからだ。身も蓋もないけれど、遺体は重くて嵩張り、腐敗して異臭を放つ。持ち帰りに適しているとはとても言えない。

せめて、と身体の一部を切り落として持ち帰る場合もあるが、今回はその余裕もなかった。

追撃してきた敵を焼きながら、なにやってんだろなあわたしたち、とは思った。

それはそれとして火は美しい。どんな用途だとしても火は火だ。

夕飯は遅くはなったが自宅で食べることができた。

昼間に敵を焼き、刺し殺しもした手で米を洗い、野菜を切り、肉を焼く。

「食べ物粗末にしてはいけない」「命を頂いているのだから」と教わるのに、同じ口で千手死すべしと言う。

千手一族も同じなのだろうか。同じようにうちはを殺し、同じ手で食事をして、うちはを呪っているのだろうか。わたしたちは一体何をやっているのだろうか。

◇ ◆

七月九日

昨日の日記のわたしが感傷的でびっくりした。うちは・センチメンタル・ケイカに改名した方がいくらかのセンチメンタルっぷりで恥ずかしい。

わたしたちは一体何をやっているのだろうか、ってそりゃ戦をしているのであり、戦というのは参加者全員クソバカの終わってる祭典だ。参加したくないのであれば黙って引っ込むか死ぬか戦自体を終わらせるかであり、若君は、それともしかするとマダラ様は最後の選択肢を選ぼうとしている。

わたしにはそれだけの希望も熱量もない。

ただ、いつか戦が和解によって終わる日が来るとしても、その日までにうちはが負けて滅亡しては意味がない。

うちはが存続できる程度には戦で活躍しようと思う。どうせ千手は手ごわい、わたし一人が頑張ったところで滅ぼせはしないのだから。

夕刻にマダラ様がわたしに会いに来た。

修行の日でもないのに珍しいと思いい出迎えたら怪我をしていて驚いた。

「怪我してるじゃないですか」と言ったら「それはお前もだろうか」とキレ気味に言われた。

なんならわたしのほうが重症なのでぐうの音も出ない。

マダラ様はかすり傷と言い張れる程度の負傷だったが、わたしは「あと一瞬避けるのが遅れていたら片腕がもげていたぞ」と同じ部隊だった人に言われた程度だ。

わたしはもうじき十歳になる。火遁という体格に関係なく使える得意技があつて油断していたが十歳というのは成長途中であつて、大人より小さくて細くて力が弱いのだ。

ただでさえ千手はよりはより身体能力に富むのに、その千手の大人に接近を許してしまった。接近戦だとわたしは弱い。そこをもつとちゃんと自覚しないと次かその次あたりの戦でわたしは死ぬだろう。柄にもなく神妙な顔をしていたらしく、マダラ様に「辛気臭い顔をするな」と怒られた。

確かに沈んでいてもなんにもならんと思いつつ殺られかけましたよ」とできるだけ軽薄に言ったところ「へらへらするな」とまた怒られた。どうしろってんだと思いきやマダラ様をつねったがマダラ様はそこでは怒らず、黙ってわたしにつねられていた。

なんなんだ。頼むから被虐趣味に目覚めたとか言わないでほしい。わたしのせいだった場合、若君に合わせる顔がない。

尚その若君は今、集落にはいない。わたしやマダラ様が駆り出された小競り合いとは別の戦に出ている。

マダラ様はわたしの傷を検分し、「無理はするな」と言い置いて帰った。

わたしの様子を見に來ただけだったようだ。

マダラ様、わたしの母より優しいかもしれない。母がわたしの傷を見た第一声が「血が止まらない時は傷口を焼くといいわよ」だったことを考えると慈愛に満ちている。

ただ母のアドバイスには「確かに」と思った。

今後、負傷時は積極的に焼いていきたい。



うちはケイカの最大の長所はなにか。

そう問われれば大抵の者は「火遁の才」と答えるだろうし、彼女の幼馴染である宗家の長男は「自分を持っているところ」と返すかもしれない。

マダラは「ふてぶてしき」だと思っている。

彼女と頻繁に関わるようになり、会うたびに思うが、ケイカはいつそ腹立たしい程に堂々としている。常に。

口数少なく表情も平坦で、鷹揚かと思えば気は短く、マダラは何度彼女に頬をつねられたかわからない。

別に避けようと思えば避けられるし、やめろ、と宗家の者として強く言えばケイカは二度と頬に触れることすらしなくなるだろうとは思う。

文句を言いつつもつねられてしまうのは、彼女が手加減をしていることがわかるからだ。

つねると言っても痛みはほとんどない。子ども同士のじゃれ合いにすぎない。

そしてマダラと対等にじゃれ合おうとする子どもは、家族を除けばケイカしかいなかった。

マダラはケイカを好きではない。

好きではないが、傷ついたり死んだりしてほしいと思っていない。

まだ彼女より大きな豪火球も出せていないし、何より、あの優しく甘い兄がきつと泣く。

ケイカのことを「あつたかいおねえちゃん」と呼ぶ末弟のイズナも泣くだろう。

初陣が決まった時、ケイカは軽く「そういえば十日後に戦に出ます、わたし」と言った。

あまりに何でもなさそうに言うものだから、同日に初陣を控えていたマダラはがっくりした。生きては戻れないかもしれない肩に力を入れていた自分が馬鹿のように思えた。

だから彼女が軽くはない怪我をして戻ってきた時、自分でも驚くほど動揺した。

なんだお前、殺しても死ななそうな顔をして、そんな、一歩間違えたら死んでたような傷を負って帰ってくるのか。

兄さんにあんなに思われているくせに。

オレの師匠のくせに。

ケイカは年上でも子どもで、少女だ。

宗家の子として守られる自分よりもよほど死にやすい。

そう改めて思い至り、マダラは、心底早く大人になりたいと思った。大人になって、強くなって、どんな敵にも負けないようになる。自分の意志を通せるようになる。

家族を守るようになる。

そうしたらケイカのことも、ついでに守ってやってもいい。

庇護

八月二十日

クソ暑い。

らしい。

外気温よりもわたし自身の体温の方がずっと高いからか、暑いとは思いますがマダラ様が言うようにクソ暑いとまでは感じない。

マダラ様はどうやら暑さに弱いらしく、ここ最近はわたしと会うたび「暑い」「夏なんて嫌いだ」「お前が涼しそうで腹立つ」、遂には「火遁以外の修行をしたい」とまで言い始めた。

暑がるのは勝手だが、本来「マダラ様に火遁を教える」ことを命じられているわたしだ。現時点で火遁以外のことも教えてはいるとはいえ、火遁完全抜きコースへの移行は流石によろしくないだろう。

というかもしタジマ様が許したとしてもわたしは嫌だ。火遁から逃げるな。ちよつと暑いくらいなんだ、耐えろ。うちは宗家の子だろうが。他にはなにも愛さなくていいから火だけは愛していけ。

しかし今年の暑さは異常と言えるレベルらしく、我慢強い若君まで「命の危険を感じる」などと言っている。

最近の若君の趣味は、わたしとマダラ様の修行を少し離れたところから見守ってニコニコすることなのだが（鬱陶しいのでやめてほしいが、やめろと言ったら悲しげにされたうえマダラ様に蹴られたので継続されている）、その若君が今日の修行中にストップをかけてきた。「いったん川にでも行って涼もう、マダラが倒れる」と言って。

まだやれる、など言って強がるかと思われたマダラ様は黙って若君に従ったので、相当暑さが堪えていたようだ。

師匠だというのにマダラ様の体調を気遣えずに申し訳ない、

と思うようなわたしだったらもう少しマダラ様に懐かれていたのだろうか、残念ながらわたしは性格がよくないのだった。なので「しんどいならしんどいと口に出した方がいいですよ、言わないと伝わらないので」とアドバイスしておいた。

案の定蹴られた。

やり返されるとわかっていのに何故こうも反抗してくるのだろうなあとマダラ様を逆さ吊りにしながら思った。

マダラ様はどんどん強くなっており、正直火遁抜きでは勝てなくなってきた。成長速度が尋常じゃない。

だがわたしと戦う以上「火遁抜き」などあり得ず、今回は火牢の術を応用してマダラ様の四肢を拘束し、逆さ吊りにしたのち俵担ぎで移動して川に放り込んだ。

その間のマダラ様の罵詈雑言たるや弟に甘い若君がガチ説教するほどで、マダラ様は「お前のせいで兄さんに叱られた」と余計に拗ねた。

若君は相当マダラ様に慕われているようだ。羨ましくはないが微笑ましいと思う。

川で魚を獲った。

魚を獲るのが一番上手だったのは若君で、それを術で焼くのが一番上手かったのはわたしだった。

マダラ様も焼こうとし、黒焦げにしたり生焼けにしたりしていた。小さな川魚にうまいこと火を通すのは繊細な火力の調整が必要だ。わたしはそれを難しいと感じたことはないが、何も考えずぶっ放すよりは難易度が高いとは思うし、マダラ様にはまだ難しいだろう。悔しかったら猛暑の日でも修行に励むがいい。

若君よりわたしより色々な面で劣ることをマダラ様は結構気にしているらしかった。生焼けの魚をわたしが増加熱しているのを見ながら、「たった三歳しか変わらないのに」と深刻なトーンで言っていて笑ってしまった。

若君には「お前が笑うのは珍しい」と驚かれるしマダラ様には何かおかしいとキレられるしだったが、面白いことを言うマダラ様が悪い。

八十歳と八十三歳くらいになれば誤差かもしれないが、わたしたちの年齢で三歳違いというのはネズミと成犬くらいの差がある。それをたった三歳と捉えるのは自分に厳しすぎる。向上心があるといえは聞こえがいいが、マダラ様のそれはただの自傷だ。

落ち込んでいるマダラ様に「不器用なくらい真面目なところ、お兄様にそっくりですね」と言ったら驚いていた。若君は何故か照れていた。褒めてはいない。

驚いた顔のマダラ様がかわいく見え、「あなたは自分で思っているよりも強くなっている」「師匠のわたしにはわかります」「そのうち若君よりもわたしよりも強くなりますよ」と伝えた。

素直に照れるなり喜ぶなりすればいいのに、マダラ様は「そういうことはもつと早く言え」「言わないとわからないからな」と言っていて、さつきわたしが「言わないと伝わらない」と言ったことへの意趣返しだなとわかったものの、ややイラついたので頬をつねっておいた。若君は止めてはこなかったのでこの程度は兄的にもOKらしい。「このまま修行したら、お前より火遁がうまくなるか」ともじもじ聞かれ、おつマダラ様にしては愛らしいじゃないか、かわいげがある、と思いつつ「それは無理ですね」と即答したら怒りの体当たりをしてきたため川に放り込んだ。

ここまで書いて思ったのだが、いつかマダラ様に復讐されそうで怖い。いや怖くはないが、そうなったら面倒だなと思う。だが宗家の子とはいえ三つも下の子に今更媚びる気も起きず、上下関係が逆転するまではこの感じで行こうと思う。復讐されそうになった時のことはその時考えよう。なんだろう、足とか舐めたらいいんだろうか。

また拗ねたマダラ様に若君が「そんなに焦ってなんでもできるようなろうとしなくていい、俺たちがマダラを守るからな」と慈愛に満ちた顔で言っていた。

俺「たち」かよと思つたものの否定するほどではなく黙っていたが、マダラ様は不服そうだった。

弟に戦場に出てほしくないと言っていたし、守られるより守りたい派なのだろう。

そのあたり、若君の血を感じる。

他人にいまいち興味を持たないわたしからすると、それだけで凄いいことだと思う。

だがマダラ様にはまず自分の身を充分に守れるようになってもら

いたい。兄や師匠より先に死ぬほど不孝なこともないだろうから。

◇ ◆

八月二十五日

若君に「今日、一緒に昼食を食べないか」と誘われ、のこのこ宗家に向かったところ若君の十歳記念祭開催中だった上にタジマ様や宗家に近しい錚々たるメンバーまでいた。

反射的に帰宅しそうになったものの「まあまあまあ」などと宥められ、普段着かつ手ぶらでうちは跡継ぎの誕生日祭に参加しタダ飯を食らって帰ってきてしまった。我ながら大物すぎる。

今日が若君の誕生日だということを完璧に忘れていたわたしも二パーセントくらい悪いかもしれないが、それをわかったうえで何も告げずわたしを招いた若君もひどいと思う。分家の小娘に恥をかかせて楽しいのか。別に恥かいたとは思っていないが。

わたしがやってきたことにマダラ様あたりは怒るかと思ったが、わたしを見て一言「来たか」と言っただけでその後特に何のリアクションもなかった。いちいち怒るのはエネルギーの無駄だという真理に気付いたのだろうか。

マダラ様の弟君たちは愛想よく迎えてくれたが、冬場はあんなに懐いてくれたというのに近くに寄ってこなかった。常に発熱しているわたしの傍にいるには辛い季節だからだろう。

ということ嫌がらせとしてマダラ様の真隣に陣取った。マダラ様の語彙から「暑い」と「熱い」以外消えたので効果はあったようだ。

忍の子は「まず年齢一桁を越えられるか」がその後の生存率を占う分水嶺みたいところがある。

最速で六歳から戦場に出る忍の子は、大抵七つとか八つの頃には敵に殺されて死ぬ。

そこで死ななかつた、才能と実力と運がある子はその後もなんだかんだ生き延びる率が高いようだ。

わたしもつい先日、十の誕生日を迎えたばかりだ。若君がそのとき異常に喜んでいたためちよつと引いた。親かよ。わたしの母はいつも通りだったので温度差で風邪を引くかと思つた。わたしに「温度

差」はよく理解できないが。

宗家の長男が年齢二桁になってよかつたね、ということ、集落全体の雰囲気はなんとなく明るい。毎日のように誰か死ぬので常に薄曇りな一族にしては珍しいことだ。毎日誕生祭を開けばいいんじゃないか？

というか失われる命が多すぎる。遺体が一部でも戻ってきた同胞はきちんと埋めるし、そうでなくても墓は作るの、うちは一族の墓地は日に日に埋まっていくばかりだ。そのうち埋葬ペースが足りなくなるんじゃないか。

減っていく戦力に対して一族が取っている手段は「補充する」、つまり女に子を産ませることであり、わかりやすいがそんな対症療法でいいのか、いつか詰むぞ、という気がしてならない。

そもそも子どもが死ぬのは、生き残るために必要な実力がないのに戦場に放り出されるからだ。それまでに一通りの訓練はするが当然個人差があり、若君やマダラ様のように才能溢れる子からわたしのようない芸特化型、正直忍には向いてないよねキミ、な子まで幅広い。そして今の育成体制では「忍に向いてない子をなんとかする」ことまではできない。

結果、本人の才能と運にほぼ全振りすることになり、それらが無い子はあつさり死ぬ。

子どもが死ぬことは当然のこと、なんなら誉れとすら思われているので、それを根本的に改善しようとしている大人はいない。いるのかもしれないがわたしは知らない。

それを憂いているのが若君だ。

その若君もやつと十歳になったばかりであり、子が死ななくて済む世界を作りたいなんて寝言を堂々とと言える立場にない。

あと五年くらい生きてくれれば発言権も出てくると思うので、若君にはなんとか十五歳くらいまでは生き延びてほしい。

◇ ◆

十二月二十四日

つい先日、若君の誕生日を迎えたばかりな気がするが光陰矢の如し

とはよく言ったものであつという間に冬になり、マダラ様が今日で八歳になった。

奇跡的に今日がマダラ様の誕生日だと覚えていたわたしは「マダラ様も八年生き延びたんだなあ」と思いつつ裏庭で芋を焼いていた。

芋のことは別に好きでも嫌いでもない。芋もわたしのことを好きでも嫌いでもないだろうが。

ただ芋を焼くと合法的に焚火ができ、火を見ていられるので焼き芋は好きだ。

母の信仰は理解できないが、それでも火ほど美しいものはないなあ、火LOVE……と思っていたらマダラ様がやってきた。

わたしが芋を焼いているのを見て怒り出したので、そんなに焼き芋が嫌いだったのかと思つたがそうではなく「オレの誕生日だというのに何故訪ねてこないのか」とお怒りだった。

急にデレるじゃん。

と言つてもよかつたが余計怒らせるだけだろうというのはわかつたので、すみませんねと謝りちようと焼けた芋を片手にマダラ様と共に宗家へ向かつた。

空いた片手をマダラ様に差し出してみたところ、握られたので驚いてひっくり返りそうになった。デレ期か？

わたしの手を温石代わりにしただけだろうが貴重なデレを無下にする気もせず、そのまま手を繋いで歩いた。

わたしたちを出迎えた若君がニッコニコで不気味なほどだった。わたしとマダラ様が仲良しなのが嬉しかったらしい。

という日記をわたしは今、何故かマダラ様たちの寝室で書いている。

例のごとくタダ飯をかつくらい、ごつそさん、じゃあそういうことで、と帰ろうとしたところイズナ様に帰らないでと生き別れになる恋人のごとく引き留められたのだ。

イズナ様の主張を要約すると「夜寝るときクソ寒いから一緒に寝てほしい、発熱型抱き枕になってほしい」だった。

自分の要求を真つすぐ相手に伝えるその態度、天晴である。イズナ

様は大物になると確信した。

イズナ様に比べると主張が控えめな三男・四男のテン様・カゴメ様もイズナ様と同意見だったらしく、帰らないで、一緒にいて、とまとわりついてきた。

わたしは自分のことをクールキャラだと思っていたのだが誤った自己認識かもしれない。小さいのにちよろちよろまとわりつかれ、動揺してしまった。あの時の気持ちはなんだったんだろう。

しかし流石に泊まるのはタジマ様の許可が下りないだろう、と思っていたらあつさり下りた。

頭領にいいですよと言われたらわたしに拒否権などない。

家にいるだろう母宛に「今日は宗家に泊まります」と使いが出され、食事どころかお風呂までいただいでしまった。寝巻も借りた。

さつきからイズナ様がわたしの横腹にしがみついて無限に話しかけてくるため日記どころではない。文字もブレブレで意地で書いているようなものだ。

ここまでにして今日はもう寝ようと思う。イズナ様が寝かせてくれるかわからないが。



十二月二十五日

若干寝不足な一日だった。昨夜わたしを熱源と見なしたイズナ様に敷布団にされて眠りが浅かったためだ。

イズナ様は確かもうじき四歳になるはずで、マダラ様に比べれば小さいが一晩中腹の上で寝られて平気かというところと全く平気ではなかった。漬物石に押し倒される悪夢を見た気がする。

更に右脇にテン様、左脇にカゴメ様が一分の隙もなく張り付いていたため寝返りすら打てなかった。

マダラ様は「宗家の男子が女に甘えるなんて」など大人びたことを言いながらやや離れたところに布団を敷いて眠りについた。が、寒さとわたしという熱源には逆らえなかったらしく、朝起きたら弟君たちと一緒にわたしに張り付いていたし寝言で「あつたかい……」とも言っていた。

目を覚まして自分がわたしに張り付いていると自覚した瞬間のマダラ様の顔は見ものだった。向こう十年はネタにしてからかつていく所存だ。

なお若君は最初から別室で寝ていた。同い年の女子と同室で寝るのはちよつと……だそうだ。若君にまでしがみつかれた場合本気で圧死していた可能性があるのよかつた。

その若君は弟たちがわたしにまわりついて寝ているのを確認しやけに上機嫌だった。わたしと弟たちが仲よしだと報奨金でも出るのか？ 一部でいいから分けてほしい。

すっかり朝ごはんまでいただいた。

マダラ様はずつと「別にお前に好意があるからくつついてたわけじゃない、寒さを凌ぐためだ、体調管理も忍の仕事のうちだから」などどぐだぐだ言っていた。

もしかしなくてもマダラ様、めんどくさいな？

「いずなはおねえちゃんのことすぎ」と甘えてくるイズナ様のことを見習ってほしい。

なおイズナ様のこの台詞も十年後くらいに持ち出してからかい倒す決意である。

◇ ◆

一月六日

三が日もとうに明け、今日も今日とて修行。

修行不足Ⅱ「死」なため嫌でもやらざるを得ない。

マダラ様と朝から稽古。

マダラ様と師弟関係になつて丸一年以上経つた。

口ではなんだかんだ文句を言いつつも稽古の日には必ず時間ちようどに来るし、態度もとても真剣だ。

わたしへの敬語が一切なくなったことには「ガキが……」と思わなくもないが、そのクソガキ感を補って余りある真面目さがある。

そのあたり褒めておくか、と思ひ稽古後褒めてみたところ「別に……普通だし……」と可愛くないことを言いつつ可愛い顔をしていた。

若君がマダラ様に甘いのはこのあたりに兄心を擦られているものと思われる。

わたしにも弟がいたらこんな感じなんだろうか。

なんとなくマダラ様がわたしに心を開いてきた気がする。

気がするレベルなので気のせいかもしれないが。

稽古が終わったあとはさっさと帰っていたのに、最近のマダラ様はわたしと雑談をしたがる。「寒いから」とくつついてくるのにも抵抗がなくなってきたようだ。

ただイズナ様たちと違い、周囲に人がいるときは絶対に寄ってこない。わたしと二人きりになると寄ってきて、そつとわたしの手に触れ、照れた顔をしたりなどしている。

あざとい。

野良猫に懐かれたようで悪くない気分だが、あざといと思う。無意識でこれならマダラ様は結構な魔性だ。この魔性さに引つかかる人がいないよう祈る。

今日も稽古後、マダラ様は「風除けになれ」と言いつつわたしの背に隠れるように張り付いていた。

わたしからは特に話したいこともなかったので、ぼうつとしつつ火のことや炎のことなどを考えていたのだが、マダラ様が猛烈に「話したいことがあるからそつちから『どうしたんですか？』と聞け」というオーラを出し始め、全くめんどくせえなあこのお子様はよおと思いつつ「どうかしましたか、マダラ様」と尋ねた。

聞いて差し上げたというのにもじもじしているのでわたしの心の導火線との耐久戦になったが、着火される前にマダラ様が「テンのことが心配だ」と言った。

そういえば三男のテン様も戦場に出る年齢になったんだった。年が経つのは早い。

テン様は幻術の才があるが、体術はあまり得意ではないらしい。

戦場では結局フィジカルがものを言うところがあるので、小手先の術が巧くても肉体的に虚弱な者は容赦なく死ぬ。

わたしはそこを攻撃特化型の火遁でゴリ押しすることなどでなんとか

しているのだが、テン様にそれを求めるのは酷だろう。

マダラ様はテン様が心配で心配で仕方ないらしい。

「あいつに万一のことがあったら、オレは……」と言って苦しそうな顔をした。

兄である自分が守りたいのは山々だが、宗家の兄弟は基本的に同じ部隊には配属されない、らしい。

部隊が敵の急襲を受けるなどして壊滅した場合、後継候補がいつぺんに死ぬことになるからだ。リスクの分散は大切という話。

一人っ子のわたしにはわからない苦悩があるんだろうな、と他人事モードのわたしをマダラ様が見つめた。

わたしに穴を開ける気か？ という勢いで見つめられ、「なんでしようか」と尋ねざるを得なかった。

案の定「テンを守ってほしい」と言われた。

若君といいマダラ様といい、何故わたしに弟の庇護を依頼してくるのか。

無理だから。

死ぬときは死ぬから。

それにマダラ様ももうわかっているでしょう、戦というのはノールルの殺し合いであり、部隊を組んではいても敵が来れば混戦状態になるし、仲間を気遣える余裕が常にあるわけでもない。そもそもわたしのファイトスタイルは敵を屠ることに向いていても味方を守ることにには不向きです。

だから無理。テン様には自己責任で戦場に立てと言ってください。と、何故言えなかったのか。

マダラ様の小動物めいた黒い瞳に幻惑でもされたというのか、火以外に友達がいらないことに定評があるこのわたしが。

どうして「はい」って言っちゃったかなあ。

言ったわたしが一番びっくりしたし、マダラ様もびっくりしていた。いやあなたはそんな驚くなよ、ダメ元で言ったのか？

約束できないことは約束しない、がわたしのモットーだ。

逆に言えば約束してしまった以上、守らなくてはわたしの沽券にか

かわる。

守るといふのはどれくらいの範囲を差すのだろうか。多少怪我をするくらいは無傷と同じなので「生きていればよし」くらいのガバガバ判定であることを祈る。

マダラ様が帰り際に蚊の鳴くような声で「ありがとう」と言っていた。

◇ ◆

三月十四日

春だ。

つまり戦の季節である。

冷静に考えるとそんなことはないのだが、この時期になると千手を筆頭に忍たちが活性化し始めるので戦うほかない。

人が蟻を見下ろすように、人間を見下ろす上位存在がいるのであれば、「春だ！ 戦うぞ！」となっている人間の愚かさに笑うどころか普通に通引している気がする。

×様と×やらも、住処だという星から我々にドン引きなのだろうか。母が「×様は人間にはそもそも興味がない」的なことを言っていたから、視界にすら入っていないのかもしれないが。

戦というのは前フリがある場合と、「今すぐ着替えて戦場までダツシユな」と唐突に言われる場合とがある。

次の戦は前者のパターンで、わたしはあと十日くらいしたら駆り出されるらしい。

そして、どうやらそれが、テン様の初陣になるらしい。

わたしのような一般うちには比べれば、宗家の子であるテン様は周りの大人が守ろうとするだろうから、安全性はまだマシのはずだ。

ただし「アイツ守られてるな、どうやらうちはの中でも良いポジションの子らしいぞ」と敵にバレたが最後一斉放火を浴びるので裏目に出る場合もある。

わたしはそんなテン様のことを「守る」と約束してしまったのだった。マダラ様に。

無茶言うなよと今でも思うが約束してしまった以上は仕方がない。

できることをするだけだ。

というわけでタジマ様に「わたしをテン様と同じ部隊にしてください」と言いに行った。

別部隊では守るも何もないからだ。

タジマ様には「なんで？」と言われた。いやこんなフランクではなかったが。

それに「テン様を守るとマダラ様と約束してしまったので」と言うのは癪に障ったので、「いえ……別に……」と一族の長にとっても取る態度ではない返答をしてみました。

理由がないのであれば承諾できない、と言われるだろうなく、と思っただが承知してくれた。

なんでだ。いいのか？

頭領がいいと言えはいいのだから、頼みに行ったわたしが疑問に思うのもおかしい話だが。

タジマ様に意味深に「あまり無理をしないように」と言われた。

戦場で無理をしないなんて「その場の誰より強い」レベルにならないければ不可能だ。無理しなければ普通に死ぬ。というわけで次の戦でも無理をしていく心構えである。

死ななければいいのだ。

◆ ◆

三月二十四日

明日がテン様の初陣である。

ついでに言うとなたしも出陣する。流石に慣れてきたので「はいはいまた戦ね」みたいな気持ちだ。

「戦の雰囲気慣れてきて油断しかけた頃に死ぬ者が多い」と縁起の悪すぎる豆知識を母に授けられたのでわたしのテンションも下がる一方だが。

そのわたしより更にテンションが低い若君とマダラ様がセットでわたしを訪ねてきた。

二人は明日の戦には出ない。戦のたびに全員が出払うわけにもいかないの、毎度頭領だったりその側近がメンバー選別と部隊編成を

している。

わたしとテン様が同じ部隊であること、それをわたしが希望したことが若君たちの耳に入っていた。

タジマ様め……漏らしたな……と舌打ちしそうになったが、別に口止めもしていないので憤る権利は特になかった。

マダラ様が叱られた小僧みたいになっただけだったので「どうしました。おねしょでもしましたか。別に気にするほどのことでもありませんよ」と言ったら食い気味に否定された。結構元氣じゃねーか。

それからの二人の話を総合すると、

マダラ様がわたしにテン様を守れと言った↓わたしがそれを了承した↓わたしがタジマ様にテン様と同じ部隊にするよう進言した↓テン様を傍で守るためにそうしたことは明らか↓テンを守るために無茶をするのでは……ケイカに何かあったらオレたちは……らしい。

違うから。そういうのじゃないから。

確かに部隊編成のリクエストを出したが、それは「テン様を我が身を犠牲にしても守る」なんてしゃらくさい決意があるからじゃない。一度守ると約束しておきながらそれを反故にしたら、わたしが無能な人間みたいで嫌だからだ。つまりわたしのプライドの問題である。

テン様のためでなければあなたたち兄コンビのためでもない。

故に、仮にわたしが明日の戦で死んだとしても、それはわたしひとりの責任であってあなた方は関係ない。

本当に勘違いしないでほしい。

と熱く言ったのだが兄コンビは一ミリも信じていない顔をしていった。

やめろ、わたしを美談として消費するな。

別にあなたたち兄弟のことなんてどうでもいい、とまでは言わないし、手が空いていれば助けてもいいくらいには思っているが、身命を賭して盾になりたいとまでは断じて思っていない。断じてだ。

明日戦地に行く人間の前でそんな辛気臭い顔をするな、帰れ帰れと

兄弟を追っ払った。

マダラ様が「無事に帰ってきてほしい」としおらしい顔で言ってきたのが本当に嫌だった。伏線を張るな、逆に生きて帰ってこれない気がしてくるだろ！

嘘でも無事に帰ってくると言わなければ梃子でも動かない様子だったので、マダラ様に「ちゃんと戻ってきますよ」と言っただけ指切りげんまんまでした。

こんな時間まで日記を書いている場合ではない。明日に備えて早く寝よう。

◇ ◆

四月二十日

アホみたいな大怪我をしてしまった。

マジで死ぬかと思った。

この怪我を負ったのは昨日今日の話ではなく、約一月前、戦に出た日だ。しかも初日だった。

マダラ様に「ちゃんと戻ってきますよ」と言い放った翌日に大怪我をした訳で、流石のわたしも顔真っ赤である。

無事とは言い難いかもしれないがちゃんと戻ってきたのだから約束を破ったわけではない。それにテン様もほぼ怪我もなく元気でいらっしやる。

未だに布団から碌に起き上がれない。とはいえじつとしていると暇で仕方ないので、医者目を盗んでこうして日記を書いている。

正直、こうして半身を起こすことすら辛い。胸から腹にかけて斬られたからだ。

防具がなければ即死だったと思う。

戦場で大怪我を負った者は捨て置かれることが多いのだが、わたしの部隊の人はわたしを見捨てず抱えて自陣まで戻り手当をしてくれた。そのまま強制送還となったわたしはなんでだか一族の中でも腕利きの医者に見てもらったことができ、一命を取り留めた。

傷は浅くはなかったが手足はちゃんとついているし内臓もギリ無事ということで、十分に休養すればまた戦力になるだろうとのこと

だ。

我ながらナイスガッツと言わざるを得ない。

死んでなければセーフ理論でいけばこんなもの無傷と同じだ。

暇で仕方ないとはいっても、日中は案外賑やかだった。

呼んでもないうちは宗家の皆さんがお見舞いに来たからだ。

宗家の皆さんと言っても長男と次男と三男の三名なのだが、それだけ来れば充分だ。なんで次期頭領とその弟とその弟がお見舞いに来るんだ、わたしは何者だという話である。

若君は伏せるわたしを見て「余命三日……」みたいな顔をするしマダラ様も顔面蒼白だしテン様に至っては号泣である。

あまりに陰鬱に見舞われたため「わたしは死ぬのか？」と思った。怪我人を不安にさせるんじゃない。

続きは明日にしよう。しんどい。



うちはケイカがテンを庇って重傷を負った。

その知らせを聞き、キセノとマダラは最悪の事態を想像して蒼白になった。

気丈な次男が取り乱すのを宥めながら、キセノは集落に運び込まれたケイカのもとへ走った。

死ぬかもしれない。

血の気の無い彼女の姿を遠目に見て、キセノはそう覚悟した。

オレがテンを守ってくれと言ったから、と自責に震える弟を抱きしめながら、キセノは自分が知る全ての神に祈った。

お願いします、どうか彼女をつれていかないで。

ケイカはつれていけなかった。

数日眠り込んだあと、ぱちりと目を覚ました。

第一声は「なんか胸のあたりが猛烈にかゆいんですが、汗疹でもできてます？」だったそうだ。

死にかけてなおマイペースな少女にキセノとマダラは脱力し、その

帰還を心から喜んだ。

ケイカの後を追って戻ってきたテンは、己を庇ってケイカが血に塗れたのを目の前で見たことで精神的外傷を負っており、兄二人は弟を抱きしめ、戻ってきてくれてよかったと繰り返し返した。

ケイカは少しずつ、確実に回復していった。

回復力は同年代の子どもと比べてもかなり高く、元来の頑丈さがあるのだろうと医者と言った。

本人に「暇なんですか？」と言われつつもキセノたちは彼女を見舞った。

キセノは医者と共に部屋に泊まり込みたいくらいだったが、本人と周囲の大人に「宗家の長子でしょうが、あなたは」と早々に追い出され、代わりにマダラがケイカの傍に付いている。

「暇です。マダラ様、何か面白いことを言ってくれませんか」

「無茶を言うな」

峠を越えたケイカは怪我さえ除けばまったくいつも通りで、ふてぶてしい顔で弟子に無茶振りをしていた。

「なんでですか、それでもうちは宗家の子ですか。爆笑ギャグの一つや二つ持っていないとこの先やっていけませんよ」

「お前、適当に言ってるだろ……」

呆れたように言いながら、マダラは濡れた布でそつと彼女の汗の浮いた額を拭う。

どんなにいつも通りに振舞っていても彼女はまだ立ち上がることにすらできず、熱を持つ傷口はひどく痛んでいるはずだ。

「……………ケイカ」

「なんですか」

「……………その、お前の傷……………」

「先日も言いましたが、わたしが負傷したのは全てわたしの未熟さが原因です。謝ったら怒りますよ。具体的に言うとなあなたの頬をちぎる勢いでつねります」

「そうできるくらい、早く元気になってくれよ」

弱々しい本音にケイカが黙り込んだ。

しばらくしてから「マダラ様が思っているほど、深い傷ではありませんよ。かすり傷ですこんなもの」と呟く。

その声が優しく柔らかくて、彼女にとっては自分も庇護対象なのだろうと感じたマダラの顔が歪む。

「かすり傷なんかじゃないだろ。……治っても、きつと跡が残る……」

「ええ、跡は残るでしょうね。それはもうザツクリと」
「……………」

「いいじゃないですか別に、傷跡くらい。裸で生活するわけでもあるまいし。着物を着ればわかりません」

「お前、女だろ。なのに……」

「女なら余計に、別にいいじゃないですか。旦那くらいしか見ないでしょう、肌なんて」

まあわたしは結婚する気はないですけど。

その言葉を聞いているのかいないのか、マダラは思い詰めた顔で下を向いた。

そして決意を秘めた表情で伏せるケイカを見つめる。

「オレが」

「はい？」

「オレがお前を嫁にもらってやるから……………」

きっかり三秒後、ケイカは大笑いした。

笑いすぎて傷が開いた。

縁組

四月二十七日

マダラ様の一発ギャグに笑いすぎて傷を開くというご機嫌なことをしてしまった。

笑いながら血を流すわたしにドン引きのマダラ様、という面白いものを見られたので良しとしようか。

そのマダラ様はわたしを笑い止ませようとしたが叶わず、涙目で医者を呼びに行っていた。

なお医者は笑うわたしを見て、発狂したのかと思ったらしい。してない。狂を発しているのは母であってわたしではない。

なんとか半身を起こせるくらいにまで回復していたというのにまた絶対安静状態になり、今日やっと、こうして筆を取っている。

しかし医者にわたしだけ怒られたのは納得がいかない。マダラ様が面白すぎたのがそもそも悪いというのに。

責任を取って嫁に貰う、その思い切りの良さは天晴だが「言うとしたらわたしに庇われたテン様では？」と思う。いや決してテン様に求婚されたいわけではないが。六歳児だぞ。

前提として宗家に嫁ぐのがもう嫌だ。絶対色々なことが面倒臭い。マダラ様はわたしが開いた傷を治療されている間にどこかに消え、その後三日ほど姿を見せなかった。

その間にわたしも「あれはギャグとかじゃなくて本気で言っていた可能性が高いな」と気付き、流石に傷が開くレベルで笑ったのは悪かったかな……とわたしとは思えないほどに反省した。

なのでまた見舞いに来てくれたマダラ様に「笑ってごめんなさい」と謝罪した。

マダラ様はもうめちやくちやに拗ねていた。謝らなくてもよかつたかと思うほどに拗ねていた。

どうやらかなり本気で、勇気を出して言った言葉だったらしい。

だというのにわたしは笑うし、笑うだけならまだしも出血するしで一度に様々なトラウマができたようだ。

お前はどうぞオレの言葉なんて真剣に聞きやしない、いつもそう
だ、オレばかりバカみたいだとかなんとかぶつぶつ言っていて、あ
あ面倒くさい子だなあ、可愛いなあ、と思った。

思えばマダラ様のことを、本当に心底可愛いと思ったのはこれが初
めてだったかもしれない。今までもかわいらしさは感じてはいたが。
マダラ様に黙って手を伸ばしたらかなり警戒しつつもじりじりと
寄ってきて、頬を撫でさせてくれた。

どうやら100%つねられると思っていたらしく、撫でられたこと
に驚愕していた。

というか、つねられると思いつつも寄ってきたマダラ様の今後が不
安だ。加虐趣味の気がある女性に惚れたりしないよう気をつけてほ
しい。

最近のわたしはマダラ様をからかうことに悦びを見出し始めたの
で、わたしみたいなやつはやめておいた方がいい。

マダラ様はしばらく黙って撫でられていたが、調子に乗ったわたし
が「よちよち、いい子ですねマダラ様」と言ったら飛び退いて「ばか、
お前なんて嫌いだ」と言い放った。

ちよつと前にはわたしを嫁にもらうだの言ったくせに随分な言い
草だ。情緒不安定か？

そう言いながらも部屋を出ていくこともせず、ずつとぷりぷり怒っ
ていたのが面白かった。

数日おきに若君が見舞いにやってくる。テン様を連れてくること
が多い。どうやらわたしに庇われたことを相当気に病んでいるらし
い。わたしが勝手にやったことなので気にしないでほしいし何なら
今すぐ忘れてほしい。

なんでも、テン様のすぐ下のカゴメ様も、末弟のイズナ様も、わた
しを心配してくださっているらしい。

凄いなわたし、大人気か。

まあ長兄である若君の馴染みの小娘ということで気にかけても
らっているだけだろうが。



四月二十八日

タジマ様が来た。

頭領が来るなよ。

どうやら御子息を庇つての負傷だとタジマ様の耳にも入っていらしい。見舞うのが遅れてすみませんねとまで言われた。

来られてもこちらが気を遣うだけだから、気持ちだけで充分なんだよなあ

と思つたら集落では希少な、果物を乾燥させたやつだとか日持ちする菓子だとかを置いて行つてくださったので全てを許した。

毎日来てくださっても構わない。

◇ ◆

五月六日

かなり回復してきた。が、医者に「まだ歩き回るな、走るなんてもつてのほか」と言い付けられ、流石にここで無茶をするのは悪手だと思ひ大人しくしている。

戦闘の勘が鈍つていそうだが大丈夫だろうか。大丈夫じゃないな。マダラ様との稽古も長いことできていない。

そのマダラ様が何かを大事そうに持つていそいそやってきた。

イズナ様が描いたという絵だった。

白い紙の上に、六人の笑顔の子供が描かれている。

ど真ん中にいる、他の五人の少年に纏わりつかれている少女はもしかしなくてもわたしじゃないか？

と訊ねたら本当にわたしだった。わたしと五兄弟を描いた絵だった。

イズナ様、絵が上手すぎる。ちょっと慄くくらい上手すぎる。少なくてともわたしより上手い。四歳児の絵か？　これが。

忍よりも画家に向いてるんじゃないか。

ただそうだとしても、イズナ様には画家になる道などないわけだが。

忍の家に、それも宗家に生まれてしまった以上、本人の意思に関わらず戦場へゴーだ。

せめてこんな、右を見ても左を見ても敵、な情勢でなければまだ、忍以外の人生もあつたのかもしれないが。

マダラ様が「イズナがお前に、と描いたものだ。大事にしろ」と言つて絵をくれた。

おう任せろ額縁に入れて飾るわ、と思つたものの我が家には絵を飾る習慣などなく額なんてない。

マダラ様に「なんかいい感じの額が余つてたら持つてきてください」と言つてみたところ「今更だがお前はオレに気安すぎる、うちはタジマの次男だぞ、そんな気軽にものを頼んでいいと思つてるのか、思つてるんだらうな」とぷりぷり出て行つてしまった。

◇ ◆

五月七日

マダラ様が額縁を持つてやつてきた。

しかも三種類も持つてやつてきた。

怖い。

もしかしなくてもマダラ様、一度懐に入れた人間にはダダ甘になるタイプか？ その生き方は危険だからやめた方がいいと思う。相手に裏切られたり狂人に惚れ込んだりしたらおしまいだぞ。

試しに金を貸してくれと言つてみようかなとも思つたがやめた。多分貸してくれるからだ。

マダラ様はちよつと引いているわたしに構わず絵に額を当てはめ、これが一番いい、と独断で決めて満足そうにしていた。

おもしろー男の子だなと思ひました。

◇ ◆

六月八日

元気になった。

正確には少し前からそこそ元気であつたが、医者から「大人しくしている、泣いたり笑つたりするな」とわたしの人格を無視した指示を出されていたのでその通りにしていたのだ。

サイコパストクターかよと思つたが、笑い過ぎで閉じかけていた傷をご開帳した前科があるわたしに言えることなどなかった。

というわけでマダラ様との稽古も再開である。

自由に動く身体が嬉しすぎて、マダラ様をちぎっては投げちぎっては投げた。

男子三日会わざれば刮目して見よとはよく言ったもので、少し目を離した隙にマダラ様はまた強くなっていた。

わたしに放り投げられずに済むくらいに体術スキルはもうある筈なのだが、抵抗せずにぼんぼん投げられていた。

なんでだろうなあと思っていたが、もしかしくてもあれはわたしを氣遣っていたのか。

抵抗すればわたしの身体に負担がかかるかもしれないと考え、あえてされるがままだったのか。

だとすれば許しがたい。

舐められたもんだなという話である。

しかし死にかけてしたのは事実だし、わたしの未熟さ故でもある。

次回から戦では先手必殺、「まず焼く」姿勢を大切にしたい。

◇ ◆

六月十一日

稽古の日でもないのにマダラ様がやってきて、心なし涙目で「お前がオレの姉さんだなんて認めないからな」と言った。

人生で二番目に狼狽した。

なお一番は母の狂気を目の当たりにしたあの日である。

お前はタジマ様の不義の子だ、と言われたと思ったのだ。

わたしがマダラ様の姉ということは、父か母が同じということ、母がマダラ様を産んだとは考えられず、となるとわたしの父が実はタジマ様だったということになる。

なのでわたしは内心「タジマ様お前、妙にわたしたち親子に甘いなと思っただらそういふことかよこの野郎が……」と思っただらその感情が顔に出ていた。わたしの顔を見たマダラ様が慄いていたから多分そうだ。

名状しがたい空気の中、若君が慌ててやってきた。

結論から言うとわたしは不義の子ではないし、マダラ様と血も繋

がっていないらしい。

紛らわしいこと言ってるじゃねえよとマダラ様を物理的に振り回したわたしは許される。

じゃあなんなんだと言うと、一族の誰かがマダラ様に「ケイカはあなたのお兄さんのキセノさんにいずれ嫁ぐので、あなたの義理の姉になりますね」的なことを言ったらしい。

おい聞いてねえぞ。

と思ったので若君に「聞いていませんが？」と言った。

ここで「だつて聞かれなかったから……」とか言われたらグーで殴ろうと思っていたのだが流石にそうは言われず、「一部の者が勝手に言っているだけだ、確定じゃない、お前が嫌がったらそうはならないから」と宥められた。

よかったー。

「俺に嫁ぐのは嫌か?」「嫌です」と若君と話していたらマダラ様が「お前っ、お前ー!」と言いなながら突っ込んできた。そのまま背負い投げてもよかったのだが、マダラ様のタックルくらい軽々受け止められるわたしアピールをしておこうと思ひ真正面から受け止めた。

マダラ様はしばらく無言でわたしの胸に抱かれていたが、奇声を上げて走り去って行った。

情緒どうなってるの?

そのマダラ様を若君が追ったためこの話はこれで終わった。
なんだったんだよ。

◇ ◆

六月十五日

稽古の日。

マダラ様がまたぶりぶりマダラ様になっている。

ぶりぶりというのは臀部の擬音ではなく怒りの表現だ。マダラ様の尻に興味はない。

わたしが若君と結婚するのを嫌がっているのが気に食わないらしい。

「でもあなた、わたしが姉になるなんて認めないって言ってましたよ

ね。結婚するとそうなりますが」と論理の穴を突いたところ「姉になるのも嫌だが、なるのをお前が嫌がつているのも嫌だ」と返された。敬愛する兄に嫁ぐなんて光栄なことを喜ばないわたしに腹は立つ、しかし受け入れるのも兄さんが取られるみたいで腹立つ、と言ったところだろう。

めんどくさいし女々しいしどうしてくれようか。

「じゃあお兄様に、わたしなんかやめとけって言ってくださいよ」と進言したところ「もう言った」と言われた。

行動が早くて素晴らしいことだ。

「そもそもの話なんですけど、若君とわたしがどうこうというのは誰かが勝手に言っていることであって、当事者は一切望んでないことなのでそうはなりませんよ」と教えて差し上げたら唐突に縄張り争いをする猫の物真似をされた、と思ったがそうではなく、機嫌が悪くて唸っただけらしい。

本当になんなんだ、正直割と心配になってきたが。

この年頃の男の子って全員こんな感じなのか。若君はこんなじゃなかった気がするが。

「兄さんの何が不満なんだ、兄さんの奥さんになったら絶対幸せなのに」

と実に兄思いなことを言われた。

もうお前が若君に嫁げよ、と思いつつ「若君がどうかじゃなくて、宗家の男に嫁ぐのが嫌なんですよ」と言ったらシヨックを受けた顔を見られた。

しかもそのまま、何を言い返すでもなく無言で稽古を再開し、その後無言で解散した。

わたしが悪いのか？

◆ ◆

六月十六日

何を隠そうわたしは友人が碌にいないのだが、友人がいなくて何が不便かというところ「相談相手がいない」ことだ。

困ったな、しかしこれは親に聞くことじゃないな、という場合に話

を聞いてもらおう相手がいないので一人で答えを出すしかないのである。

答えが出ない場合、詰むのである。

というわけで絶賛詰んでいる。

何やらマダラ様を傷つけたことは間違いないのだが、その根本的理由、どうすればよかったのか、今後どうすればいいのかがわからない。ほぼ唯一の友人みたいなものである若君に聞こうにも、彼が話題の中心な気がして気が引ける。

相談窓口を多く持つというのは大事なんだなあ。

マダラ様も交友関係が広い方ではないようなので、人間関係はある程度広く持った方がいいですよといつかアドバイスしたい。

ダメ元で母に話したところ「理由がわからないなら本人に聞けばいい、もし教えてくれないならそれは相手が悪いから気にしなくていいのよ」「いざとなったら全部焼け」という有益なアドバイスをもらった。

なるほどつまり火遁の印を結びつつマダラ様を詰問しろということだな？

わたし好みの展開になってきた。

次のマダラ様との稽古の日に実践しようと思う。

◇ ◆

六月二十日

刻限通りにやってきたマダラ様をさっそく「なにが不満なんだお前は」と問い詰めようとしたところ、逆に「どうしてお前は宗家に嫁ぐのが嫌なんだ」と聞かれた。

先手を取るとはやるな。

聞かれたからには答えなくてはならず、「宗家って絶対色んなことが厳格だし人付き合いもやらざるを得ないだろうし戦場に出してもええなくなりそうだし、とにかく面倒くさそうで嫌だ、わたしは面倒なことが嫌いだ」と熱く語った。

「それはお前の想定であって事実ではないだろう」と賢しげなことを言われたのだが、嫁いでみてから「やっぱめんどくせーわ」となって

も遅いのだ。じゃあ明日離婚な、とはならないだろう。

「宗家の、それも長男に嫁いだら碌なことにならないそうなのは想像つくでしょう？ 次期頭領の妻ですよ」と言ったら「オレの母様は幸せそうだった」と返された。

それはあなたのお母様が人格者だったからであってわたしには適用されない。

「といふかなんなんだ、あなたはわたしに若君に嫁いでほしいのか？ と聞いたら苦渋に満ちた顔で「……ちがう……」と言われた。違うならいいでしょうが。」

別にわたしは宗家を馬鹿にしたわけでも下に見ているわけでもない。ただわたしとは合わないよね、と言っているだけだ。

「相手が宗家じゃなかったら嫁ぐのか、お前の母のように」と更に突っ込まれた。

知らんそんなの。十歳だぞわたしは。

確かに幼い頃から許嫁扱いされているうちの男女はいるようだがわたしにそんなのはいないし、その願望もない。

年頃になったら考えます。と至極もつともなことを言ったのに「けどこのままだとお前は宗家に嫁ぐことになる、きつと」と怖すぎる予言をされた。しかも長男に嫁ぐことになるだろうと。

それが嫌なら、別の結婚相手を早々に見つけて「わたしはこの人と番うので若君の結婚相手にはなりません」と言え、だそうだ。

なんでだ。わたしのお母様は知らないところで何が起こっているの？

嫌だ。若君が嫌だとかでなく宗家長男とかいうその肩書きが嫌だ。まさかタジマ様と幼い頃から懇意だったという母がタジマ様の妻でないのは、若かった母も同じことを考えたからじゃないだろうな。

ここでマダラ様から忍界が震撼する提案をいただいたのだが、要約すると「オレで妥協しろ」とのことだった。

お前が兄さんに嫁いだら兄さんが苦勞する、お前も嫌なんだろう、仕方ないからオレがお前を貰ってやると。

話聞いてました？

宗家に嫁ぐのが嫌だって言ってる。あなたも宗家ボーイだろうが。

と言ったら「お前に親しい男なんて他にいないだろう」と決めつけられた。

言い切るなよ失礼な。いるかもしれないだろ密かにラブラブな男の子が。

まあいいんですけど……。

明らかに承服していない様子のわたしにマダラ様はぷりぷり怒り、オレの何が不満だと言った。

宗家とはいえ長男じゃなくて次男だから、お前の言う面倒くさいことはそんなには起こらないだろうと。

八歳児なんだよな。

八歳児に将来の話をされてもピンとこないんだよな。

と言ったら流石に泣くかもしれないと思いついて口を閉じていたのだが、本人が「なんだ言いたいことがあるなら言え」と仰ったので「八歳児に言われてもなそこはありますよね」と言った。

泣きはしなかったが怒られた。たいして変わらないだろうと。

だからわたしたちの年代でこれだけの年齢差は大きいんだって。誤差になるにはあと十数年は必要なんだって。

あとマダラ様、わたしよりちっちゃいし。サイズが。

わたしはこの年にしては長身で、マダラ様は平均だ。そもそもわたしたちくらいの年齢だと女子の方が大きいこともあり、わたしとマダラ様の体格差は結構ある。

その後も言い合いになり結論が出なかった。

マダラ様が引かないのでわたしは言った。

あなたがわたしとの年齢差が気にならないほど年を重ね、背もわたしより高くなって、わたしより強くなって。

その時まだわたしを嫁に貰う気があったなら、改めて言ってくださいと。

そうしたらわたしも真剣に聞きますと。

マダラ様はとりあえず納得して引き下がった。

チヨロくて笑う。

どうせその頃にはマダラ様はわたしのことなんてどうでもよくなっているだろう。

今日の日のことも消し去りたい過去のひとつになっているはずだ。そうなたら「あなた八歳の頃わたしを嫁にしようとしてましたよね」とマダラ様の前で反復横跳びしながら言おうと思う。

マダラ様は宗家次男という血筋に加え才能に溢れ、このまま順当に成長したら美男子になると思われる。年頃になったらそれはモテるだろう。

女性なんて選び放題になるだろうから、その中から好みの女の子を選べばいい。

変な女には引つかかってくれるなよ、とは思うが。わたしにだって可愛い弟子を想う心はあるのだ。

なんか根本的なことが解決していない気もしたが、マダラ様がなにやらやり切ったような、満足した顔をしていたのでよしとする。



そもそもわたしが「宗家の嫁」と内定しているようなこの空気はおかしい。

と、やっと気づいたうちはケイカは母に尋ねた。

まさかとは思うけれど、母さんのところに「ケイカを宗家に嫁に出せ」的な要請は来ていないか、と。

母は娘に言った。

結構前からタジマ様に打診されているわよ、と。

ケイカはでかい声で「おい!!!」と言った。

彼女が腹から声を出すのは珍しい。常にローテンションな彼女は常になく必死な顔をして「そういうのは、本人と共有して。すぐに」と言った。

それに母であるうちはトウカは「だって、聞かれなかったから」と言った。

しれっとした顔が娘そっくりだった。

ケイカは頭が痛そうな顔で「聞くわけないでしょう、なに、『わたしに嫁入りの話が宗家から来てない?』とでも聞けばよかったの?」どんなレベルのナルシストならそんなこと聞くんだ、自意識の怪物か」と言った。

トウカはにこにこしていた。

何を言っても無駄と判断したケイカは、力なく「それで、タジマ様にはなんて返したの」と尋ねた。

「なんにも。だってわたしが決めることじゃないものね」

「……………ああ、うん。そう……………」

ケイカが振り上げた拳の下ろし先を見失ったみたいな顔をした。

トウカは変わらずににこにこしている。

ケイカは「タジマ様もこの笑顔を前に何も言えなくなっただろうな」と思った。

「……………ねえ、母さん」

「なあに」

「どうしてわたしが宗家の嫁に、なんて話が出たの」

「だってあなたは強いでしょう? 宗家はね強い跡取りが欲しいのよ。そのために強い母親が必要なの」

「その理屈なら母さんはタジマ様に嫁いでいないとおかしくないか」

「そうね、でも断ったから」

「……………母さんにも嫁入りの話、あつたんだ。やっぱり」

若い頃からその忌名を戦場に轟かせていたうちはの生ける炎は、少女のように微笑んだ。

「あつたわよ。でもねわたしはタジマ様より、あの人と、あなたのお父さんと結婚したかったの。だからそうしたの」

「なんでタジマ様じゃ駄目だったの」

「タジマ様はとっても強くて優秀で、わたしがいなくても大丈夫そうだったから。わたしもタジマ様がいなくても大丈夫だったし」

ケイカは渋面を作った。彼女にはまだ人間関係の複雑な機微がわからないし恋愛も縁遠いが、それでも、母が残酷なことを言ったのは

感じ取れたためだ。

「……当時のタジマ様は、母さんを……いやなんでもない」

わたしには関係ない、何より今更だと頭を振ったケイカは最後にひとつだけ母に問うた。

「……父さん、普通の人だったって聞いてるけど。特に強いとか優秀だったとかじゃないって。どうして父さんを選んだの？」

「火よりも美しいと思ったのは、あの人だけだったから」

因果

九月一日

人間というのは年を取れば取るほど、月日の流れを早く感じるようになるのだという。

子供のわたしにはその真偽はわからないが、仮に真だったとして、年を取ったわたしは一年を二秒くらいに感じるようになるんじゃないか。

だって現時点で尋常な速さじゃないぞ、時間の流れ。

マダラ様と稽古したり戯れたり、宗家でタダ飯を食べたりしていたら気づいたら十一歳になっていた。

特にマダラ様の師匠らしきものになり戦に出るようになってからというもの、怒涛のように毎日が過ぎていく。

命の危機に頻繁に晒されるようになったからだろうか。生き急いでいるのか。

嫌だな、いつ死ぬかわからないこそ日々を噛みしめるように生きろべきなんじゃないか。

と思いかけたが、そういうのはわたしには向いていない。もっとこう燃え尽きるように生きて死にたい。家庭に入って夫を支えて穏やかに、なんてわたしには向いていない。

というわけで最近宗家に行っていない。

先日の若君の誕生日も、当然のように招かれたが「行かねえ」という強い意志で断った。

戦場に出ることを許されている激レア女うちとしては宗家の嫁入り説が出ている以上、行きたくないのだ。強い忍を両親に持ったとして生まれる子が強いとは限らんだろ、と思うが、わたしの火遁の才は確実に母から受け継いでいるので否定もしきれない。

父は忍としてはパツとしない人だったと聞いているので、母のみから引き継いだと思われる。なおわたしが得意ですと胸を張って言うのは火遁一本だ。他の術が一切使えないわけではないが火遁に比べれば兎戯だし、水遁は才能ゼロすぎて自分で笑った。千手に水遁が

超得意な凄腕がいたらどうしよう、戦場で相対しないことを祈る。

マダラ様との稽古の日だった。

わたしが先日 of 若君誕生祭に顔を出さなかった時もそれはお怒りだったのが、わたしの行きたくなさや想定以上だったらしく最終的には諦めていた。「オレがあんなこと言ったからか」と落ち込んでいた。

マダラ様に「オレで妥協しろ」と言われたのは正直メチャクチャ面白かったしそれが原因ではない。若君と番わせられそうになっていることが発覚したからだ。つまり戦犯はそれをマダラ様に勘付かせ、わたしまでその情報を流すことになった名も知らぬうちには誰かである。

しかしわたしが年頃になったら強制的に嫁がされたりするのだろうか。嫌すぎるな。母を頼ったとしても確実に「万象を焼き尽くせ」と極端すぎる解決策を提案されるだけだろう。まず普通に断ってそれは最終手段としたい。

マダラ様は最近、今まで以上に張り切って稽古をしている。

若君曰く、食事もたくさん食べるようになったしわたし以外との修行にも力を入れているし、しっかり睡眠も取る健康優良児らしい。

何故かと本人に尋ねたところ「早くお前より強く、大きくなる」ためとのことだった。

そんなことを言われると意地でも越えさせたくなくなる。

わたしもこのまま成長すれば結構な恵体になるだろう。できればマダラ様より高い身長をキープしたい。

◇ ◆

十月一日

残暑も過ぎ、だいぶ涼しくなってきた。

常に死んでなきやおかしい高さの体温を保つわたしでもそれは感じ取れる。個人的にはずっと秋冬であってほしい。

そういえば寒がりのイズナ様は大丈夫だろうか、と考えていたら、タイムリーなことにマダラ様がイズナ様の話題を出してきた。

イズナ様だけでなく三男のテン様、四男のカゴメ様もわたしに会い

たがっているらしい。

テン様はわたしと血なまぐさい縁ができてしまったから気にされるのもわかるが、カゴメ様はわたしのことなんて発熱毛布くらいにしか思っていないだろ。

と思ったが意外にもそうでもないらしい。

カゴメ様はすぐ上の兄のテン様に誰よりも懐いており、そのテン様を庇ったわたしのことを非常にグツジョブだと思っっているとか。

言われてみれば以前お会いしたとき、双子のように距離が近いなと思っただような気がしないでもない。

イズナ様は兄弟の中でいちばん人懐こいので、わたしにも愛想よくしているのだろう。ザ・末っ子という感じだ。

嫁ぐ嫁がないは別にして弟たちに会いに来い、と強めに言われ、強制されると一気に嫌になるこの感情はなんなんだろうなあ、しかしそんな大人げない理由で断るのは流石にクズっぽいなと思っ直し了承しようとした。

ら、うちの大人が現れてわたしに「小競り合いが起きたから今すぐ参戦しろ」と言った。

なのでマダラ様との会話は強制打ち切りとなり、爆速で戦装束に着替えてGOとなった。しょうもない小競り合いだったし敵も千手ではなく、戦というほどでもなかったが。

唐突に今から戦場な、と呼び出されることが増えた。

どうやらテン様を庇い、かつ生き延びたことから「やるじゃねえか」と一族から見直されたらしい。中・遠距離戦ができる優秀な火遁使い、しかも協調性が（うちはトウカに比べれば）ある。これは便利に使うしかないっしょ、ということらしい。

千手とかいう異様にタフな相手（なんで血継限界なしにうちはと長年渡り合ってるんだろうあの一族）のせいで影が薄い、敵は千手以外にも大勢いる。

というか、うちは以外の忍一族は基本的に敵だ。

忍以外にも、たまに侍崩れの野盗が縄張りを荒らしたりする。そうするとわたしみたいな若手が「ちよつと行ってきて蹴散らして来い」

と言われる。

大した敵じゃない、と思つて油断してるやつから死ぬから気を付けなさい、と母にも言われたので常在戦場の気概だ。実際油断してる一族の末端がちよこちよこ死ぬのを見たので。

命の重さが相変わららず綿埃みたいだが、いつか変わる日が来るのだろうか。来たとして、そのとき自分が生きている気がしない。

◇ ◆

十月十五日

空き巣かよという用心さでこつそり宗家を訪れた。

別に盗みに入ったわけではなく、マダラ様達にいい加減顔を見せに来いと言われたためだ。

そつちが来いと言いかけたが、本当に来られたら困るので大人しく参上した。

要は宗家の大人に「あの嫁候補、来てんじゃん」と気付かれなければいいだろう。

五兄弟みな元氣そうだった。

若君が「うちの者が勝手を言つてすまない、お前には迷惑のかからないようにする」と恐縮していた。嫁騒動については若君の差し金でもないし彼を責める気はない。

しかしマダラ様がわたしを貰うだのなんだの言っていることは知っているのだろうか。どうでもいいか。

イズナ様にまわりつかれつつ雑談をした。

女の子のように控えめで、テン様の後ろに隠れがちなカゴメ様が今日は一生懸命話しかけてきた。

カゴメ様も来年には戦場デビューらしい。

もう守つてもらおう立場ではない自覚が強くなってきたらしく、振る舞いが積極的になってきていると若君が父親のような顔で言っていた。

カゴメ様のことも守ってくれと言われたらどうしようと思つたが流石に言われなかった。半年前にテン様を庇って見事に死にかけたのが効いているのかもしれない。

幼く弱い者から死んでいく世界だけれど、ここの兄弟は皆が生き延びる気がする。

宗家の子だし、わたしや若君も十を越えてこうして生きている。せめて十五になるまでは全員が生き延びられるといいが。

などわたしらしくもないことを考えつつ席を外し、廊下でひとりになった途端に背後にタジマ様が立っていて心底ビビった。

本気で心臓が止まりかけたので幽霊みたいな登場の仕方はやめていただきたい。

どうやらわたしが来ていることを把握していたらしい。そりやそうだわ。部屋で大人しくしていたとはいえ堂々としすぎた。

タジマ様はわたしが宗家でくつろいでいるのは歓迎らしく、ごく普通に「遊びにきてくれたのですね、マダラも喜んでいるでしょう」と仰った。頭領というより普通の父親という感じだった。

マダラ様なんだな、そこで。嫌われてはいないとは思っていたが。曖昧な返答をするわたしにタジマ様は「すみませんね」と言った。

理由がわからない謝罪ほど怖いものもそうなので身構えたが、どうやらわたしの耳にわたしの嫁入り話が入ったことを言っているらしい。

で、ドストレートに「私の息子に嫁ぐのは嫌ですか？」と尋ねられた。

ここで「嫌です!!」と言えるほどの蛮勇は流石になく(頭領だぞ)、かといっておもねるのも嫌で、真顔で黙る、というコミュニケーション力ゼロの返答をしたら笑われた。

「お母上より人に気を遣える子ですね」だそうだ。

母はかつて似たような質問をされたとき、笑いながら「嫌です」と即答したらしい。

凄い。怖いもの知らずかよ。

「何かを強制されるのが苦手というだけで、決して貴方の息子さん方に不満がある訳ではない」ともそもそ言ったところ、「そこはトウカさんに似ている」と言われた。母も少女期から「何かを強制されるくらいなら死ぬ」スタンスだったらしい。わたしはそこまでじゃない。逆

に母の人生が気になってきた、何があったらそんな人格になるんだ？
これはタジマ様に密かに望んでいることなのだが、母の話題になるとじつとりした空気を醸し出すのをやめていただけないだろうか。おそらく無意識なのだろうが「母と何かあったんだろうなあ」と湿度の高さで伝えてくるのは遠慮いただきたい。娘としては尻の座りが悪くて仕方がない。

それはそれとして、ここでタジマ様から「長男のキセノが嫌だというなら、マダラやその下の弟でもいいですよ」とマジかよとしか言えない提案をされた。

わたしが選ぶ立場なのか？ 宗家五兄弟の中から？ 旦那を？
そんなことあるか？

選択肢が増えりやいいってもものじゃないし誰を選んでも誰かから怒られそうで嫌だ。しかし頭領にここまで妥協されて断るとわたしの方が常識知らずな感じなのだろうか。わたしに母くらいの自我の強さがあれば「だから嫌だっつってんだろ」くらい言えたのだが。

「まだ若輩者ゆえよくわかりませんが、十五くらいまでわたしが生き延びてから改めてお話しさせていただきませんか」と逃げた。いや逃げない、これは逃げじゃない。むしろ立ち向かっている。

その頃にはタジマ様のわたしへの評価がガタ落ちしている可能性もあるし。

「やたら大人びているから忘れていたがそう言えばまだ十一歳でしたね」と褒められているのかいないのか不明なコメントと共に解放された。

タジマ様のこと、苦手かもしれない。

できれば気配を消して近付いてくるのをやめてほしい、わたしは接近戦だと雑魚なため至近距離に他人の気配があると落ち着かないのだ。

確かマダラ様はわたし以上に他人に近付かれるのが苦手で、特に背後に立たれると本気で嫌がる。なんだろう前世で背後霊に祟り殺されでもしたのだろうか。理由を聞いても自分でもよくわからないがとにかく落ち着かない、とのことだった。

わたしは「変化の術を使っている最中の人」が何故かわからないが生理的に無理だ。パーソナルスペースを侵害される以上に無理だ。「見た目と中身が違う存在」が生理的にダメなのかもしれない。以前マダラ様が冗談で若君に変化してわたしのもとへやってきた時、マダラ様が引くほどキレ散らかしてしまった。それ以降マダラ様が変化している姿を見たことがないのでトラウマになったのかもしれない。相手によって態度を使い分ける人も苦手だ。顔いくつあるんだよお前、と思ってしまう。

そういう意味ではマダラ様は好ましい。裏表がないからだ。是非このまま育ってほしい。



十二月二十四日

マダラ様九歳のお誕生日。

わたしがマダラ様の師匠的存在になったときと同じ年になったんだなと思うと感慨深いような別にそうでもないような気もする。

先日、タジマ様に「嫁ぐ嫁がないは十五になってから考えます」と宣言したため、逆に宗家に遊びに行ってもいいかもしれない。

マダラ様が寂しがつてる可能性もあるわな、と思い、そうじゃなさそうだったら帰ってこようと思いつつ様子を窺いに行った。

出かけようとしているマダラ様とかち合った。

おやお出かけですが、じゃあわたしも帰るとしましうもはやこの家に用はないと直帰を決めようとしたが「出かける用が急になくなった、お前もここにいろ、それでイズナの湯たんぽにでもなってる」と引き留められた。

わたしに会いに行こうとしていたと素直に言えばよろしいのに。

と煽ったところ蹴られたため投げ飛ばした。マダラ様は華麗に受け身を取っていた。かわいくない子でいらつしやる。

という日記を、わたしはまたしても宗家の寝室で書いている。

イズナ様がわたしにくつついて無限に話しかけてくる。

わたしもイズナ様も成長が見られないな。

ただイズナ様は「成長していないと見せかけて実は誰より成長して

いる疑惑」がある。

昼間、イズナ様がわたしという温石にご機嫌でくつつきながら「ケイカおねえちゃんは大きくなったらイズナのお嫁さんになるの、そうしたら冬は毎晩一緒に寝てね」と言い放ったのだ。

戦慄した。わたしだけでなく周囲にいた他のご兄弟も含め戦慄した。

決定事項として言われたことも、完全に人ではなく発熱装置として見られていることにも慄いたし、おい誰だイズナ様にわたしの嫁入り話が出ていることを吹き込んだアホはよと瞬間的に激怒しそうになった。

だが若君とマダラ様の言葉を信じるなら、ご兄弟の誰も、おそらくタジマ様もイズナ様にそんなことを吹き込んではいないはずだとのことだった。

単に「嫁入り」という概念を知ったイズナ様が、子どもらしく新しく知った言葉を使ったがっただけ、らしい。

マダラ様が必死にイズナ様を説得していた。「お前のお嫁さんはもつと優しく、火を噴かない人にしような。ケイカだけはやめろ」と。

張つ倒すぞ。あとわたしを妖怪みたいに言うのをやめろ。

しかし今回は同意しておくか……と黙っていたら、イズナ様が涙でゆらゆらした目でわたしをじっと見つめ、「イズナのお嫁さんになってくれないの……？」と言った。

危なかった。あと少しで白無垢に着替えだすところだった。

最近やつとマダラ様をかわいいと思えるようになったわたしだが、イズナ様の愛らしさはマダラ様を越えていく。これが末っ子の力だろうか。

「じゃあ、おねえちゃんが他の人のお嫁さんになっても、イズナと一緒に寝てね」と言われ、思わず頷いてしまった。わたしの辞書にはそれは不倫とか不義とかの項目にあるのだが、よかったのか。

しかしイズナ様はもう五歳とかのはずで、それにしても口調といい振舞いといい幼くないか？ わたしがイズナ様くらいの頃にはもう

可愛げは消滅していたはずだが。

と若君に聞いてみたところ、お前は子どもらしさのない幼児だったから比較対象にはならないが、と前置いた上で「イズナのあれは半分わざとだな」と言った。

イズナ様は自分が末っ子なこと、そんな自分が兄たちに愛されていることも、かわい子ぶった方が得だし周囲の人間も喜ぶとわかっている。

お前に甘えるのもそのあたりの計算があつてのことでもあるだろうと。

怖い。

悪意はないのだろうが、これまでに感じたことのない種類の恐れを感じた。

◇ ◆

四月十三日

千手一族が強くて腹立つ。

写輪眼を（全員ではないが）持ち火遁の名手が揃うちはが何故未だに千手を滅ぼせていないのかというと、千手が正気かよというレベルでフィジカルに優れていることが大きい。

なんであんなに丈夫なんだろう。

昨日片腕を炎で消し飛ばした千手の青年、「よしこれで印は組めなくなつたな」と思ったら即座に腕を失つたショックから立ち直り、残つた片腕にクナイを構えて突っ込んできた。

そういうところなんだよな、嫌なの。あとチャクラの平均量が妙に多いっぽいところも嫌だ。

おそらく「術禁止、肉体のみ」で戦つたらうちには速攻で殲滅される。勝負方法が相撲とかじゃなくてよかつた。

片腕で突っ込んできたその青年は、わたしのもとへ辿り着く前にわたしの炎で全身燃やされたので大丈夫ではあつた。最近、印を省略したり片手でやっても術を発動できるようになった。火遁のみだが。

マダラ様は未だに「お前より火の扱いが上手くなってやる、オレは宗家の子なんだから」と言っているが実力の差がつく一方で申し訳な

い。一生わたしには勝てないと思うので早々に諦めてほしい。

◇ ◆

八月三日

マダラ様の誕生日は何故かちゃんと覚えているわたしだが、他のご兄弟の誕生日が永遠に覚えられない。当然のように若君のも覚えていない。

つい先日あったわたしの誕生日は覚えていただいていたし、とても丁寧に「十二歳おめでとう。あと三年で十五だな」と寿ぎにしては妙に裏を感じる祝いの言葉を送ってくださったというのに。

若君がわざわざわたしの家に来て、己の誕生日を予告していった。どうせお前は忘れているだろうから、と言われ、その通りなので馬鹿にしないでくださいとも返せず敗北感を味わった。

何故わざわざ予告したのかというと、今年の誕生日は是が非でも宗家に来てほしい、というかカゴメに会って勇気づけてやってほしいんだ、と言われた。

四男のカゴメ様の初陣が間もなくらしい。

カゴメ様、三男のテン様にくつついて恥ずかしそうにしている姿のイメージが強いが戦場でやっていけるのだろうか。

その思いは若君も同じらしく、「マダラのと看以上に見配かもしれない」と胃が痛そうな顔をしていた。

「わたしに、守ってくれとは仰らないんですね」と聞いたところ「意地の悪いことを言ってくれるな、死にかけてまで守ってもらおうとは思わない」とのことだった。

こつちだつて死のうと思つて死にかけてたわけではないのだが。

命を張つてまでとは思わないが、まあ、カゴメ様に万一のことがあつたらテン様を筆頭にうちは全員が嘆き悲しむ。

いや母はケロッツとしてそうだがあの人の価値基準は狂っているの
でいったん置いておく。

ともかく一族全員が精神的に曇るさまはわたしだつて見たくはない。

できる範囲でカゴメ様を守ろうと思う。宗家の人間を守るのは分

家の役割でもあるだろう。
わたしらしくもないが。

◇ ◆

九月十四日

テン様が死んだ。

あつさり、なんの伏線もなく、時間が来たからここまで、みたいな
気軽さで、亡くなった。

千手に殺されたのだという。

わたしはその場面を見ていない。

同じ戦場にはいたがわたしとテン様は部隊が別で、知らないうちに、
知らないところで殺されていた。

初陣を終えたばかりのカゴメ様を、これからも自分が守るんだと気を
張っていたのに。

体術が得意ではないぶん、生まれ持つての才がある幻術を伸ばして
戦う術を身に着けている最中だったのに。

遺体はわたしが焼いた。

テン様逝去の報が何故かわたしに率先して届けられ、それはきつと
わたしが分家の女としては異常なほど宗家と距離が近かったからで、
テン様の部隊の人に連れられて彼のもとへ走って、そこに確かに、眠
るように死んでいるテン様がいた。

戦場の遺体は大抵が見れたものじゃない。切り裂かれ、焼かれ、潰
されて、「人間なんて血の詰まった袋だ」と思い知るようなものがほと
んどだ。

テン様の遺体は綺麗だった。

敵が気を遣った訳ではもちろんないだろう。だが急所を一撃でや
られたのだろうその姿は血に塗れるでもなく、今にも目を覚ましそう
だった。

残暑でなければ遺体ごと帰せたかもしれない。

だがその日はひどく暑かったのだという。わたしは自身の体温が
高すぎてよくわからなかったが、遺体という生ものがすぐ腐る程度に
は暑かった。

だからわたしが焼いた。遺品として衣服の一部と刀だけを残してわたしが焼いた。

死んで、焼いてしまえば千手もうちはも同じだと言った母の言葉を思い出す。

本当だろうか。本当に千手もうちはも同じなのだろうか。

わたしがこれまでに燃やした千手は、テン様と同じだっただろうか？

◇ ◆

十一月十六日

カゴメ様が亡くなった。

三度目の戦場で亡くなった。

テン様の通夜で、泣くこともできないほど疲れ果てた様子で、それでも「兄さまのぶんまで生きる」と言っていたカゴメ様が亡くなった。千手に殺されたんだそう。

またか、とは思った。また千手なのかと。他にも敵の一族は多くいて、それでも千手なんだなど。

うちはを除けばもつとも強大で、うちはとの敵対っぷりも激しい一族だから、ある意味自然ではあるのだが。

宗家の子なんて、きつと殺したくてたまらなかつただろうし。

頭が痛い。

◇ ◆

十一月二十七日

テン様とカゴメ様が相次いで亡くなり、皆が沈むなか、若君は宗家の長子として強いて普段通りに振舞っているようだった。

幼いながらも優秀だった宗家の三男と四男が相次いで宿敵に殺され、集落の雰囲気は殺伐の一言である。

ただでさえ地の底だった千手への好感度がマイナスに振り切った感じと言うか。

長子である若君はそれでも千手に対し恨み言もひとつも吐かず、これまで通り修行に精を出している——と、一族と交流の薄いわたしの耳にすら入ってきた。

きつと本当なのだろう。

カゴメ様の通夜以降、若君には会っていない。
会いに行けば会えるだろうが、その気にならない。

◇ ◆

十一月二十八日

若君があちらから会いに来た。

微妙に会いたくなかったうえ何と言っていいものかわからず、黙り込んでしまった。

気を遣うように苦笑されて、何を笑ってるんだお前は、と苛立ちのような焦りのような、とにかく不愉快な気分になった。第二人を立て続けに亡くした人にあたるべきじゃない、と思いついたが。

日が落ちるのが早くなったとか、最近雨が多いとか、そんなうでもいい話をした。

テン様のこともカゴメ様のことも、千手一族のことすら若君は口にしなかった。

耐えられなくなったのはわたしの方で、千手が憎くはないのですか、と尋ねてしまった。

憎いよ、と即答されたことに、未だに動揺しているわたしがいる。憎いけれど、それでも千手と手を取り合いたい気持ちはまだある

と。

憎いまま、それでも仲良くできるかどうかを考えていると若君は言った。

殺し合ってきた一族同士が手を取り合うことなどできるのだろうか。

わたしが殺してきた千手の、その親兄弟や友は、わたしを憎いと思っているだろうか。

思っているだろう。今まではたいして気にもしていなかった、戦なのだから当然だと思っていたことが、何故か引つかかる。何がどう引つかかるのか自分でもわからない。

ただ、たとえ千手を一人残らず焼き尽くしたとしても、テン様とカゴメ様は戻ってこないのだなと思った。



十二月二十四日

マダラ様と戦った結果、割とマジの怪我をした。お互いに。

記念すべきマダラ様十歳の誕生日だというのに何をやっているんだわたし達は。

マダラ様はすぐ下の弟たちを亡くして以降、それでもわたしとの稽古にはきちんと来ていた。

その場で、テン様たちの話はしなかった。

弟たちを喪って以降マダラ様は明らかに強さに執着するようになっていて、これまでのように、わたしに勝ちたいと無邪気に挑んでくることがなくなった。

わたしより強くなりたい、というより、強くなくては駄目なんだと言いたげな必死さを感じる。

今日は稽古の日ではなかったけれど、朝一でマダラ様がわたしに会いに来た。

あなたは毎年わたしを迎えに来ますね、誕生日おめでとうございませ、と出迎えたところ途端にキレられた。

開幕激怒は流石に初めてでびっくりした。

何がおめでとうだ、テンもカゴメも死んだ、死んだばかりだ、なのに何がおめでとうなんだ。

と怒鳴られ、ここで黙っていればマダラ様も冷静になったかもしれないが、わたしはわたしで「あなたが十歳を迎えたのは事実ですし、テン様もカゴメ様ももう年を重ねませんが、あなたはこれから年を取るでしょう。そのたびにそうやって機嫌を損ねるのですか」とか言っていました。

口下手かよ我ながら。

違うんだって。マダラ様が無事に十歳になったことが喜ばしいと思っただけは本当なんだって。弟君たちの死を突きつけたかったわけじゃない。

案の定マダラ様はショックを受けた顔をした。

そして、「どうしてお前は平気そうなんだ。お前だけじゃない、兄さんだって……」と言って黙り込んだ。

わたしは平気そうに見えるのか。ということは平気なんだろうか。自分でもわからず、マダラ様に「わたしは平気なんでしょうか」と尋ねた。

はあ？　みたいな顔をされたし、実際「何を言ってるんだお前は」と言われた。

「テン様が亡くなられてからというもの、ずっと頭が痛いんですよ。カゴメ様が亡くなられてからは悪化しました。原因不明なんですけど平気なんですかねこれは」と聞いたらマダラ様は石でも呑んだみたいな表情でまた口を閉ざし、わたしはわたしで何も言えず黙り、わたしの人生史上、二を争うレベルの気まずい沈黙が通った。

マダラ様はたつぷり黙ってから「お前、それは、……つらいんじゃないのか」と言ったので「まあつらいっちゃつらいですが、もう慣れましたよ。痛みには強い方です」と返したら即座に「違う」と返された。

「何が違うと？」「わかるだろ、そんなの」「わからないから聞いているんでしよう」「どうしてわかんないんだよ」「は？」「あ？」

というわけで戦った。

というわけでじゃない。わたしもわたしだがマダラ様も相当だ、言葉が通じないからって殴り合うんじゃない。

だがその時は、殴り合うのが最善に思えたのも事実だ。

ギリ勝った。

ギリだった。「殺してもいい」条件ならマダラ様が受けきれない火遁をぶっ放せばいい話でわたしの圧勝だったろうが、それをしてしまったらあらゆる意味でおしまいだ。遺書を書いたのち速やかに後を追うしなくなる。

再起不能にしてはだめ、わたしが負けるのもだめ（腹立つから）ということ殴り合いは泥沼化し、こういう日に限って若君も現れないしで二人してボロボロになった。

わたしにボコられたマダラ様は「なんでそんな強いんだ、馬鹿か」と

わたしを罵った。

マダラ様もその年齢にしては異常な強さなのでおかしいのはわたしだけではない。わたしが余人より優れているのは火遁だけだがマダラ様は全体的に強い。いつまでゴリ押しで勝てるだろうか。

勝ったはいいがどうしようこれ、マダラ様ぼろぼろだしわたしも血が止まらんわ、焼くか、と思っっていたらマダラ様が泣いた。

意地っ張りうちは代表みたいな、わたしの前で本気で泣いたことなんてなかったマダラ様が声を出して泣いた。

お前より強くないとお前を守れない、と言っただけ泣いた。

自分でも信じがたいし未だに幻術にでもかかったかと思っただけ泣いた、

それを見て、わたしも泣いた。

マダラ様のように声を上げて泣いたわけじゃない。ちよつとだ。ほんとに気のせいレベルで、だが確かに泣いた。

泣いたのはいつぶりだっただろう。

マダラ様はわたしの涙に気付くと驚愕した顔をして、泣き止んでいつちよ前にわたしを慰めでもするかと思っただけ泣き止まず、わたしの頭を胸に抱え込んで余計に泣いた。

マダラ様の腕は細いし胸は狭いしで、全然頼りがいなんてなかった。それでも初めて会った頃に比べたら随分と大きくなったなあと思っただけ。

そうこうしているうちにマダラ様の意識が朦朧としはじめ、ヤバイこれ、遺書を書いて後を追う流れになるこのままだと、と応急処置をした後マダラ様を抱えて宗家まで走った。

速やかに医者を手配されたが、「いったい誰にやられた!」「わたしです」と自白したときの周囲の人の目が忘れられない。

わたしが処されるかもしれない、と覚悟しかけたものの、ほぼ黙って手当をしてくれたことには感謝している。本当に。

幸いにも割とタフなマダラ様はすぐ意識がはつきりして、わたしがボコったことも「お互い様だ」と許してくれた。それはそう、わたしも結構怪我したからな。

その後、二人で少し話をした。

殴り合ったおかげか互いに冷静になっていて、落ち着いて会話できた。怪我までした甲斐があったというものだ。

マダラ様は「テンとカゴメが死んで悲しいと感じてることを受け入れろ」とわたしに言い、

わたしは「自分が生き延びたことを肯定してほしい」とマダラ様に言った。

その後、出先から戻って来た若君に殴り合ったことを諫められ、イズナ様にも泣かれた。

もはや恒例のようにそのままお泊りになった。

でもテン様とカゴメ様はいなくて、生まれて初めて、寒いな、と思った。

◇ ◆

十二月二十八日

年の瀬だというのに猛烈に疲れた。

まず母に「燃やしてあげましょうか？」と言われた。

な、何を……？ と思ったら対象はわたしだった。

もう一度書くが対象はわたしだった。

わたしは火を付けたら燃えるし、それが母の操る炎なら文字通り跡形も残らないと思われるのだが、その母に「あなたを燃やしてあげましょうか」と聞かれたのだった。

意味がわからなすぎて四・五回聞き直したが、どう聞いても結果は変わらなかった。

わたしに自殺願望があるように見えるのだろうか、と思ったが割とそうだったようで、「そんなにつらいのなら、私の炎であなたを焼いてあげましょうか」と打診されたのだった。

焼失すれば、その辛さも痛みも苦しみも、全て浄化されるからと。

なんというか、もう、笑った。

笑うしかないだろうこんなの、実の母に殺してやろうかと言われて、悪意とかじゃなくおそらく善意で言われて、どうすればよかったですか？

とりあえず断っておいた。

その代わりに、かどうかは知らないが、
××××様を招来する方法を伝授
された。

自由に呼び出せる存在ではないらしい。条件が揃ったときに、祝詞
(呪文では?)を唱えると、信者のもとへ来てくださる、ことがあるそ
うだ。

曖昧だな。あらゆる意味で不安しかない。

だが妙に耳に残る祝詞で、一度聞いたら全て覚えてしまった。

もう本当にどうしようもなくなったら、試してみようかと思う。

応報

十一月十八日

テン様とカゴメ様が亡くなってから一年が経った。

誰が死のうと世界は知ったことないらしく、容赦なく日は沈んで昇るし、お腹は減るし、また別の人間が死んでいく。

どうにかわたしと若君は十三まで生き延びた。マダラ様ももうじき十一になる。

マダラ様は弟ふたりが失われたのに変わらず明日が来ること自体に精神的ダメージを負っていたようで、その状態から立ち直ってきたなど思ったら今度は末弟のイズナ様がそろそろ戦場へ出ることにまた落ち込んでいる。

忙しい人だな。

優しい人でもある。

わたしの前では強がっていたいようだったがしよんぼりしているのがモロバレで、あなたはわたしには勝てないし隠し事もできないんですよと言い含めたら「落ち込む前にできることをしよう」と、イズナ様を鍛える方向で頑張ることにしたようだ。強ければ強いほど、単純に生き残る確率は上がるからと。

前向きでよろしいと思うが、これで最後の弟まで失ったらマダラ様はどうなってしまうのだろう。兄である若君がいらっしやるうちは大丈夫と思いたいが。

◇ ◆
十一月二十八日

本人の自己申告により明らかになったが、マダラ様は「人にもものを教える」ことが不得意らしい。

わたしもマダラ様相手に師匠の真似事を始めてもう数年になるが、未だに不得意なので気持ちはわかる。自分ではない相手に何かを教え導くのは本当に難しい。わたしのように、他人に興味を持たない人間には猶更だ。

「自分ができていることをできない相手に教える方法がわからないから、

イズナにもうまく教えられていない気がする」と仰るマダラ様に、まああなたは天才肌ですからね、と言いつつ「わたしとの稽古の場にイズナ様も連れてきますか」と提案してみましたところ、黙り込んだのち「しばらく考える」と言って帰ってしまった。

なんなんだ、嫌なら嫌ですぐ「それは嫌だ」とか言えばいいのに。「これ以上お前に懐かせてたまるか、イズナは絶対にお前にはやらなからな」くらい言うかと思っただが。

そういえば最近是谁も、わたしを嫁にだのなんだの言わないがあの話は流れたんだろうか。マダラ様もわたしを貰うと言ったのを忘れたのかもしれない。

それはそれで、将来マダラ様をからかうネタにするだけだから別にいい。

ちよつとだけ寂しい気もする。

ちよつとだけだが。

いやほんとにちよつとだけだが。

◇ ◆

十二月三日

マダラ様との稽古の日。

会うなりマダラ様が「この前の話だが……」と言い出し、何の話だかわからなかったがとりあえず真顔でいたら「お前、何の話かわかっていないだろう」と半眼で言われた。

あなたが覚えていることを他人も覚えているとは限らないでしょうよと言ったところ「お前のふてぶてしさは相変わらずだし、一生治らないんだろうな……」と言われた。

なんだか最近マダラ様が「お前のことはよくわかってる」顔をするようになってきた気がする。

腹立つ。別にいいけど。

若君はわたしの態度を諫めたことは一度もないが、マダラ様はちよこちよこ「他人に興味を持って」「考えてることを口に出せ」と小姑のように指摘してくる。

世話焼きなのだろうか。

正直猛烈に放っておいてほしい。ほしいが、小さな手で偉そうにこちらを指してくる姿がまあそこそこ可愛いと言えなくもないので甘んじて聞いている。

顔がいいと得だなあと感じる今日この頃だ。

「で、何の話ですか」と尋ねたところ、イズナ様をわたしたちの稽古に加えるかどうかの話だった。

「毎回つれてくるのはやめる、三回に一度くらい参加させるつもりだが構わないか」とのこと、わたしとしては「おう好きにしろや」という感じだ。

しかしわたしがイズナ様の稽古に参加したとしても、師匠向き的人格じゃないやつが一人増えるだけだがいいのか。水に水を足しても水にしかないが。

ところでどうして三回に一度なんて半端な参加率にするんですか、となんとなく聞いたところ、マダラ様はさんざん口籠ってから

「お前はオレの師匠だろうが……」

と言った。

イズナ様が必ずいるようになると、わたしを取られるみたいで嫌だ、の意だと受け取れた。

エッ!? カワイイ! と思った時には既にマダラ様を背負い投げしていた。

唐突に投げられて呆然とするマダラ様(無傷)、なんで投げたのか自分でもわからず呆然とするわたし、の図が完成した。

マダラ様は無言で姿勢を整えると「なんで投げた?」と至極もつともな疑問を呈し、わたしはそれに「なんかわかんないんですけど気付いたら投げてました」と答えた。

「情緒不安定かお前はー」と言われたが今回はわたしが悪い。宗家のお坊ちゃんを背負い投げして申し訳ありませんでした。

しかし唐突に暴力を振るう人だと思われたら今後の師弟関係に支障が出る。

なので素直に「マダラ様がお可愛らしいなあと思ったら手を出しました、決して憎くて投げた訳ではありません」と申告した。

それはそれで怒られた。「男にとってカワイイと言われるのはいっそ侮辱」らしい。

マダラ様は男の人と言うより男の子では？ と述べたら「見てろすぐにお前よりデカくなってお前のこと見下ろしてやる」と言われた。当然無理だと思いが頑張ってほしい。

その後マダラ様に「兄さんを投げたことはあるのか」と問われ、なかったので素直に「ないです」と答えたなら満足げだった。

敬愛する兄に被害が及んでいなくて安心したのだろう。

ところで「唐突に暴力を振るう人」と「対象にかわいさを感じた時に暴力を振るう人」では後者の方が狂気度が高かったかもしれない。まあいいか。

◇ ◆

十二月二十三日

明日はマダラ様のお誕生日だな、逆に朝一で家を訪ねてやろうかと考えつつ皿を洗うなどしていたらマダラ様の家に来てきた。

でかめの荷物を抱えてやってきたのでなんだなんだと思つたらそれは枕で、なんで枕なんだと思つたら今夜わたしの家に泊まる気で、枕が変わると寝つきが悪くなるタイプだから、らしかった。

繊細さんかよ。野営の時とかどうしているんだ。

と思つたので素直に聞いたら、夜に外で休まざるを得ない時は気合で寝ているらしい。難儀な性質ですね。

ていうかどうしてうちに泊まる気満々なのか？ と尋ねたところ、どうせお前はオレの誕生日だというのに自分からは来ないだろうし、当日迎えに来るのも腹立たしいため前泊することにしたらしい。

意味がわかるようでわからない。ひよっとしておぼかなのか？

勉強はできるのによくわからない思考回路をしていらっしやる。

「明日は朝からマダラ様を訪ねるつもりでしたけどね」と言ってみたら「どうしてお前はそう天邪鬼なんだ、もうちよつと素直さを学べ、馬鹿」と言われ年上の師匠に向かってバカとはなんだバカとはと掴み合いになり突発相撲大会が開催された。

マダラ様の体幹が出会った時とは比べ物にならないほどしつかり

していたので感慨深いものがあり、それはそれとして投げ飛ばした。
そしてマダラ様は本気で我が家に泊まる気らしく、母に丁寧な挨拶をし母の美貌に頬を赤らめていた。

おい!!! その女の顔に騙されるんじゃない!!! と両肩を掴んで揺さぶりたかった。マダラ様がどこの女と幸せになろうが知ったことではないが、母だけはやめてくれ。年の差がどうかそれ以前の問題だから。

「ケイカのお婿さんに来てくれたのかしら」とか頭が沸いてるような（ようなというか沸いているんだった）ことを言う母からマダラ様を引きはがし、「いいですかマダラ様、顔がよくても頭のおかしい女を好きになるのはやめておきましょうね」とわたしにしてはかなり語気を強めて言った。

言ったのにマダラ様は「トウカさん、お前に似てるよな……」だの「お前も大人になったらあんな感じになるのか」だのとぼやぼや呟いており、駄目だこれはもう……手遅れかもしれん……と絶望めいた気持ちになった。

幼さ故に未亡人の色香に惑わされているだけで、そのうち目を覚ますと思いたい。そうであってくれ。

一応客人であるマダラ様を一番風呂に入れようとしたら「押しかけた身でそれはできない」と殊勝なことを言うので「じゃあ一緒に入りますか」と提案したら全力で拒否された。そんな嫌がることある？ というわけでもう寝る。

マダラ様どこで寝る気なんだろう、わたしの部屋か？ わたしの部屋なのか？

◇ ◆
十二月二十五日

マダラ様お誕生日後夜祭。
いや別に祭りは開かれていないが。

誕生日前日からわたしの家に泊まり込む斜め上さを見せたマダラ様は、結局その夜はわたしの部屋で寝た。

宗家と違って我が家は狭いのだ、我慢していただきたい。

同じ部屋に布団を敷いて寝るのは嫌がらなかったし、深夜に寒さに耐えきれず半ば無意識にわたしの布団に入ってきていた。

懐かれたなあ。

それかわたしに母性ならぬ姉性でも感じているのだろうか。マダラ様には男兄弟しかいないので新鮮なのかもしれない。

誕生日当日、マダラ様と一緒に自宅から宗家に向かったところ、出迎えてくださったタジマ様に「なるほど」と言われた。なんだ。何に對して言われたんだ。

あと若君に真顔でめちやくちや見られた。怖いって。そこでマダラ様がまさかの無断外泊だったことが発覚した。

つまり宗家次男が一晩行方不明だったわけで、おいわたしが怒られるやつじゃねーかと慄いたが、どうやらわたしの母が「あなたのことこの次男、うちに来てますよ」とタジマ様に一報入れていたことも発覚した。

狂人とはかり思っていた母のファインプレーに、そういう真人間さを垣間見せるところが逆に嫌だわと洩面になってしまった。以前、消沈していたわたしに「そんなにつらいなら燃やしてあげましょうか（お前を）」と言ったこと、一生忘れないからな。

なんとなく母にじつとりした感情を抱いているらしきタジマ様は、母のそういうところを知っているのだろうか。知っていても知らなくとも嫌だ。

その母が愛情を感じていたらしき父が何者だったのかも日に日にわからなくなっていく。

また個人的大ニュースだが、イズナ様がわたしを「ねえさん」と呼んだ。少し前まで「おねえちゃん」と呼んでいたのに。成長を感じる。

マダラ様にも「わたしを姉さんと呼んでみてくれてもいいですよ」と水を向けてみたところ拒否された。

その直後、わたしにしか聞こえない小さな声で「兄さんの嫁になる気なのか」と聞かれ、「なるほどそうするとマダラ様の義姉になるな」及び「そーいやそんな話あったわ」と思い出し、「ごめんなさい聞かなかったことにしてください」と否定しておいた。

いやマジで完全に忘れていた。笑う。最近若君がわたしとマダラ様の修行の場に現れないのと何か関連があるのだろうか。

そういえばマダラ様は、イズナ様がわたしをねえさんと呼ぶことは止めていないがそこはいいのだろうか。

◇ ◆

十二月三十一日

今年も終わらうとしている。

ここ一年、×様を呼ぶ機会がなかっただけでも平和な一年だったと言えるかもしれない。

呼ばずに一生を終えたいところだ。

マダラ様とイズナ様も生き延びた。

イズナ様はうちは兄弟の中でも刀を扱う才能があるようだ。若君もマダラ様もそう口を揃えたので実際そうなのだろう。

わたしの弟子その2的ポジションになるかと思われたイズナ様だったが、わたしといると刀剣の才能がまったく伸ばせなため結局そうはならなかった。わたしは火の扱いにほぼ才の全てを振っているので仕方がない。

マダラ様に「お前なんかの弟子はオレにしか務まらないだろうし、元氣を出せ」と言われた。

別にイズナ様をお抱え弟子にできなかつたことに落ち込んではいなかったが、まあ慰めようとしてくれるその気持ちはありがたいか……と一瞬思いかけたが「おいなんだお前なんかとは」と思い直した。

多分マダラ様は一生生意気なんだろう。

でも多分わたしの方がマダラ様より先に死ぬんだろうな、年上だし生き様が雑だし。

とマダラ様に言ったら唐突に殴られた人みたいな顔をしたのでビビった。

マダラ様がお嫁さん貰うくらいまでは長生きしよう。

◇ ◆ ◆ ◆

六月二十日

なんだかんだで十四歳が近づいてきている。時の流れを感じる。

マダラ様もすくすく大きくなっており、その自覚があるマダラ様が「もうすぐお前より大きくなる」とか言っているのを「あり得るが嫌だ」と思いながら見守っていたところ、ここ数カ月でわたしの身長がメチャ伸びた。

肉薄しかけていたマダラ様の目線がまたガクツと下がったのでわたしとしては内心大喜びである。ほら、師匠が弟子より小さいのは恰好がつかないかなくて。

そして乳もでかくなった。

ほんとに乳が大きくなった、どうしたものか。

同年代のうちには女子より、明らかにわたしの方が二回りは大きい。

邪魔になるから困る。そこは成長しなくていい。

そういえば母は豊かな胸をしている。遺伝か。火遁の才以外は受け継がなくてよかったのだが。成長期だし食事は人並みに摂っているが、摂取した栄養がおそらくほぼ全て乳にいつている。あと身長。

相も変わらず千手との戦いは続いており、頻繁に戦場に立っている。戦場では乳はただ邪魔だ、重い。ただでさえ弱点の接近戦がより苦手になったわけで、順調に死に近づいている。

殺されるにしろ周囲の敵をひとりでも多く巻き添えにして焼死する覚悟くらいはあるが、先日マダラ様のためにもできるだけ長生きしようと思ったばかりだ。より気を引き締めていく必要がある。

乳も気合いで引き締まってくれないものか。

◇ ◆

七月六日

今日の組手の最中、うっかりわたしの胸に触れたマダラ様が張り手でもされたみたい飛び退き、見るからにおろおろしていたので思わず「なんかすみません」と謝ってしまった。

このわたしに思わず謝罪をさせるとは、やるな。

もう邪魔だし腕いでやろうか、と半ば本気で自分の胸を鷲掴みにしたところそれを察知したらしいマダラ様が飛びついてきて「死ぬから

やめろ」と真つ当なことを言ったので、やめた。まあ出血多量で死ぬだろう。

でも本当に邪魔なのだ、いつかこの乳のせいで窮地に陥る時が来ないとも限らない。

千手の中にわたしの乳のデカさにつけ込むような卑劣野郎がいな
いことを祈る。

◇ ◆

九月七日

若君もわたしも十四歳を越し、お互い頑張つて生き延びてきたよ
なあと何となく考えている。

明日死ぬかもしれないが。

そして、自分の肉体的成長（なんか日に日に大きくなっている気が
する、特に胸が）に気を取られて最近まで気付かなかったが、若君が
急成長していた。

背の高さで思い切り負けている。

あと声変わりをしていた。

少し前に会った際、妙に声を出しづらそうだったため「喉でも痛め
たんだろうか」と思っていたが、成長故のものだったらしい。

わたしも背が伸び、母に近い体つきになってきたが、声変わりはし
ていない。

男性ほどでなくても女だって多少は声が低くなるはずだがわたし
の声に変化は見られない。

そのうち変わるのだろう。

わたしたちの成長を、なんなら本人よりよく把握している様子のマ
ダラ様が最近「オレだってすぐに大きくなる」「兄さんと同じくらいに
はなるはず」「少なくともお前よりはでかくなる」とか聞いてもいない
のにブツブツ言ってくる。

マダラ様もちゃんと成長はされている。だがうちの同年代男子
と比べ、やや小柄なようだ。それを結構気にしているらしい。

あと数年もすればわたしに並ぶか追い越すかするだろうに、何をそ
う焦っているのだろうか。やはり宗家次男として、より早く強くなり

たいと思っていらっしやるのだろうか。

いじらしさを感じ、体格差を活かしてマダラ様を抱っこしてみたところ子ども扱いするなどブチ切れたので「そういう風にすぐ怒るところが子どもなのでは？」と煽ってみたところ大人しくなった。

◇ ◆

十月二十日

秋だ。

秋冬は好きだ、空気が乾燥してものがよく燃えるから。

やはり火より魅力的なものはそうない。

など考えていたら唐突にタジマ様に「宗家に顔を出さないか」と誘われた。

若君やマダラ様とは宗家に行かなくても普通に会えるので「嫌だが……？」と正直思ったが、「家の不要品を燃やすので火が見られますよ」という誘い文句に食い気味で「行きます」と答えざるを得なかった。さすが頭領、誘い上手だ。

というわけでうちは宗家に行ってきた。

わたしのような三下奴が行ってもほぼ無視されるかと思っていたが、割と歓迎された。

なんなら過去一ちやほやされたかもしれない。

これまで挨拶程度しか交わしていなかったヒカク様に、妙に「元気にしているか」「体調に問題はないか」とか話しかけられた。

まだお若いのにタジマ様の側近を務めるヒカク様に絡まれる心当たりは特になかったが、立場、対千手の戦力となっているわたしが元気でないと困るのだろう。

千手は相変わらず手強い。燃やしても燃やしても雨後の筍のように湧いて出てくる。

千手の頭領である千手仏間（どんな名前だ）は遠目に見たことがあるが、千手らしく、よく言えば質実剛健な感じ、悪く言えばダサかった、見た目が。

ダサかろうが千手頭領に相応しい強さしぶとさは備えているようなので、相対したらこちらがやられる可能性が高い。会うことがあれ

ば覚悟を決めなくてはならない人その一だ。

跡取りとなる息子もいるそうだがそちらは見たこともない。ある程度秘匿されているのだろう。

タジマ様が言った「不要品を燃やす」のは本当で、反故紙にもできない書類を燃やすのを「わたしがやります」と立候補して燃やさせてもらった。

ついでに芋だのを焼いたのを食べさせてもらった。

なんとなくわたしを肥えさせようとしている気がする。なんでだろう、食われるのだろうか。

小さく燃える炎を「これはこれで趣がある」と眺めていると、音もなく隣にきたタジマ様に「覚えていますか？」と問われ、マジに何の話かわからず「マジに何の話かわかりません」の顔をしてしまった。

主語を省かないでほしい、主語を。

しかも結局なんだったのか教えてくれなかった。なんだったんだ。そこにマダラ様か若君がいれば「あれ何だったんすか」とでも聞けたのだが若君はそもそも不在、マダラ様はタジマ様と話すわたしを何故か遠くから物言いたげな顔で見っていた。

タジマ様が離れたあとわたしに近づいてこないマダラ様に爆速で近寄り、「今のなんだったと思います？　というかどうかどうしてこちらに来ないんですか、ねえ」と絡んでいたら「知らない、オレに聞くな」と嫌がられたが逃げられはしなかった。

そんなわたしたちを、今度は宗家一派の皆さんが遠巻きに見ていた。

何？

◇ ◆

一月十四日

真冬だ。

相変わらず寒さに弱いマダラ様は、わたしと外で会うたびテンションが低い。

一方、何故か（本当になんでなんだか）常に体温が異常値で寒さを感じないわたしは絶対調で、マダラ様から恨みがまじげな目で見られ

ている。

ところでそのマダラ様がくつついてこなくなった。

去年だか一昨年くらいまでは、真冬になるとマダラ様がさりげなく寄ってきてわたしで暖を取っていた。なのに今年は必要以上に近づいてこない。

なんでだ。つい先日十二歳になったマダラ様が「オレはもうガキじゃない」と言ったのに爆笑したのをまだ根に持っているのか。

いやでも十二歳はまだ子どもじゃない？

わたし自身も、十二の頃はもつと幼かった気がするし。

ただ若君に「お前は、中身は初めて会った頃から変わっていない」と本気の口調で言われたので自分自身のことはあまり参考にしない方がいいのかもしれない。

あとそれは若君も同じだと思う、あの方も出会った時から中身はさほど変わっていない。わたしの方が高かったはずの背は追い越されたが。あと声も低くなった。

未だにわたしの声は幼げで、それを実は少し気にしてたりするわけだが、もう少し落ち着いた声になってくれないものだろうか。

なお乳は順調に大きくなっている。望んでいない。

声は幼いまま背と乳ばかりが成長していつており、自分がアンバランスな生き物になっていつている気がする。

若君とわたしがによきによき大きくなっている一方、肉体的な成長はゆっくりめらしいマダラ様がまだお小さいのが正直嬉しいのだが、それを本人に言ったら本気で怒られるだろうことは流石にわかるので黙っている。

イズナ様は相変わらずもつと小さくてかわいい。そのままであつてくれ。

◇ ◆

三月二十七日

今日も今日とてマダラ様と修行。

無事に終わり、帰っていくマダラ様と入れ違いで若君がやってきた。

若君は若君で最近お忙しく（うちはの跡取りとして、タジマ様から学ぶことが多いのだろう。知らんが）会うのが久しぶりな気がする。「久しぶりですね、お元気でしたか」

とありふれたことを言うわたしに、若君は妙に元気がないというか何か思い詰めたような表情で、「おい深刻な相談とかされても困るが」と身構えるわたしに「ふたりきりで話す時間を作れないか」と言った。今じゃ駄目なのか。今ふたりきりじゃないか。

という顔をするわたしに、「ここではいつ邪魔が入るともしれないから」と言つた若君がこれ以上なく真剣な表情で、迂闊なことを言える雰囲気ではなかった。

だが若君ほどではないがわたしも案外忙しいのだ。対千手の本格的な戦力と見なされはじめたらしく、戦場にただ放り出されるのではなく「ところでお前はと思う？」と軍略会議的な場にちよこちよこ呼ばれるようになってきたので。

若君を除くと最年少な上、唯一の女なため居心地は最悪だが、できるだけ堂々とするようにしている。

なお母は会議的な場には基本的に呼ばれない。理由は推して知るべしな感じだ。

来月の頭なら互いに予定を合わせられそう、ということ、じゃあその頃に桜でも見ながら話しましょうか、ということ、今日は解散となった。

そして何かを忘れている気がする。



三月二十九日

夕方、帰宅すると実家が燃えていた。

人間驚きすぎると笑うことしかできないらしく、半笑いで立ち尽くしている、燃える実家から母とタジマ様が無傷で出てきた。

燃える家を背景に登場した母とタジマ様は理由は不明だがギスギスしており、ただタジマ様が「私がトウカさんを怒らせてしまった」と仰っていたので、何かしらの言い争いがあったものと思われる。

それに怒った母が燃やしたらしい、家を。

せめて宗家を燃やしてくれ、どうして頭領がわざわざうちに来て母と口論しているんだ。

母が本気になって放った火遁なら家の半焼程度で済むはずもないが、その程度で抑えられているのは母にギリギリ理性があったからだろうか。タジマ様が頑張つて押しとどめたのだろうか。

半分燃えた家を死んだ目で眺めるわたしに、母が何の脈絡もなく「ケイカ。納得できないこと、やりたくないことは死んでもやっつては駄目よ」と言った。

まず現状に納得いつていないが、母がいつになく真剣だったので領くほかなかった。

というわけでこの日記は宗家の一室で書いている。

というわけでじゃない、なんなんだよ。

燃えた家はタジマ様が責任を持って直してくれるらしいが、それまで宗家の客間住まいだ。母ともども。

マダラ様イズナ様と同じ部屋に放られるかと思つたけれどそうはならなかつた。

マダラ様に「少しの間お世話になります」と挨拶をしたついでに「同じ部屋でもよかつたですけどね」と言ってみたところ、「もうそんな年じゃないだろ」と返された。

◇ ◆

四月五日

満開だった。桜が。

花見に洒落込むかと言いたいところだが、いやわたしは集団が苦手なのでそれは嘘だが、確かに花見日和ではある。

戦日和とほぼ同義なのだが（適温で晴れ、活動しやすいなら戦もしやすい）、今日は突発的な小競り合いもなく、少し前に若君と約束した通り、二人で桜を見に行つた。

未だにわたしの家は建て直し中のため、若君と同じ門から出てきたわけだが。

ただ、同じ門から同時に出てきたものの、帰り道は別だったし帰宅時間も別だった。

桜を見に行つた先で若君に

筆が進まない。

もう書かなくていいだろうか、どうせ誰にも見せない日記だ。

そもそもどうして日記なんか書いていたんだつたか。

そうだ、いつしかわたしが母のように狂い果てることがあつたら、そのとき正気に戻るよすがとなるように、忘れてしまわないように記録しようと記しているんだつた。

じゃあ書いておくべきだろうか。

だが将来のわたし(狂)がこれをも呼んでも更なる精神的動揺を得るばかりで正気には戻らない気がする。

ひとつだけ書いておく。

若君は女を見る目がない。



「俺と番つてくれるな」

「いやです……………」

やや引き攣つた顔でそう即答した、まもなく十五になる少女に“若君”は腹を抱えて笑つた。笑うほかなかつた。

彼を、うちはキセノをそう呼ぶのは目の前のうちはケイカただ一人だつた。家の者は普通に「キセノ様」と呼ぶし、いつから彼女が自分をそう呼ぶようになったのか、記憶はおぼろげだ。

ただ堂々と、宗家の若君なら若君でしょう、と言われたことを覚えている。

基本的なふてぶてしい彼女は今、珍しく困つたような、気まずそうな顔をしている。そして「十五くらいになったら婚約のことをちゃんと考える」と、頭領である父と約束したことを完全に忘れており、今思い出しました、という顔もしていた。

おそらく本人に言つたら嫌がられるだろうが、本当に父から聞く彼女の母親にそっくりだつた。彼女の母親もほんとうに人の話を全く

聞かず、興味の無いことは記憶にとどめず、宗家からの命だろうと嫌なことには全身で嫌と返す人だったらしい。らしい、というか、存命なので現在もそうなのだろう。

そしてそっくりなのはキセノとその父タジマも同じであるようだった。

まさか親子二代でフラれるとは思っていなかった。

マジかよ、宗家長男からの求婚だぞ？

という気持ちがないわけではない。本来分家の女であるケイカに拒否権などない。

立場の差を告げれば、どうやら母親よりは社会性のあるケイカは諾とするだろう。

だがキセノには確信があった。もし今、宗家からの命として彼女に嫁入りを強制すれば、彼女は二度と自分の前で笑わなくなるだろう。

生まれつき、あまり感情を表出させない彼女はここ1、2年でよく笑うようになった。本人に自覚はないだろうし、同年代の女子と比べればまだまだ不愛想だが、それでも確かに明るくなった。

それに寄与しているのは、自分ではなく弟のマダラなのだろうなということもキセノはわかっていた。

「……………。ケイカ」

「うわっ、はい」

「うわっってお前」

「いや…………すみません。わたしにも気まずいという感情はありまして…………」

「気まずいのか」

「…………宗家ご長男に、自分のとこに嫁入りしろと言われて気まずくならない分家はいないかと」

「同意すればその気まずさからは解放されると思うが？」

「納得できないことには死んでも同意するなど、少し前に母に言われたばかりでして」

「納得できないのか」

「はい」

「納得はできるだろう。お前は強い、少なくともうちの女の中では一番に。自分の子の母になってももらいたいと考えるのは何かおかしいか?」

ケイカは絵に描いたような「苦虫を噛み潰した顔」をし、少し黙った後に「あなたの、というか誰かの妻になっっている自分を想像できないんです。誰かの母になっっている自分はそれ以上に」と言った。

「そうか」

「はい」

「なんとというかアレだなあ、お前は、俺のことが好きではないんだろうな」

趣味が自傷の人を見たような表情で停止したケイカは何かを言いかけ、押し黙り、絞り出すように「嫌っているわけではありません」と呟いた。

「……………宗家のご長男に言うことではないとわかったうえで言いますが……………あなたのことは友人だと思っています。唯一の」

「うーん、うん。そうだなあ」

だがキセノが彼女に求めるものは友愛ではないのだ。

もう少し甘く、もう少しドロツとした感情が欲しいと思っている。

キセノが宗家でなければ、せめて長男でなければ、長期戦に持ち込むこともできたが——それは難しいだろう。彼の立場がそれを許さない。実父も通った道だ。その父は自分が諦めた後、早々に分家のパツとしない男に想い人を搔っ攫われたそうだが。それを自分に当てはめるとただ胃が痛い。

「ケイカ」

「はい」

「これ以上は何も言わん。好きに生きてくれ。俺はそれだけで救われる」

「え……………はい。ありがとうございます」

爆速で話を畳みに入り帰宅の構えを取る彼女に、どうしてこんな薄情な子を好きになっちゃったかなあとガツクリきつつも、「帰る前にこれだけ聞いてくれ」と彼は言った。

「マダラを頼む」

「俺に何かあった時、宗家を継ぐのはあの子だ。……お前は俺以上にわかっているだろうが、あの子は強い。忍としての才は俺を凌ぐ。だが」

「……だが？」

「めんどくさい子だ。お前とはまた違う方向で。ただお前と同じくらいめんどくさい子なのは確かだ」

わたしって面倒くさかったのかと愕然としているケイカを意識的に無視し、キセノは兄として続けた。

「めんどくさかろうがあの子は次男で、宗家の柵から逃げられない。繊細な子でもある。俺に何かあった時は、あの子のことを頼む」

「……何か、ってなんですか。縁起でもない。それに、わたしなんかに頼んでいいんですか」

「お前以上に頼みになる人はいないと思っているよ」

だってお前、マダラのこと好きだろう。

◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆

うちはケイカが、分家の分際で宗家長男の求婚を袖にしたらしい。という話を宗家関係者が知らないとは思えないが、わたしは特に石を投げられたりなどせず、そのまま宗家でしばらく過ごした。

再建された実家に母と共に帰れた時は、正直ただ「重圧から解放された」と思ったし、宗家に長期でステイするのはもうこりこりだとも思った。

やはり実家は良い。同居人が狂人だとしても。

キセノ様には、わたしなどよりずっと相応しい女性が妻としてあてがわれるだろう。その女性は戦場に出ず、家で奥さんとしての役目を立派に果たすし跡継ぎの子も産む、そんな女性に違いない。

そうだ、ただ「強いから」だけでわたしが宗家長男の妻になりかけたのはどう考えてもおかしい。強ければいいものじゃないだろう。忍の才は確かに親から子に受け継がれる傾向にあるようだが、必ずそうとも限らないし、鷹が鳶を産むことだってあるはずだ。

だからわたしが若君に応えなかったのはおかしいことではない。と思いたい。

しかしこれで、より覚悟が決まった。

やはりわたしは戦場で生きよう。

それがマダラ様たちご兄弟を守ることに繋がるはずだ。

うちはが敵に、主に千手に滅ぼされないよう頑張る。

わたしがそうやって稼いだ時間で、若君には千手と和解するなり滅ぼすなり、現状を打開する道を切り開いてほしい。

わたしだって別に千手が憎いわけではないのだ。ただ炎を揮いただけで。



うちはの子を殺そうとしていた千手の子を、ケイカはすんでのところで殺した。

一撃で仕留めたわけではない。けれど火のいいところはたとえ軽傷でもその熱と痛みで獲物の動きを止められるところで、突如自分の身を襲った衝撃に止まったその子を、ケイカは容赦なく二撃目で葬り去った。

あ、身体の一部が燃え残ったな、と思った途端、千手の忍がこちらに肉薄するのが見えた。舌打ちひとつで下がり、一気に距離を取る。殺されかけていたうちはの子は脇に抱えた。

カワラマ様、と、一部しか残っていないその子を千手が呼んだ気がする。

様付け、ということとは、あの子は——せいぜい七つくらいにしか見えなかったあの子は、千手の中でも位の高い子だったのだろうか、ケイカは走りながら思考する。

宗家か、それに近い子だったのだろうか。カワラマ……瓦間、か？ もしかして千手仏間の子だろうか。

であれば、微妙なことをしてしまったな、と思う。

おそらくうちは一族からは賞賛されるだろう、敵の跡取り候補を消

したのでから。

だが、ケイカと同じこの戦場にいるはずのキセノは悲しむだろう。幼い子が犠牲になった、千手との和解がまた遠くなったと言って。

「……そう暴れないでください、まったく感傷に浸る隙も無い」

抱えていた、名も知らないうちの子がびちびちと暴れるのを、周囲の安全を確認してから放り出す。

千手カワラマと同じ年くらいに見える彼は小さく咳き込んでいて、どうやらケイカの胸部に顔を埋めていたために十分に呼吸ができていなかったらしい。

「すみませんね、乳が無駄に大きいもので。あとあなた、もう少し周りを見て動かないと死にますよ。今回はわたしが助けられましたけど運がよかったです。次はないと思ってくださいね」

見上げてくるその子が、半ば呆然と「生ける炎……」と言ってくるのを「それはわたしじゃなくて母の方です」とあしらい、彼を放置してまた戦場に舞い戻る。

両一族の頭領が出張ってくるほどではないが、小さくはない規模の争いだ。こんなところで身内の子とわちゃわちゃしていたらこちらがいつ殺されるかわからない。

ケイカは駆けた。助けられる身内がいれば助け、殺せる敵がいれば殺し。もう何度繰り返したかわからない行為を繰り返す。

山場を越え、両一族が撤退の流れとなった頃、自陣営に合流した。戦果は上々だろう。傷らしい傷も負っていない。周囲を見回すと、先ほど助けた子どもの姿が見えた。あの子も生き残ったようだ。

しかし空気がおかしい。名状しがたい、忌まわしい何かでも目撃してしまったような、「あってはならないこと」が起きた雰囲気漂っている。

これは只事ではないと判断したケイカは、その気配をかき分けるように歩き、部隊長のもとへ行った。

何があったんです、と尋ねるケイカに、部隊長は傷みを堪えるような顔をする。

そしてケイカは、自分が若君と呼び慕う彼が死んだことを知った。

棺が土に覆われていく。

千手瓦間が命を失った日、奇しくもうちにはキセノの命も途絶え。

どちらが加害者で被害者なのかなのかもわからないまま、犠牲者だ
けが増えていく。

天啓

六月二十日

前が見えないほどの豪雨。

若君の通夜。

親族しか参加できないはずだが、呼んでいただけた。

マダラ様に「お前には喪服は似合わない」と言われ、「うちはこの日常着も喪服みたいなものじゃないですか」と返した、ような気がする。

◇ ◆

六月二十一日

若君の葬儀。

一族中の人間が参列していた。

タジマ様やヒカク様に「大丈夫か」と聞かれ、「何がでしょうか」と返した。

ような気がする。

イズナ様が泣きはらした目をしていた。

◇ ◆

六月二十二日

わたしは大丈夫だ。

◇ ◆

六月二十三日

母に「やっぱり燃やしてあげましょうか」と言われる。

◇ ◆

六月二十四日

マダラ様がわたしの様子を見に来た。

「顔が白いぞ」と言われたので、わたしはもともと色白ですと言った。中断していた修行を再開させるとマダラ様から申し出があった。

喪中では、と尋ねたところ、タジマ様から「喪に服す暇があるなら修行をしない」と言われていると発覚。

それはどうなんだろう。

三日後にまた会うことになった。



六月二十八日

昨日、割と大きめの出来事があったのだが、日記をしたためる気がとてもなかった。

というわけで昨日何があったかを書こうと思う。

まず目が覚め、「今日はマダラ様との修行の日だな」と思い出したので起床しようとしたのだが、できなかった。

床から起き上がれなかった。わたしの上だけ空気の重さが百倍になったようだった。「何事」と思ったがずっとそうしているわけにもいかないの、布団から這って出た。

全身が鉛のように重く、そういう妖怪みたいに身体を引きずりながら自室を出るとそんなわたしを見た母が「あら」と言った。あらじやないが。

人形を持ち上げるようにわたしを起こした母が食卓につかせてくれたが、全身ぐにゃんぐにゃんだしそもそも食欲がゼロだ。わたしは一体どうしてしまったんだろう、戦うことができなくなったら本気で困るなど考えていると、母がわたしをじっと見て何か言ったのだが、うまく聞き取れなかった。

曖昧な表情をしていただろうわたしに母が困ったような、何かを決めたような顔をして、多分なのだが、わたしを殺そうとした。

母は火遁だけは印を組まずに発動できるのだが、あ、これ燃やされる、死ぬな、と気付いた。

気付いたところでどうしようもなく死を待つばかりのわたしだったのだが、その瞬間、かなり強めに戸が叩かれた。

で、マダラ様の声で「ケイカ！」と呼ばれた。

母がわたしを放置したまま普通に応対に出て、招かれたマダラ様が普通に入ってきて、食卓でぐにゃんぐにゃんになっている（後から言われたが、死体じゃないとおかしいくらい蒼白だったらしい）わたしを見て小さく悲鳴を上げた。

それからのことは薄い膜が張ったように遠い記憶なのだが、母がマダラ様に「生きているのが苦しいくらいにづらい様子だから、この子

を燃やしてあげようかと思つて」と言い、マダラ様が完全に絶句していたのは覚えている。

死んだイカかタコみたいなのわたしをマダラ様が抱えて外に連れ出した。母はそれを止めなかった。

「マダラ様、わたしを抱えられるくらいには大きくなつたんだなあ」と感慨に浸るわたしが連れていかれたのは宗家で、速やかに医者に引き渡された。

マダラ様はわたしから離れなかった。

なんでかタジマ様まで様子を見に来た。

診断の結果、肉体的な病ではなく精神的なものだろうとのことだった。

気鬱の深刻なやつ、らしい。

自分がそこまで精神的にやられている自覚はなかったもので、はあ、そうですか……となつていたのだが、タジマ様に何とも言えない顔で「トウカさんが夫を亡くした時、今の貴女のようになっていました」と言われ、臥せつたままタジマ様を二度見してしまった。

マジかよ、あの母がそんな真人間みたいな反応を？

そのあと母はどうだったんですか、と尋ねたところ「数日で回復して、今のようになつた」と教えてくれた。

今〓敵味方問わずに灰燼に帰す生ける炎だが、まあ回復したなら何よりだ。

じゃあわたしも放っておいたら数日で元に戻るでしょうか、と尋ねてみたのだが、それには浮かない顔だった。こればかりは心の問題だから何とも言えないと。

肉体的な負傷ならまだしも、心の問題で戦場に立てなくなるのは本当に嫌だ。なんだか弱者な感じがするし、そもそもわたしはマダラ様を守らなくてはならないのに。

それが最後に若君と交わした約束なのに。

若君のことを思い起こすと謎の吐き気に襲われるので、正直あまり思い出したくない。

とにかく今日はもう休みなさい、と言われたのでありがたく宗家で

厄介になつてゐる次第だ。

自宅に帰ろうかとも思つたのだが、マダラ様に「絶対に帰さない。絶対に」と強く腕を握られたので断念した。

◇ ◆

六月三十日

未だに宗家にいる。

そして立てるようになった。

ここ数日、褥からロクに起き上がれない寝たきり老人生活だったので、立てるようになっただけで「快挙！」という感じだ。

わたし以上にマダラ様たちが喜んでいた。

マダラ様、そしてイズナ様は何度もわたしの様子を見にきては甲斐しく世話を焼いてくれた。

いいんだらうか、マダラ様はもはやうちのはの跡継ぎだが。

わたしに張り付くマダラ様に、タジマ様もヒカク様も何も言っていないようだったので、宗家的にはオツケーなのかもしれない。

マダラ様に、冗談で「一緒に寝てくれたらすぐに元気になるかもしれないですね」と言ったら、少し考えたあとに布団に入ってきてくれたのでテンションが上がった。

調子に乗って正面から抱きしめてみても逃げなかった。

「あつい……」と言つて真つ赤になつていたので暑かつたのだろう。それでも離れていかなかったマダラ様は情の深い子だ。

そういうところが若君に

やめよう

◇ ◆

七月五日

「いい加減に家に帰ります」「帰るな、帰っちゃだめだ」の押し問答の末、マダラ様を伴つて実家に戻ることにした。

伴つて、と言つても、わたしが母に害されないと判断したらマダラ様は宗家に戻る約束で、だ。

というわけで警戒しているマダラ様と一緒に実家の門を久々に潜つたわけだが、母はあまりにいつも通りに「おかえり」とか言つて

いた。

娘を燃やそうとしていた人とは思えないと愕然とするマダラ様に、まあこの人はこんな人なんで……と謎のフォローをしつつしばらく三人で過ごした。

マダラ様はずっとピリピリしていて、母の一挙一動にびくついていたのが言っちゃなんだが面白かった。

後ろ髪を引かれていいる様子ながらも、マダラ様は数時間で宗家へ戻って行った。

幾度も「何かあったらウチに来ていいんだからな」と言ってくださって、照れ隠しもあり「マダラ様ってわたしのこと結構好きですよね」と言ってみたとこ押し黙られ、そのまま帰られた。

余計なことを言ったのかもしれない。

追記。

なんか目に違和感があると思っていたら、写輪眼が発現していた。

今!?

◇ ◆

七月六日

流石に黙ってるのはよくないよな……と昨日の今日で宗家に赴き、「なんか写輪眼が出ました」とタジマ様たちに報告しに行った。

タジマ様の反応も「今かよ」という感じだった。

タジマ様曰く、写輪眼は大きな喪失や怒りを経験した者に多く顕れるらしい。

理屈がわからなくて怖い。

つまりわたしは、若君が亡くなった喪失感から写輪眼を得たのか。

なににせよ、わたし自身が強化されたことには変わりないと写輪眼を発現させた状態で修行などしてみたのだが、「わたしにはこの眼、宝の持ち腐れでは」という気持ちしかない。

発動しているだけでじんわり疲れるし、何より写輪眼特有の「見切り」がわたしの戦闘スタイルと相性がよくない。

見えなくても全部燃やせばよくないか？

わたしの弱点である体術の未熟さを多少なりともカバーはできる

かもしれないが、弱みを埋めるより強みを伸ばしていききたいタイプだ、わたしは。

あと幻術も苦手なままだ。

写輪眼、マジで意味ないかもしれない。

◇ ◆

七月十日

マダラ様が激拗ねしているので「どうしました」と問い詰めたところ、わたしに写輪眼が出たのが面白くないらしい。

うちの男は写輪眼が出て一人前というか、写輪眼が出てからが本番みたいなどころがある。

その理屈でいくとマダラ様はまだ半人前だ。

いいじゃんマダラ様まだ子どもなんだから、十二歳とかそこらでしようよ今。

そういえばわたしはもうじき十五になるのか。

最近自覚したが、わたしは日付とか人の年齢とかを覚えるのが苦手だ。数字に弱いのもかもしれない。我ながら馬鹿っぽいな、大丈夫か。

十五になる頃に若君に嫁ぐかどうか考える、と宣言していたのだったか。

彼はわたしを本気で娶る気だったのか。当人が他界している以上、わたしの意思がどうだろうと若君の妻になることは永遠にないが。

やっと若君のことを考えても体調を崩さないようになった。

正確に言うなら、

若君のことを思い出す↓体調不良になりかける↓なんでかマダラ様の顔が浮かぶ↓持ちこたえる

を繰り返している感じだ。

たまにイズナ様の顔もセットで浮かぶ。

出演料とか払った方がいいのだろうか。

◇ ◆

七月二十日

マダラ様との修行の日。

マダラ様とふたりきり、こうして修行するのも何回目だろう。

師弟になったあの日から何も変わっていない気すらするのに、宗家の子はもうマダラ様とイズナ様しかいない。

最近、マダラ様とイズナ様に死んでほしくない、とよく考える。千手を滅ぼしたとしても敵がいなくなるわけじゃない。

若君がかつて語ったように、千手と手を結ぶべきなのだろうか。そんな方法、いくら考えてもわたしじゃ思いつきそうにない。

全部燃やしてしまえば楽なのに、マダラ様達にはいなくなっほしくない。

困ったものだ。



九月一日

十五歳になっていた。

当日も普通に戦だったため祝うどころではなかったが。

諸々落ち着いた頃にマダラ様イズナ様から言祝いでいただいた。素直にありがたい。

我ながらここ一年で成長したと思う、肉体と戦闘能力が。知能は知らん、自分ではわからない。

マダラ様がわたしを見ながら、どこか複雑そうに「ますます大きくなったな……」と言ったので「乳の話かな?」と思い「わたしの乳がですか?」と返したらメツチャ怒られた。

「恥じらいを知れ」だそう。

お前はもう十五で、いつ縁談の話が出てもおかしくはないのだから乳がどうこう言うなど。

恥じらいどうこう以前に「いつ縁談の話が出ても」のくだりに動揺し「まさかまたわたしの嫁入りの話が出ているんですか、ねえ」とマダラ様の両肩を掴んでしまった。マダラ様はビビっていた。

マダラ様曰く、別にそういうわけではないが、うちの女なのだから十五にもなればいつその手の話が本格化してもおかしくない。らしい。

言われてみればその通りだ、わたしもう十五じゃん。

周囲の女うちはは花嫁修行をしている時期だ。女友達がいなさす

ぎてピンときていなかった。精神的には十歳の頃から変わっていない気がするのに肉体だけが無駄に成長してしまっている。

「嫌なんですが、わたし、どこかの男に嫁がされるんでしょうか。嫌なんですけど」とマダラ様に訴えてしまった。

オレに言うな、諦めろとでも言うかと思われたマダラ様はしばらく黙り込んだのち、ちっちゃい声で「ほんとは兄さんがよかつたんだよな」と言った。

なにが？　なんて？　と困惑していると、続けて「オレが何とかする」と言ってくれださった。

マジ？　信じますよ？

◇ ◆

九月三日

戦場で死にかけたりなんだりしているうちにわたしの身体は傷付いて、ふさがりはしても消えない傷跡があちこちにある。

特に腹部の傷がひどい、千手に斬られたんだったか。

よく生きてるなわたし。ナイスガッツ。

幼いマダラ様はこの傷を見て「オレが嫁に貰ってやる」と言ってくれたんだったか。

責任感が強いと言うか、情が深い。若君の嫁にしないためではあつただらうけれど。

しかしマダラ様がそう言うほどに醜い跡であることには違いなく、こんな傷のある女、誰も貰おうとはしないのでは？　心配しなくても嫁がなくて済んだりしないか？

嫁入りの何が嫌って、戦場に出られなくなることだ。

母は気ままに戦場で災厄を撒き散らしているが、父が生きていたら止めていたかもしれない。

わたしの旦那だって、わたしが戦おうとしたらきつと止めるだろう。家のことをしなくてはならないし、何より子を産み育ててなくてはならないし。

第一線に出ている今でさえ若君達を亡くしたのに、家の奥に籠るようになっては余計にマダラ様たちを守れない。

もしかして大人しく若君に嫁いどいた方がよかつたんだろうか。あの方なら話が通じただろうし。

でもなあ、死んじゃったからなあ。

あとどうしても彼と夫婦になるイメージが湧かない。

今となつては言つても詮無いことだけでも。

◇ ◆

十月二十日

マダラ様が縁談がどうこうとか言うから警戒していたが、誰からも嫁に行けなど言われることもなく普通に暮らしている。

マダラ様がなんかしてくれただろうか。

ていうかマダラ様にわたしの縁談にどうこう言う権限があるのだろうか。

マダラ様が宗家の跡継ぎとなつた今、戦闘要員として一線にいるわたしの処遇に口を出す権限は確かにありそうだ。

戦道具として優秀なわたしを誰かの妻として家に留めるのは一族のためにならない、とか、タジマ様あたりに上申してくれているのかも。

だとすれば有難いんだが、なんだろうなこの違和感というか胸のざわつきは。

そりや初対面の頃に比べればだいぶ大きくなったとはいえ、マダラ様はまだ小さい。腕だつて大人に比べれば細っこくて、胸囲に至ってはわたしの三分の一くらいしかない気がする。

もうかなり大人なわたしの行く末を、幼いマダラ様が左右できることへの腹立ちだろうか。宗家の跡継ぎと分家の娘だ、そもそも身分差があることはわかっているが。

という話を何をもち狂つたか母にしてしまったのだが（雑談できるような友がわたしにはいないのだ、もはや）「マダラ様にずっと子どもでいてほしいのね」と言われて動揺した。

◇ ◆

十二月二十四日

マダラ様お誕生日。

昨日、当然の顔でマダラ様がうちに来て一泊したのでウケた。来るなよ。いや来てもいいけど。

枕を持ってきていなかったので「ご自分の枕はいいんですか」と尋ねてみたのだが、もうなくても眠れるらしい。

「今夜は一緒に寝てくれるのかな」と若干ワクワクしたが、一人で別室に行ってしまった。別室と言っても客間のような立派なものじゃないし、狭いのに。

タジマ様達に泊まりに来ること言ったんでしようね、と確認したら、むしろ行ってこいと送り出されたらしい。なんでだ。

マダラ様はもう、そこらの大人より強い。わたしよりは弱い。敵の大人を屠れるだけの実力がある。同じ年の頃の若君より強いかもしれない。

このまま、誰にも殺されないまま大人になってくれるのだろうか。成長してほしいけれど大人になってほしくない。

ずっとかわいいマダラ様でいてほしい。

この感情はなんなんだろうか。

◇ ◆ ◆ ◆ ◆

三月二十五日

春だ。

戦の季節である。

寒さに弱いマダラ様にとっては過ごしやすい季節になったが死にやすさ度は爆上がりした。

マジで死なないでくれよなという気持ちでマダラ様を見守っているが、なんとなく最近、マダラ様の戦闘技量が上がった気がする。

今までも順調に上がってはいたが、なんだろう、これまでとは違う違和感がある。

本人に聞こえない、「なんか最近強くなりました？」と聞いてみた。嬉しそうな顔をしたマダラ様が「あいつとの組手の成果が……」とか言い、すぐに失言に気付いた顔をして黙った。

「わたしという師匠がありながら誰よそいつ!？」

と思ったため「組手したんですか、わたし以外の女と」と言ってみ

たところ即座に「女じゃない！」と返された。女じゃないのか、にしても誰だ。マダラ様が組手するような相手つて。

タジマ様たち重鎮直々に鍛えられているはずだが、彼らをあいつ呼ばわりはしないだろう、流石に。

マダラ様と組手ができるほどの実力者で、かつあいつ、とくだけて呼ぶような仲の良さがある相手。

誰だ、友達か？ マダラ様に友達を作れるような甲斐性は無いと思っていたのに裏切られた気分だ。

マダラ様に四六時中張り付いているわけではないし、修行の時以外に何をしているか詳しく知っているわけじゃない。友達くらいいるのだろう、かつてわたしに若君がいたように。

その友達との交流を通して鍛えられている感じなんだろうか。

喜ばしい。

喜ばしいが「誰よそいつ」という感情が消せない。

マダラ様も師匠離れの時期が来たということなのだろうか。

ぶつちやけ火遁以外のことでわたしが教えられることなんてもうないし……。

「あなたはわたし以外からでも多くを学べるのでしょね。わたしが師としてついていなくても、もう大丈夫なんでしょう。いいんですよ、わたしに義理立てしなくても。よそに師匠でも友達でも好きに作ってください」と告げた。

本心だったが、拗ねてるように聞こえたかもしれない。その証拠にマダラ様がおろおろしていた。

友達を作るのは構わないが、やっぱり師匠を作られるのは面白くない。



三月二十六日

マダラ様が真剣な顔でやってきて、唐突に

「オレにはお前だけだから」

と言った。

立てないくらい爆笑してしまった。

「お前はいつつもそう」とマダラ様を激怒させてしまった。

ごめんマダラ様、あなたを笑ったわけじゃない。

わたしだけってあなた、タジマ様とかイズナ様もいるでしょうよ。

と言ったら「親族は別枠」的なことを言われた。

血が繋がってない枠だとわたしがオンリーワンということだろうか。

さすが我が弟子、人脈を広げる気がないそのコミュニケーション能力のなさ、わたしにそっくりだ。

昨日匂わされた「組手するくらい仲がいい友人」は結局どこの馬の骨なのか不明なままだが、まあわたししかいないと言うなら良いだろう、そこは深く追求しないで。

マダラ様はわたしが笑ったことにお冠だったがわたしはご機嫌だったので、まあメシでも食ってけよと思家家に連れ込んで手料理を振る舞った。

わたしが母以外に料理を出すのはかなり珍しい。若君ですら確かに食べてない。

大人しく食べていたしおかわりもしたので口に合ったのだと思う。かわいいなあ。

◇ ◆

四月十七日

タジマ様に「最近、マダラが貴女のところへ通い過ぎでは」と気遣わしそうに言われた。

そう？ そうか……？ と真剣にここ数ヶ月のマダラ様とのメモリーを振り返ってみたが、そこまで会う頻度が上がっているとは思えない。

確かに若君が他界してから、わたしを気遣ってかよく様子を見に来てくれるようにはなっただと思う。だが「通い過ぎ」と心配されるほどではないはずだ。

と思っていたらタジマ様が「昨日も貴女のところへ行く、と言って、夕刻まで戻ってこなかった」と仰った。

昨日はマダラ様と会ってすらいない。

一瞬にしてあらゆる可能性が脳裏を巡り、だが「昨日はマダラ様と会ってません」と言うべきではないとわたしの第六感が囁いたため「わたしとたくさん修行したいと思ってもらえるのは嬉しいことなので大丈夫です」とかなんとか優等生な返事をしておいた。

タジマ様は「貴女がいいなら」と納得してくださったのだが、一方わたしは全く納得していない。

わたしに会う、と言って家を出て、わたしに会わずに何かしている。マダラ様が。

何か秘密裏にやりたいことの隠れ蓑にされているのだろうか。わたしは。このわたしは。

シンプルに腹が立つが、しかし割と誠実というか誤魔化しの類をしないマダラ様がそんなことをするとは考えづらい。なにかよっぽどの理由があるんじゃないか。

わたしじゃない、マダラ様と組手をした「あいつ」とやらが関わっているのだろうか。

「あいつ」はうちの子ではない？

どこの子と仲良くしているんですか、マダラ様。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

川辺にふたりの少年がいる。

組手を終えた彼らは座り込み、汗を拭いながら会話をしていた。

忍びの技のこと、未来のこと、共有する夢のこと、気になる女の子のこと。

「お前、女にモテねーだろ絶対」

「は……はあ!? なんぞ急に、モテなくなかないわ!」
「なんて?」

顔を赤くして慌てる友達にマダラは笑う。忍びとしての実力で自分に僅かに勝る相手への溜飲が思わぬところまで下がった。

「んなダッセー髪と服で? 誰がモテるってエ?」

「男は中身ぞ! 見た目じゃねーだろ!」

「中身に自信あんのかよ。あと見目も大事だろ、まずは」

「うつ……、……いや、」

「あ?」

「そんな風に言うってことは、お前の周りの女子が男の見た目ばかり気にしてんだろ。オレはそんな子にモテても嬉しくないからいいんぞ」

「ああ!? ふぎけん、ケイカはそんな女じゃ」

「ケイカ?」

「――」

「誰ぞ、それ」

「……………」

「なあ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……お前、その子のこと好きなんだろ」

「なっ、な、な、す」

「茄子?」

「……………!!」

「痛い痛い! 痛いんぞ! 殴るな!」

無言で引つ叩いてくるマダラからしばらく逃げていた少年だったが、しばらくして二人は黙って身を寄せ合い座り込んだ。

周囲に誰一人いないにもかかわらず、声を潜めて囁き合う。

男友達と、女の子の話をするのは初めてだった。

「……ケイカっての、マダラのなんなんだ?」

「……………。ししよ……幼馴染、だ。親同士が知り合いで……」

「幼馴染かあ。なんかいいな……甘酸っぱい……」

「甘酸っぱくはない」

「かわいい?」

「……………かわいい」

きやあ! と少女のような声を上げて少年はひっくり返った。両

頬に手をあてている。

「お、お前がそんなん言うなんて……。はーっ、へえ、よっぽどかわいいんだな」

「……まあ、顔はいい、確かに、顔は」

「なんぞその含みのある言い方は。性格悪いってわけじゃねえんだろ？」

「悪かねえけど、変だ。変な奴なんだよ」

「ヘン？」

「大抵むすつとした顔してる。かと思ったらオレを馬鹿にするとき爆笑するし」

「なあその子性格悪くないか」

「悪くねえ、よくはないだけだ」

「お、おお。でもお前バカにして笑うんだろ」

腑に落ちない顔をする友達に、マダラは何か言い返そうとしてやめ、沈んだ様子で膝を抱えた。落ち込んでいる時の柱間に似ている。

「マダラ？」

「……馬鹿にするっつーか……ガキ扱いしてくるんだ、ずっと……。たいして歳、変わんねえくせに……。自分一人でどんどんあちこちデカくなりやがって……」

「ガキ扱いしてくる年上のお姉さん!?!」

「な、なんだ急に」

「年上なのか、ケイカって人」

「ああ、まあ」

「年上のお姉さんとイチヤイチャしてんのか」

「イチヤイチャはしてねえよ!」

「でも幼馴染なんだろ？」

「幼馴染つつても……手合わせしたり、修行ばっかで」

「お前とやり合えるくらい強いのかその人」

「強い」

「かわいくて、普段むすつとしてて……。自分をバカにする時は笑ってる、強いお姉さん……」

「な、なんだよその目は」

「……羨ましいいんぞ……ずるいんぞ、なんだそれ、ズルぞ」

「ズルってなんだ」

「そんな都合のいい女の子がいるはずない！ 作り話じゃないのか」

「なワケねえだろ、昨日だって会って手合わせしたし、最近はたまに手料理食わせてくれる」

「手料理を!?!」

「流石にもう一緒に寝たりはしてねえけど。小さいガキじゃないってのにことあるごとにオレを抱っこしようとしたり添い寝しようとしてくるんだよ未だに」

「……………」

「イツテエな!?!」

無言で鎖骨のあたりを殴られたマダラは怒りを込めた目で友を睨んだが、完全に据わった目で見返されて怯んだ。その目のまま、少年は地を這うような声で言う。

「……まさかとは思いが……………」

「なんだよ……」

「そのケイカさんて人、スタイルもよかったりしないだろうな」

「……………」

少年はマダラへ掴みかかり、小競り合いは小一時間続いた。

離別

四月二十二日

わたしとの修行にやってきたマダラ様が、わたしの姿を見た途端帰ろうとした。

仁王立ちで待っていたのがよくなかったのだろうか。

しかし狙った獲物は逃さないがこのわたしのキャッチフレーズだ、今決めた。

速やかにマダラ様を拘束、膝の上に抱えた。

一瞬動きを止めたあと、本格的に暴れ出そうとしたマダラ様に「あまり乱暴をされると怪我をするかもしれないですね、わたしが」と言つたところ嘘のように大人しくなった。

優しい方なのだ。

その優しさにつけこまれたに違いない。

「オレにはお前しかいない、と嘯いた口で……やってくれましたね」とか

「何処の馬の骨に誑かされたんですか、ええ？」

など問い詰めていると、最初は何の話だとか心当たりが無いと言っていたマダラ様がどんどん静かになっていき、最終的に罪人の顔になつた。

「ケイカと修行してくる」と周囲に言い置いて、他人に会いに行つていたことを認めたのだ。

なんでかマダラ様は「相手は女じゃない」と繰り返しており、性別が重要であると思っていたようだがこちらとしては男だろうが女だろうが女装した男だろうが知つたことではない。

わたしの名を使って知らん奴と密会していたことに憤慨しているのだ、性別などどうでもいい。

なんなら相手が可愛い女の子ならよかった。「そういうもの」として許容できたし、「死ぬほどからかう」などして溜飲を下げることでできただろう。

マダラ様の密会相手がわたしと在り方が被っていたら、つまり凄腕

の火遁使いだったりした場合もうどうしてくれようという感じだった。わたしにだってプライドはある。

マダラ様をぎっちり拘束したまま「で、どこの誰と逢瀬を重ねていたと？」と詰問したところ、例の「マダラ様と組手をしていたあいつ」だとわかった。

そうだろうと思っていた。

わたし以外と修行していたのはいい。別にいいのだ。問題はそれを周囲に隠していることである。

「うちの子ではないのですか」と尋ねたら「忍びの家の子なのは確かだが、どの一族かは知らない」と返された。

ダメじゃない？

それは駄目じゃない？

素性の知れない忍びの子って、それ敵の一族の子じゃない？

うちの跡継ぎが何やってるのよという話だ。

その危険性がわからないマダラ様ではないと思うのだけでも。

おそらく敵の子と何を楽しく遊んでいるのですか、危険だと思わなかったのですかとキツめに尋ねた。

策を弄せるような奴には見えなかった、とマダラ様は言った。

ダサいし生意気だし夢みたいなこと言うし、すぐ落ち込むし、変な奴だけど、悪い奴じゃないと。

随分大きくなったと思っていたけれどやはりまだ子どもだ。あまりに甘すぎる。

その子が善人だったとして、その家族もそうだとは限らない。親が出てきてマダラ様の身に何かあったらどうするんだ。

マダラ様の身に何かあったら。

気付いたらマダラ様を抱きしめていた。

「わたしの名前を使ってその子に会いに行くのは構わない。けれどそれを事前にわたしに伝えてから行くこと」と約束した。

◇ ◆

四月二十三日

きつとマダラ様にはその子が必要なんだろう。

マダラ様はうちの長男になってしまった。一族の跡取りだ。次男でいられた頃とは色々なものの重さが違う。背負う責任とか、周囲の目とか。

一族の中に、マダラ様と対等な友として立てる人はいない。わたしですらそうだ。

そもそもわたしとマダラ様とでは性別が違う。きつと同じ年頃の同性としか紡げない関係性というものはあって、マダラ様にはそれが必要なだろう。

わたしでは、マダラ様にとっての彼にはなれないのだ。

その子、マダラ様と密会しているらしい彼、は柱間というらしい。胸がざわつく響きだ。とてつもなく。

マダラ様も本当はきつと気づいている。

彼がどこの子なのかを。

◆ ◆

四月二十四日

予想が正しいなら、柱間くんとやらがあの一族だとするなら、わたしはかつて、その血族をこの手で

やめよう、未確定事項についてどうこう考えるべきじゃない。

それより今はマダラ様、マダラ様だ。

マダラ様を守らなくては。

わたしの名を使ってまでコソコソと会っていた相手だ、マダラ様だって本当は会ってはいけない相手だとわかっている。うちは頭領であるタジマ様に知られたら大事になることも。

わかっているにも会いたいのだろう。

なんだろうなこの気持ちは、マダラ様を抱きしめて撫でたいような、拳で鳩尾をぶん殴りたいような。相反する気持ちがある。

こういうとき若君がいてくださればなあ。

兄としてどう思います？ と聞けたのに。

生きていらした頃には、しばらく会わなくても何も気にならなかったのに。二度と会えなくなってからこんなにかいたくなるとは。

なんとなく若君が苦笑している気がした。

◇ ◆

四月二十五日

マダラ様に「その柱間って子はどんな子なんですか」とか「どんなことを話しているんですか」とか、詳細を聞けずにいる。聞こうと思えば聞けるのに。

聞いて、色々なことが確定するのが怖いのだろうか。このわたしが？ 最近は戦場に出ると敵が露骨に怯むようになってきたこのわたしが？ 「あの、生ける炎の……！」とか言われるようになってきたこのわたしが？

マダラ様も何か言いたげというか、気まずそうな雰囲気を漂わせてはいる。

だが互いに「柱間くん」に言及することを避けている。

マダラ様と同じ年くらいであること、マダラ様と同等以上の強さを持っているらしいことは聞いたのだが。

わたしは柱間くんと会ったこともないが、既にちよつと嫌いだ。

うちのマダラ様をなに誑かしてくれてるんだ、この野郎が、どうしても思ってしまう。年下に対して大人げないのだろうけども。実際に会ったら「この泥棒猫！」とか言ってしまうそうだ。

いや別にマダラ様はわたしのではないんだけどね？

◇ ◆

四月二十七日

マダラ様に、要約すると「明日柱間に会いに行きたいから、家族にはお前に会いに行くと言っていていいか」と尋ねられた。

キレそう。

だが平静を装ったわたしを褒めてほしい、誰か。

他人との逢瀬のダシにされるのってこんなに腹が立つものなんですかね。新しい学びを得た。

「柱間くんに会いに行ってもいいが、事前にわたしに言ってから行け」と言い出したのはわたしだ。マダラ様は約束を守ったわけで、まあ相変わらず律儀な子である。

黙って行った場合、わたしの振る舞いと整合性が取れずタジマ様

に露見する可能性があるから、というのもあるだろうが。

断腸の思いで「わかりました、気をつけて」と言って送り出した。

◇ ◆
四月二十九日

わたしだつてわかっている、本当は手足をへし折つてでもマダラ様を止めるべきだと。

速やかにタジマ様に「ウチの跡取り、敵の一族の子と密会してるっほいです」とチクるべきだということ。

マダラ様の行為はそれくらい危険なのだ。うちは以外の忍びの子と二人きりで会うなんて。

いつ向こうの大人が出てきて、マダラ様を攫ったり、それ以上のことをするかわからない。

だからわたしがすべきことは、理解者面でマダラ様を送り出すことじゃない。「この馬鹿野郎が」とその横っ面を張り倒し、簀巻きにしてタジマ様に突き出すべきだ。

けど、できねえんだな、それが。

だつてマダラ様があんなに楽しそうだ。

弟君を立て続けに喪い、唯一の兄も亡くし、一族を背負って立たなくてはならないマダラ様があんなにのびのびと楽しそうにするなんて。

わたしじゃあの顔は引き出せない。

◇ ◆
五月四日

またマダラ様に「柱間に会いに行きたい」と打診される。了承して送り出した。

◇ ◆
五月十日

柱間くんの件でまた打診。了承して送り出した。

◇ ◆
五月二十一日

るべきではなかった。

行き先を偽装し続けたマダラに、彼を不審に思う家族はいない。父も弟も今頃は屋敷だろう。

対して、柱間の背後には彼の父と弟がいた。

彼らはマダラを殺そうと影から飛び出す。柱間がそれを望んでいなくとも。

逃げきれないと悟ったマダラが、ならばいつそ先手を取ろうと彼らに向かい合う。

川の上で相對した敵同士が互いを見据え、

「——こうなるだろうと思ってはいたんですよ」

川が燃えた。

愕然と立つ柱間の目の前で、一瞬前まで穏やかに流れていた川が火柱を上げて燃え盛る。

友が、父と弟の姿が灼熱に吞まれて見えない。

「扉間ッ！ マダラ——」

助けようと自らも飛び込もうとした瞬間、嘘のように炎が掻き消える。

立ち尽くす父と弟の姿、そして。

「ひとつだけ言っておきたいんですが」
女がいた。

「わたしの炎があれだけの威力しかないと思わないでくださいね。マダラ様まで焼死させては本末転倒ですから、見た目だけの虚仮威しの炎をあえて放ったんですよわたしは。もう一度言いますがわたしの炎をああの程度だと思わないでください」

淡々と話す女の腕にマダラが抱かれています。

首根つこを母犬に啜えられた仔犬のように、女に抱えられたマダラが「……ケイカ」と呟いた。

「なんですかマダラ様」

「なんですかかってお前、どうして」

「どうしたもこうしたも。言ったでしょう『こうなるだろうと思ってた』と。追つてきたんですよあなたを」

「今日——こうなることを知ってたのか」

「いいえ？　あなたが柱間くんとやらと会う日は尾行するようにしていたんです、必ず。遂にこうになりましたね」

「な……」

気付いていなかったことに呆然とする彼を抱え直しながら、「尾行を責めるのは後にしてください」とケイカは言った。

「やれやれ、千手仏間殿まで出張してくるとは思いませんでした。……その隣の白くてちっちゃいのは誰ですか？　マダラ様知ってますか」

マダラが答える前に、油断なく構えたままの仏間——千手頭領が喉奥で呻いた。

「うちはケイカか」

「あらわたし有名人」

飄々と応じながらもケイカは視線を逸らさない。張りつめた緊張感が子供たちの背を震わせる。

「うちはの生ける炎……その娘が出てくるとはな」

「心底忌々しそうにどうも。どうやら母がお嫌いですね？　わからなくもありませんが」

その胸に抱かれているマダラは、ケイカが指の先まで警戒心を満たしていることに気付いていた。平静を装っているだけで、彼女に余裕はないのだろう。この場から離脱する、もしくは敵を退ける方法を必死に考えている。

マダラを守るために。

「わたしは確かに、うちはトウカの娘ではありませんけども。残念ながら母ほどには強くはないんですよ。そんなに怖い顔で見ないでくれませんか」

柔らかい声音で言ったケイカに、仏間とその息子の扉間はむしろ警戒を強める。

真顔のままケイカはマダラに低く問うた。

「マダラ様。真剣に答えていただきたいんですが——あなた、柱間さんと戦って勝てますか」

「——柱間はオレより強い」

「正直でたいへん結構。さて」

ケイカは少女らしく小首をかしげてみせた。

「千手の頭領殿。ここはお互い、何もせず家に帰りましょう」

「ケイカ？」

「ここでわたしたちが戦ってどうするんです。いえ何も仰らないで、マダラ様を殺したいんでしょうわかりますよ。マダラ様はもう、千手の大人を屠れるほどお強いですからね。始末したくて仕方がないでしょう。ただね」

ケイカの瞳が赤く染まる。

場に介入できないでいる柱間が、写輪眼、と呟いた。

「あなた方がマダラ様を殺すと言うなら——わたしはどんな手を使っても、柱間さんとその子を殺します。息子さんなんでしょう？ 千手の跡取りなんでしょう。あなたが直々に出てきたんですから」
狂気に変質し得る身内への深い愛情が瞳をより赤く染め、瞬きもせず敵を見据える。

「マダラ様を守りながらあなたに勝てると思うほど傲慢ではありません。ですがこの身をなげうって尚、子ども二人殺せないと言うほど謙虚ではないんですよ。……困りますよね、その子たちを殺されたら。もう直系の跡継ぎは他にいないでしょう？ だって

——わたしが殺したんですから」

マダラと柱間が同時に息を呑んだ。

場違いなほど柔らかな風が通り抜け、葉を揺らす。

「……マダラ様を害そうとする者は、誰であろうと許すわけにはいきません。……ごめんなさいね、柱間くん」

唐突に話しかけられた柱間がはっとケイカを見た。

「この方はうちはマダラです。……あなただって、きっと気付いていたでしょうに——いえ、わたしが口を出すことではありませんか。さて帰りますよマダラ様」

今なら退避できると判断したケイカが、マダラを抱えたまま敵に背を向けようとする。

その腕を無言で押しやり、マダラは地に足をつけた。

「マダラ様？」

「柱間」

マダラが友を見た。

二人の少年は互いに見つめ合う。

片方の瞳が、赤く染まっていた。

「……ケイカがお前の弟を殺した以上、オレとお前は——」

「マダラ」

「ケイカの言う通りだ。オレはうちはマダラとして、ケイカを、一族を守る。……次に会うのは戦場だ。短い間だったが、楽しかったよ。

「……行くぞケイカ」

「はい」

「待ってくれマダラ！ ケイカさん！」

ケイカは柱間を一瞥し、一瞬だけ目を伏せる。

刹那に感傷を振り払った彼女は地を蹴り、守るべき少年の背を追った。

成長

六月十五日

あれでよかつたんだろうか。

そう、ずっと考えている。

マダラ様は戦の無い世を望んでいた。宿敵である千手の跡取りとマダラ様が親しくなったことは、一族同士の和解という無理難題に差した、たった一筋の光明だったのかもしれない。

その光をぶった切ってしまったのだ、わたしは。

なにが「マダラ様を害する者は誰であろうと許せない」だ、我ながら何を格好つけてるんだ。

「この子はうちの子なんです、千手は帰りな」的なことも言った気がする。

もともと一族への帰属意識とか、誇りとか、そういうのは無い方だと思っていたのに。

浄土の若君も苦笑いだろう。

だが、「じゃあどうすりゃよかつたんだよあの状況で」という思いもある。

千手仏間がいたのよ？

あの人、あんな地味な見た目ですら普通にクソ強いのだ。タジマ様に匹敵する。

一対一ならまだ好機があったかもしれないが、マダラ様を庇いつつ彼と戦うなんて無理だ、普通に殺されていただけだろう。

そうなる前に、せめて彼の跡取り息子達だけでも潰してやろうとは思ったが。そうできてもマダラ様が死んでしまえば何の意味もない。

そういえば仏間殿と一緒に来た、あの白くてちっちゃいのは、なんて子だったんだろう。柱間くんが名前を呼んでいた気がするが聞き逃した。こちらもいっばいっばいだったのだ。

柱間くんの弟なんだろうが、その柱間くんはマダラ様より強いらしいので（マジ？）弟もまあ強いのだろう。

あの場で弟くんだけでも殺しておくべきだったのか？

そうなれば千手とうちはの因果も「いよいよ」という感じで、そこからどう頑張っても和解など夢物語だろう。手遅れなものを余計手遅れにしてどうする。

わたし、既に柱間くんの弟と思われる子を殺してるんだよなあ。肉体のほどんどを焼いたから、遺体すら十分に身元に戻ってきてはいないだろう。

けれど、それを言ったら若君を殺したのだから

ああ不毛、不毛だ。こんなこと考えて何になる。

わたしはマダラ様を守るだけだ。

どうせあの柱間とかいう子も、わたしのこともうちは一族のことも許さないだろう。近い身内を殺されているのだから。

◆

六月十七日

若干今更だが、マダラ様は一族の者に「写輪眼出ました」と言っただけらしい。

タジマ様たちの反応としては「今!?!」「なんで今」「でもよかったね」だったそうだ。

その反応、わたしが開眼した時と被っている。

若君の他界直後ならまだしも、だいぶ間が空いた謎のタイミングで開眼してしまったから。

ただマダラ様は柱間くんと決定的な離別の瞬間に開眼したわけで、原因は十中八九それだろう。

腹立つ。

どうして家族の死でも開眼しなかったものを柱間くんとあれそれで、なんですか柱間くんはマダラ様にとってそんな大事な存在だったとしても言うんですか。

そうだったんだろうなあ。

◆

六月十八日

仮に千手が「うちはケイカが自害すれば、両一族の和平のために動いてもいい」とか考えているのであれば、それくらいしてやっても構

わない。

若君の悲願が叶い、マダラ様の未来に繋がるならいいよ別に、わたしの命くらい。もう絶対に地獄堕ち確定なくらい、千手の子を殺してきたことだし。

と密かに思い始めているが、そうマダラ様に言ったならハチャメチャに怒られるだろうなということとはわかる。

もし同じことをマダラ様が言ったら往復ビンタくらいはする、わたしなら。

けれど「わたしとマダラ様じゃ命の重さが違うし、いいじゃんわたしのなら」と思わなくもない。

宗家の跡取りと分家の女だ。本来は比べようもない。

けどそう言ったらマダラ様は怒るんだろう。

怒るならまだいいが、泣くかもしれない。

それは嫌だ。

まだ子どもなんだから子どもらしく笑ってあげればいいのに。

そういえば、マダラ様が最後に子どもらしく笑っているのを見たのはいつだっただろうか。結構最近見た気がするのだが

柱間くんと一緒にいたときじゃん。

柱間くんと一緒にいたときのマダラ様、ニコニコだったじゃん。わたしはそれを陰から見ている。

ほんとさああの柱間とか言うガキさあわたしのマダラ様にさあ。

もう千手とか関係なしに往復ビンタしてやりたい。

◆

六月十九日

マダラ様はわたしのじゃないが。

何言ってるんだ昨日のわたし、正気か？

◆

六月二十二日

若君がなんでもない顔でうちにやってきたので、「なに勝手に死んでるんですか」「弟を置いていくんじゃないですよ」「ぶん殴つていいですか」と詰めに詰め、恐縮しきりの彼を見て少し溜飲を下げた。

という夢を定期的に見る。

夢の中の彼は元気そうで、記憶の中と何も変わらず、最後に必ず「マダラを頼む」と言い残す。そこでわたしは目が覚める。

目が覚めてからしばらくテンションが下がるので、正直あまり見たい夢ではない。

わかってるから、念押しされなくてもマダラ様は何に替えても守るから。

見るたび「またこれか、バリエーションに欠ける」と思っていたこの夢に、最近少し変化が加わった。

マダラを頼む、と言い置いたあと、若君が訳の分からない言葉を添えるようになった。

「~~目を合わせるな~~」と言うのだ。

「~~と違って~~は、こちらから働きかけない限り干渉してこないはずだ。だから決~~して~~見るな、目を合わせるな。知ろうとするな。力を借り~~ようとするな~~。あれらはお前を助けてくれるような存在じゃない」
いや何の話。

唐突に意味のわからない話するのはやめてくださいよと言いたくて、けれど彼があまりに真剣だから何も言えなくて、

そしてわたしは「あれ、この人ほんとに若君か？」と思い、

そこで目が覚める。

めちやくちや疲れる。何だこの夢は。

なお~~…~~の部分~~は聞き取れない~~。どれだけ耳をすませても聞き取れない。

なんだ、とんでもなく冒流的な単語だったりするのか。その場合やバいのはわたしの頭だが。

悪夢は誰かに話せば正夢にならないなどと言った気がして、だが「他人が見た夢」という心底どうでもいい話題を黙って聞いてくれるお人好しなど、母を除けば一人しか心当たりがない。

というわけでマダラ様に話そう。

と思ったのだが、後半の「若君だかそうじゃないのかよくわからないひとによくわからないことを意味深に言われる」を伝えたら心配さ

れそうだ、頭を。

ついては、「若君にあなたを頼むと言われる夢をちよくちよく見るんですよね」と話すに留めた。

わたしとめつちや組手をしたあとだったため汗だくのマダラ様は「今するかよ、夢の話を」という顔をしつつも「オレも兄さんの夢を見る」と教えてくれた。

マダラ様曰く、兄さんが「ケイカのことを頼んだぞ」と言ってくるらしい。

なんなんだ我々のイメージする若君は、どうしてそう人に人を託すんだ。まさかだが成仏してなかったりするんだろうか。

彼の願いだった、うちとはと千手の和解が叶い、マダラ様とイズナ様、ついでにわたしの安全が確保されれば夢にも出てこなくなるのかもしれない。

◇ ◆ ◇
ごめんなさい若君、多分それは厳しい。

七月二十八日

最近マダラ様の付き合いが悪い。

わたしと修行する頻度が明らかに落ちている。

まさかまた柱間さんと……と一瞬心がざわついたが、どうやらわたし以外のうちはの人間との修行時間を増やしているようだ。タジマ様とかヒカク様とか。

であれば何も問題はない。

そもそもわたしは本来、火遁だけ教えていればいい臨時師匠みたいなもののはずだった。

いつの間にかメイン師匠みたいになっていた、今までの状況がむしろおかしかったのだ。

マダラ様もそれに気づいたのかもしれない。

このままわたしからはフェードアウトしていくのだろうか。

そうしていつか一族の頭領になり、わたしとは会話もしなくなつて、正月に顔を合わせるのがせいぜいになるのかもしれない。

そうなったらマダラ様は、たまには思い出してくれるだろうか、わ

たしのことを。

◇ ◆

七月三十日

マダラ様が普通に会いにきた。

なんだよお前……普通に来るのかよ……とやや戸惑ったが、マダラ様はそんなわたしに戸惑っていた。

別にいいですけど最近付き合いが悪いですね、別にいいですけど。と言ったところ、うちの跡継ぎとして、多種多様な相手を倒せるようになるためにかく色んな人と修行だの手合わせだのしているお前のところへなかなか来れなかった、と心底申し訳なさそうに言われた。

そんな申し訳なさそうにされるとは思っていなかった。

気にしてないですってば、と言ったが我ながら拗ねているような響きで、焦って「拗ねているわけではないです」と重ねてみたところ言えは言うほど拗ねた子どもようになってしまっただけだった。

もうじき十六歳になるというのに何をしているんだわたしは。

焦るわたし、が珍しく面白かったのか、マダラ様に「その年にもなつてガキみたいなどころあるよな、お前。声だっかわ……変わんねエままだし」と言われた。

言っではいけないことを言ったな貴様。

背も手足も伸び乳と尻は膨れ、見た目はもう大人なのに声だけが幼いことを、わたしは正直結構気にしている。

この声のせいで言うことに説得力が出ない気がするのだ。軍議の時とか特にそう。

貴方だって幼いでしょうがよ、声、と言い返したのが気に食わなかったらしいマダラ様に「オレはもうじき周りの大人みたいに低くなる」と言われ、そんなはずない、貴方はずっと可愛いままに決まっていますとわたしは言い、そこから強めの言い合いに発展した。

すぐに背も伸びるし声も低くなるしお前より強くなる、と譲らないマダラ様に「ずっと前からそれ言ってますけどわたしの方が強いでしょうが」と言うわたし。

宗家の子に言うべき言葉じゃないが、久しぶりに言い合いができたことは少し嬉しかった。

売り言葉に買い言葉が続けるうちに話が脱線していき、前々から思っていた「ていうか男は乳が膨れないから戦闘時に邪魔じゃなくて羨ましい、腹立つ」という思いが爆発してしまい「男性はいいですよ、成長しても乳が無駄に膨れたりしないでしょう。不公平です、男性だって膨れればいいでしょう乳」と言った。

「女が乳、乳連呼するな」としつかりめに怒られた。

ここで引き下がればよかったのだが、わたしはわたしで変なテンションになつていたこともあり「男も女もないでしょう、不公平だと言っているんです」「邪魔なんですよとにかく、いつかこの乳が原因で怪我をする気がしてならない」「男性はどっかが膨らんだりしないかわからないでしょうが」など言い、このあたりでマダラ様がポロツと「イヤ膨らむだろ一時的に」と言った。

完全に「いらんこと言った」という顔をしていたマダラ様に「男性もどっか膨らむんですか、ちよつと初耳なんですけど詳しく聞いても？」と詰め寄った。

マダラ様は明らかに狼狽しており「なんで知らねえんだよ」「お前もう十六に……花嫁修行の時とか話くらいは……」などブツブツ言い、最終的に「ケイカにその方面の仕込みはするなつつたのオレだった」と呟いて頭を抱えていた。

それ以降はわたしがいくら聞いても「いずれわかる」「責任は取る」と真顔で言うだけで話にならなかった。

なんだったんだ。

お互いの声についての話題はうやむやになった。



八月六日

わたしとのガツツリした修行はあまりしなくなってきたマダラ様だが、どうやら日々隙間を縫ってはわたしの家までやってきて、わたしをチラ見して「よし」とか何とか言つてまた宗家に戻つて修行する、

みたいなことを頻繁にしてくるようになった。

なんだ？ わたしは目を離れた隙に脱走する猫か何かだと思われているのか？

その期待に応えて集落から出てみようかとも思ったが、「どう考えでも行くあてがない」と自明な結論に辿り着いたためやめた。

しかし自分の交友関係の狭さにはびっくりする。マダラ様、そしてイズナ様以外と親しく話をしたのがいつだったかもはや思い出せない。

最近つまらなそうにしているらしいわたしに、母が「星を眺めると元気が出るわよ」と一見もつともらしいアドバイスをしてきたが「めっちゃ嫌」というのがまず思ったことで、だって母が星を好きなのはそこに神様がいるからだろう。ヤバイ神が。

最近その話題が出ていなかったため油断していた。

しかし夜になり、ふとこの真夏の夜空を見上げた時、「神の有無を抜きにしても、やっぱり夜空はいいものだな」と自然と感じた。

わたしが最も愛している自然は「火」もしくは「炎」だが、星々や月も美しい。

別に神がいる星を見たからといって、その神に魅入られることもないだろう。

というわけで最近、夜中に家を抜けて夜空を眺めている。

◆ ◆

八月十日

マダラ様は確か月がお好きだったはずだが、星も負けずにいいものだと思う。

星からはわたしたちはどう見えるのだろうか。そもそもわたしたちは目に映るのだろうか、星に目があったとして。

◆ ◆

八月十六日

そういえば十六歳になったが特に何も変わらない。

千手とも、千手以外の忍一族とも和解の兆しは見えず、人は死ぬし、また生まれもする。

わたしが見ている星はいつから存在しているのだろう。そしていつ死ぬのだろうか。

月や星に比べたら、人間の一生はあまりに気忙しいのかもしれない。

など詩的なことをわたしらしくも考えたらマダラ様がやってきた。夜に。

どうやらわたしが最近星を見ていることを聞きつけたらしく(どこからだ)、集落のはずれで一人夜空を見上げていたわたしの側にそつと座り込んできた。

子どもなんだから早く帰って寝ろよ、とも思ったが、冷えたお茶と果物の干したやつを持参していたマダラ様がそれを分け与えてくたさつたため「わかつてんじやねえかお前」となり何も言わなかった。

黙って隣にいるマダラ様に何か愉快な話題でも提供すべきだったのかもしれないが「そんな話題はない」という致し方ない理由でそれもできず。

わたしの雑談の棚、開けても開けても空っぽなんだよな。戦闘と火の話しかできない。

まあマダラ様が何か言ってきたらそれに乗っかるか……と考えていたがマダラ様はほぼ無言で、二人して沈黙の中ただ空を見る謎の間がただあった。

その後どちらが言うでもなくなるとなく解散。



八月二十八日

またマダラ様が夜にやってきた。

どうやら多忙らしく、マダラ様の姿を昼間に見かける頻度が下がる中、夜になると外にいるわたしのところまでやってくる。

何か用事があるわけでもないようで、ただわたしの近くに陣取って夜空を眺めている。

そういえばマダラ様は昔から月がお好きだった。

わたしと一緒に見ても輝きが増すとかの効能はないはずだし、わたしが主に見ているのは月でなく星だが、何も言わずに各々空を見て、

しばらくしてから無言で解散している。

意図が読めない。もしかして暇なのだろうか。そんなわけはないはずだが。

わたしの側で月を見るんじゃないやねえと言う理由もないのでそのままにしている。

わたしが星を見るのも「なんとなく落ち着くから」でしかない。マダラ様にもきつと大した理由はないのだろう。

◇ ◆

九月二十日

南のひとつ星が美しい。

ぽつんと強く光るその星の名前は知らないが、地平線近くに孤高に光るその星は、文字通り星の数ほどある星々の中で殊更目を引いた。

最近はおつぱらその星を眺めている。

ところでこの頃、マダラ様が話しかけてくる。

夜に会った時は会話もなく、ただ空を眺めることが普通になっていったのだが、ぽつぽつとマダラ様が言葉を口に出すようになってきた。

それはわたしに話しかけているというよりは半ば独り言で、しかも暗い。

一族の期待に応えられるだろうかとか、イズナには本当は戦に出てほしくはないんだとか、けどそのイズナはなんなら自分より好戦的だとか、それはケイカの影響なんじゃないかとか（違うと思う）。

平たく言うと「現状と今後への不安」で、辛気臭いことこの上ない。

何故わたしに言う、と同時に、わたしくらいにしか言えないのかもな、と思った。

マダラ様はいまや宗家の長子で、嫌でも一族の長になるしかない。

もともとは弟だったマダラ様だ、不安はあるだろうし、それを父親や弟には言えないのだろう。

わたしの前で溢すことで少しでも気持ちが楽になるのなら、わたしはそれを黙って聞いていよう。

と思っていた時期もあったのだが「おい、いい加減にしろよ」という気持ちが抑えられなくなってきたここ数日。

暗いのだ、とにかく。陰鬱な顔で陰鬱なことを会うたび言われてはこちらの気も滅入るというもので、気分良く星を眺めていたわたしにとつてマダラ様の独白が雑音になりつつある。

最初はわたしだって真摯に耳を傾けていた。だが幾度も答えの無い暗い独白や自問自答に付き合っているうちに暗澹たる気分になってきたし、

ていうか貴方、柱間くんのことを吹っ切れてないな？

というのが言葉の端々から浮き彫りになってきてわたしの苛立ちも増す一方だ。

しかしここで「うるせえ黙れ」と言うわけにもいかない。

宗家の長子に対して無礼とかそれ以前に、マダラ様が可哀想だ。きつとわたしならと多少信頼して、胸の内を話しているのだろうに。壁に向かって話してる気分なのかもしれないが。

何かこう、マダラ様を傷つけず、それでいて黙っていたたく方法はないだろうか。

◆

九月三十日

画期的な方法を編み出した。

マダラ様は、乳に埋めると黙る。

また訥々と、一族の誰が死んだとかオレがもつとうまくやっつていれどとか、陰鬱なことを話し出したマダラ様を「もう物理的に黙らせよう」と思い、頭を引っつかんで胸に抱き込んだところ、見る間に静かになった。

口元が肉にほぼ埋まっているのでそりや黙るしかないだろう。かなり息もしづらいだろうがそれは知らん、本気で苦しかったら流石に払い除けるはずだ。

怒るかとも思ったが怒らず、それどころか一言も発さずじつとわたしの胸に抱かれて静かにしていた。乳を枕に寝たのかと思うほど大人しかった。

◆ 今後はこれでいく。

◆

十月十四日

マダラ様が暗い話を始める↓しばらく大人しく聴く↓いい加減うるせえなど思い始めたあたりで乳に埋める↓マダラ様黙るというパターンが確立されてきた。

黙らされるとわかっていてどうして話すのだろうか、もしかして学習能力がないのか。かなり聡明な方だと思っていたのだが。

わたしとしては黙っていてももらえればそれでよく、マダラ様を抱えたまま空を見ている。

しかし人ひとりを抱えたまま上を見るのは体勢的にキツく、首を痛めそうだったので、最近ではマダラ様を抱えたまま地面に転がっている。

マダラ様は若干潔癖の気があるので地面に直で転がるのを嫌がるだろうかと思ったらそんなこともなかった。水揚げされた魚のように大人しく横たわっている。

◇ ◆

十月十七日

マダラ様がなんか全体的にゴツゴツしている気がする。

と今日唐突に気がついた。

マダラ様のことは昔から抱えたり抱っこしたりしてきたが、前はもつとこう柔らかかくて軽くて丸みがあった。

最近のマダラ様、硬くて重くて四角い、ような気がする。

いつも通り胸に抱えたとき確認したところ、腕の太さがマダラ様に負けていた。

嘘だろあんな細っこい腕をしていたのに、なんだあの、みつしりした筋肉は。

まさか、と思ひ手のひらを合わせたら手の大きさも負けていた。

嘘じゃん。

紅葉みたいな手だったのに。

クナイを握るのにも苦勞する手だったのに。

やわらかい手だったのに。

いやまだまだ身長はわたしの方が高い、まだ大丈夫だ。

それにマダラ様はわたしの声の幼さをからかったが、マダラ様だつて子どもの声をしている。喉仏だつて出ていない。だから大丈夫だ、大丈夫大丈夫

◇ ◆

十一月十日

大丈夫じゃないかもしれない

◇ ◆

十一月十九日

タジマ様に偶然お会いした。

「まさかとは思うんですけど、マダラ様、わたしより背が高くなってませんか？」と問うたところ、2秒後に「ええ、そうですね？」と返された。

そうですね？　じゃなくて。

「あの……マダラ様がわたしより大きくなるというのはおかしい気がするのですが……」と言ったところ、心底何を言っているのかわからないみたいな顔をされた。

タジマ様曰く「マダラは男子なので、それはまあ、女子の貴女よりは大きくもなるかと」。

◇ ◆

十一月二十日

やや久々になるがイズナ様に会いに行った。

「あなたの兄貴がわたしに何の断りもなくわたしよりデカくなってるんです」と訴えたところ、不可解な顔をされながら「うん、なんならオレも大きくなると思うよ？」と返され

イズナ様の一人称は僕だったはずなのに

◇ ◆

十一月二十一日

大きくならないで

◇ ◆

十二月三日

ここ一月くらいのわたしの様子がおかしい。日記を見返すとよく

日々に心を痛めながらも、千手の次期頭領として着実に力を蓄えていた。

マダラがケイカの背を僅かに追い越したのと、柱間が木遁を発現させたのは同じ頃であり、

「……あら、薪木ですか？ よく燃えそうですね」

猛烈に機嫌の悪いうちはケイカと戦場で相対するようになったのもこの頃だった。

「ケイカ殿」

「少し見ない間に大きくなりましたね、柱間くん」

久々に会った親戚みたいなことを言いながらも声に険がある。

幾度繰り返し返したかもわからない千手とうちはの争い、その舞台に、柱間が発動させた木遁を見もせず焼き払ったうちはケイカが立っている。

焼失した木々は、しかし見る間に成長し周囲を覆う。己に迫るそれをいなしつつ、ケイカは忌々しそうに舌打ちした。

「……人の許可も取らずにいきよきと大きくなって……なんなんですか、これも、あなたも、マダラ様も」

「今、マダラと言ったか!？」

「言っていないそんな所に食いつかないでください」

「マダラはどうしてる？ この頃は戦場で会っても会話する間もなく」

「あなたのそういうところが癪に障る」

一層剣呑な空気を纏うケイカを諫めるうちはは周囲にはいない。むっすりとしたケイカが柱間の目の前に現れた途端、周囲で交戦していたうちはの殆どはその場から退避している。

「母親よりは遥かにマシだが、戦闘中のうちはケイカの近くは危険であるため即座に退避しろ。炎に巻き込まれるぞ」と一族内では了解されており、彼女としても周囲に味方がいない方がずっと戦いやすいためそれでいいと思っている。

彼女の危険性は当然千手もよく知るところで、柱間の背後に控える彼の配下が気を張り詰めさせていた。

「あなた個人に特別恨みがあるわけではありませんが——これで
もうちは一族なので。攻撃するので死にたくなければ何とかしてく
ださい」

「ケイカ殿、オレと話を」

「くだいですよ。あなたは千手、いずれマダラ様を害するでしょうが」
「オレはそれを望んではいない！」

「それはそれで——腹が立つんですよ！」

苛立ちと共に放たれた炎が柱間を襲う。

ただ一人の女が操っているとはとても思えない質量に、下手に避け
るべきではないと判断した柱間は術者に突貫した。懐に入られては
まずいとケイカは身構え、しかし体術で優る柱間は彼女に肉薄する。

「鬱陶しい、こっちに——こないで！」

「貴女は敵である前に女子だろう、傷つけたくはないのだ！ それに
貴女はマダラの」

言葉の前半を聞いて「侮られた」と判断したケイカの両目が文字通
り真っ赤に染まる。決して直視してはならぬと叩き込まれているう
ちはの写輪眼、それを見ても柱間は臆さなかった。情深い友と揃いの
それを求めるように柱間は手を伸ばす。

そして、

「——ケイカ！ ケイカはいるか!？」

うちはケイカが千手柱間と交戦中と聞きつけたマダラが戦場に飛
び出してくる。柱間の実力とケイカの強さ、どちらもよく知る彼は、
二人がやり合えばどちらも無事では済まないことをわかっている。

どちらかが死ぬ、かつての友か、かけがえのない女が——

「ケイカ！ ……………はあ？」

二人を見つけたマダラが目にしたのは、ケイカの豊満な胸に顔を
埋めて半ば目を回している柱間と、柱間を抱えるようにして困惑顔で
動かないケイカと、より困惑している両陣営の男達だった。

互いに「相手を殺したくない」と根底で思っている二人がやり合っ
た結果揉み合いになり、どうしてかそうなったようだった。ケイカは
完全に予想外の展開にただ困惑し、千手次期頭領を殺める絶好のチャ

ンスであるのに動けない。

「そうはならねえだろ」と冷静に考えたマダラは、二秒後全力で怒鳴った。

「柱間アアアツ!! テメエ、オレのおん——」

「マダラ!?!」

「マダラ様——」

ある意味中心人物の登場に我に返った二人が弾かれたようにマダラを見、次いでケイカが柱間を蹴り飛ばし距離を取る。

「うわっ!?!」

「——マダラ様の前であなたを殺せって言うんですか……」

「ケイカ殿、」

「今日はこれくらいにしておいてやります、今すぐわたしの視界から消えろこの泥棒猫」

「ね、猫?」

「言っておきますがマダラ様は」

「ケイカツ! お前はお前で何してやがる!」

「戦ってたんです。………退きますよ」

怒りに髪を逆立てるマダラの腕を掴んだケイカの姿が自らの炎に吞まれる。その炎が消えた時、マダラ達の姿はなかった。

かくして場は流れ、千手の次期頭領とうちはの生ける炎の娘はほぼ無傷で戦場を去る。

尚、今回のことは千手柱間乳ダイブ事件として十年後まで擦られ続けることになる。



赤色がこちらを見ている。

違う、おそらくこちらを見てはいないのだ。その赤は、熱は、ただそこにある。

わたしは何故かそれが気になってしかたがない。
目を合わせたい。

それに手を伸ばそうとして、後ろから誰かに肩を引かれた。
振り返る前に誰かがわたしの目を塞ぐ。
優しい暗闇に視界を遮られて尚、赤い光はそこにあつた。

一儀

三月三日

マダラ様に負けた。

術の使用は禁止の、純粋な体術勝負で、言い訳のしようもないほどにちやんと、負けた。

それ自体は別にいい。マダラ様はもうとっくに体術ではわたしを上回っていた。それはわかっていた。

けれどそこまでの差ではないと思っていて、勝負にはなるくらいの差しかないと思っていて、でも今日マダラ様と組手をしたら、手加減をされた。

手加減されて、それで、負けた。

若君とマダラ様と一緒に川遊びをした時の夢を見た。

マダラ様は小さくて怒りっぽくて、魚が上手く焼けないと拗ねて、わたしに突っかかって、苛ついたわたしに川に投げられて半泣きになっていた。

起きた時、少し目の周りが濡れていた。

◇ ◆

三月十日

唐突にヒカク様に呼び出された。

つまり宗家に呼びつけられたわけだ。

拒否する理由も気力もなかったので大人しく向かった。

ヒカク様に顔を見るなり「元気がなさそうだが大丈夫か」と言われた。テンションが低いだけで病を得ているわけではないので大丈夫です、と返すと腑に落ちない顔のまま、それでも納得してくださいましたようだった。

「マダラ様はもうじき筆下ろしの必要があるが、いいか」と問われた。本当に意味が分からなかったので「良いも何も好きにすればよろしいのでは」と申し上げた。

また腑に落ちない顔をされたが、その顔をしたのはわたしだ。ただ「なるほど」とは言われた。

帰りしなにお菓子を持たされた。

もしかして子どもだと思われているんだろうか。わたしは客観的に、もう大人と言っていていいと思うのだけでも。

◇ ◆

三月十一日

筆下ろし、が、男性が初めて女性と子作りをすること、その練習の隠語だと知る。

新品の筆を使うことではなかったらしい。

母に「マダラ様が筆を下ろす許可を求められたんだけど、あれなんだったんだろう」とこぼしたところ、サラッと教えてくれた。

「マジで言ってる？」と母を三回ほど問い詰めてしまったが、どうやらマジらしい。そういう種類の冗談を言う母ではないため、本当なのだろう。

しかし余計にヒカク様の意図がわからなくなった。

わたしに言っただろうというんだ、陰ながら応援しておけども言いたかったのだろうか。

と思っていたら母に「マダラ様の初めてのお相手になってほしい、と頼まれたのね」と言われた。

「マジで言ってる？」と十五回問い詰めたが、母曰くマジらしい。

母はかつて、タジマ様の師でもあった。つまり今のわたしとマダラ様と同じ関係性だった。

タジマ様がマダラ様と同じくらいの年頃、やはり筆下ろしが必要となり、その際相手役として母に白羽の矢が立てられたらしい。

だが当時の母は、自分に立ったその矢を引っこ抜いて折って捨てたらしい。

つまり断ったのだ。

「もうその頃にはあの人に会っていたから」と。

父のことだ。母にこう言わせる父、本当にどんな人だったんだ。夭折したことが悔やまれる。

当時のタジマ様が母を選んだ理由はなんとなく察するものがあるが、マダラ様の相手としてわたしが抜擢される意味がわからない。

というか筆下ろしに関するしきたりとか、そのあたりの知識を知らなすぎる。わたしが選ばれるのは妥当なことなのか。他の人とかどうしているんだ。

母の言葉を信じるなら、筆下ろしは言わば「戦場に出る前の稽古」「練習」で、通常はそのあたりのことに精通した人が相手として選ばれるらしい。具体的に言うくと、後家の女の人とか。

わたしはヒカク様に後家と思われていた……？ と愕然としかけたがそんなわけではない。

「だって貴女、マダラ様のお師匠様じゃない」と母に言われた。

師匠ってそこまで教えなきゃいけないのか。

マジかよ。とりあえず火遁だけ叩き込んでおけばいいと信じていた。

だが「お前、マダラ様の師だろう」と言われたらもう何も言えない。それはわたしの矜持でもあるからだ。いつの間にかそうなっていた。

マダラ様はもうわたしより大きく、強くて、教えられることはきつともうない。

火の扱いだけは未だわたしの方が上だけど、もう、そういう段階ではなくなっている。

マダラ様はうちの長として、多くのことを学ばなくてはならないんだ。

マダラ様に教えられることがあとひとつでもあるなら、教えたい。

母に「嫌なら断つてもいいのよ？ 言いづらいなら、ほら、屋敷を燃やすとかあるでしょう」と言われたが、「先方がそのつもりなら、受ける」と言った。

そもそも話を持ってきたのは、タジマ様の右腕でもあるヒカク様だ。

昔からわたしたちを知るあの方がわたしを見込んでくれたのなら、きつとわたしにはそれができる。

筆下ろしのやり方を全く知らないので教えるも何もないという問題があるが、そこはそれ、当日までに学べばいいだろう。

少なくともヒカク様は知っているはずだ。なので明日、聞く。



三月十二日

ヒカク様に会いに行った。

昨日の今日でまた来たわたしに驚いていたが、わたしが開口一番「マダラ様の筆下ろしの件、わたしでよければお受けします」と言ったら、そうか、では頼む、と言ってくださった。

つきましてはわたしに、その筆下ろしのやり方を教えてください。何か教本とかあるならそれ読んでおくので、と頼んだ。

断られた。

生まれてからここまでの人生で一番「なんで？」と思ったし、相手が目上でなければ掴みかかっていたと思う。

「すみません、筆下ろしって、つまり子どもの作り方をわたしが教えるってことで合っていますよね」と前提の確認を試みたところ、「通常はそうだが、『自分が教える』と気負わなくていい。いやむしろ何もなくていい。大人しくしてさえいれば恙なく終わる」と言われた。

絶対に騙されている。そう感じ、もう掴みかかっちゃおうかなと思っただころで

「マダラ様は私にとっても弟か息子のような存在で、幸せになっただけだ」と思っている」など、聞いてもない自分語りをされた。

ヒカク様は普段そんなことをする方ではない。思わず気圧されて黙っていると、「貴女がマダラ様の最初の女性になって、貴女の最初の男がマダラ様になる。それだけでいいんだ」ととても穏やかな口調で言われた。

その口調のあまりの優しさに、顔すら碌に覚えていない父の影を感じた。

ヒカク様がそう仰るなら——と引き下がって家に戻ってきたのが今だ。

そして今思う。

やはり騙されているんじゃないか、わたし。

筆下ろしは戦場に出る前の稽古みたいなもの、クナイを握ったこと

すらない子を戦場には出さないでしよう」と母は言った。

よくわからないが、筆下ろしというのは子を作る練習なんだろう。マダラ様は跡継ぎなのだから自分も跡継ぎの子を作らないといけないわけで、その練習って、つまりとても大事なことなんじゃないのか。その相手役が、やり方を何も知らなくていいなんてことあるのか。なくないか。

頭を抱えていると、包丁を片手に持った母が気配なく近づいてきていたので本当に漏らすかと思った。

単に料理中だった母はわたしが何に困っているかだいたい把握していたらしく、「別に悩まなくても大丈夫よ」と言った。

「ケイカ、あなた、誰に教えられなくても火を扱えたでしょう？ それと同じ。大丈夫、勘でやりなさい」と言われた。

否定されるだろうと思いつつ「火遁と子作りは同じなのか」と尋ねた。

堂々たる佇まいで「同じよ」と言われた。

だとするなら自信しかない。



三月十五日

筆下ろしに関することがマダラ様の意思ではなかったことが発覚。

いつものようにマダラ様と二人、夜空を見上げながら地面に転がっている時に「そういえばわたしがマダラ様の筆下ろし役をする件なのですが」と言ったところ「待ってくれ」と五回言われ、「幻聴かな？」という顔をしたマダラ様に「もう一度、ゆっくり言ってくれ」と頼まれた。

一言一句同じことをゆっくり言ったところ、頭を抱えてのたうち回ったのち「誰だお前にそれ言ったのは!! ヒカクか!？」と問われ、はい、と返すと奇声を発した。

基本的には落ち着いているマダラ様の常でない奇行に正直それなりに怯えていたのだが、しばらく見守っているとだんだんと落ち着いていき、ぽつりと「……ヒカクは悪くねえな。俺はうちの跡継ぎで、もう十五だ」と言った。

もう十五歳なんだ………と改めてショックを感じていると、マダラ様がわたしの手を取り、「お前はいいのか」と言った。

重要な役目を任せてもらえたことは嬉しいですが、と答えた。

ただわたしは無知で、今のままだとマダラ様に「教える」ことはできそうにない。だから教えてくださいと頼んだのにヒカク様には断られるし、けれど母が言うように火遁と同じノリでできるのなら自信はあります、と言った。

マダラ様は名状しがたい、今までに見たことのない種類の顔をし、しばらく黙ったあとに「勉強して挑むものじゃないから、お前は何もしなくていい」と言った。

その言葉が正しいなら、つまり事前学習なしでその場のノリで可能なものであるなら、そもそも事前練習である筆下ろしの場を整える必要とかなくないか？

ともっともな疑問をぶつけてみたのだが、そういうものでもないらしい。

宗家として、儀式やしきたりの意味もあるのかもしれない。

そうだとするなら分家のわたしが文句を言うところではない。

しかしヒカク様が言い出したことで、ここまでマダラ様の意思が介入していないとするなら、そもそもわたしでいいんだろうか。

「うちには他にも女性がいますが、本当にわたしでいいですか。あなたの師として役目を果たさせてくれますか」と尋ねたら「お前がいんだ」と返された。

うれしかった。

お前はオレでいいのか、兄さんじゃなくてオレで。そう問われたが意味がわからず、若君は関係がないのでは？　と言ったら、そうだな、と抱きかかえられた。

マダラ様はわたしを物理的に包めるくらい大きい。

その事実をいい加減直視しよう。彼がすすくと成長している、それは喜ばしいことなのだから。

だが、本当につらい。

声はまだ少年の高さを保っていることだけが、わたしの心を和ませ

る。



四月十六日

春だ。美しい季節だ。

桜は本当にきれいだし（わたしにだって花を愛でる心くらいはギリギリある）、よく晴れた日が続いている。そして戦も続いている。

私事だが怪我をした。

自分の日記なのだから全て私事なのだが、とにかく、怪我をした。

千手柱間と交戦中に、千手扉間の手で傷を負った。

こんなことあるのか。

扉間にやられた、と気付いたとき、思わず「はあ？」って言っちゃったもんな、素で。

千手柱間と真正面からやり合える若手は、わたしか、それこそマダラ様しかない。

柱間くんは木遁とかいう反則的な術を使うことができる。初めて彼の木遁を見たときは「木なんだから燃やせばいいじゃん」と思ったら実際そうしたが、彼から生み出される木々は何故か異様に高い耐熱性を有しており、一般的のうちにはの火遁では炙る程度の効果しかない。

柱間くんが戦場へ躍り出ると、ほぼ確実にわたしが呼び出される。というか、呼ばれなくても行く。

マダラ様と会わせたくない、戦わせたくない、貴様はわたしが倒す、なんだよ木遁って聞いたことねえよ、というエゴだ。わたしの。

うちはとしても、万一にも跡取りであるマダラ様を喪うわけにはいかないため、まだ死んでもいいわたしが対柱間兵器として送り込まれている。

柱間くんは言動の端々に「うちはケイカを傷つけたくない、戦いたくない」が見えていて戦っていて非常に不愉快だ。舐めているのかお前は、わたしを、戦を。

一度、本人に聞いたことがある。ほとんど一対一で刃を交わしながら、「あなた、わたしを殺す気がないでしょう」と。

「それは貴女だろうー」と叫び返された。

妙に人の心に聡いところも含めて、どうも柱間くんとは合わない。できればもう会いたくない。

柱間くんがわたしを殺す気がないことを確信して、それで、油断があつたんだらうか。

柱間くんと交戦中、気付いたら背後に千手扉間が、彼の弟がいて、脇腹を斬られた。

シンプルな術や武器ほど極めると強い。研ぎ澄まされた瞬身と刀術を見てしみじみそう思った。

実際はそんな牧歌的なものではなく、「傷口を焼く」「その場から退避しつつ扉間を焼こうとする」を同時に実行したためかなり慌ただしかったが。

ちなみに扉間のことは焼き損ねた（柱間くんに阻止された）。

正直、千手扉間のことはノーマークだった。

強いとは聞いていたし、彼によって殺されたうちはだって大勢いる。

ただどうしても柱間くんの陰に隠れがちで、特にわたしは柱間くんのことしか見ていなかった。マダラ様に唾つけやがって、この泥棒猫、と思っているから。

これはもう、油断としか言いようがない。大反省だ。

このことにブチ切れているのがイズナ様で、彼は扉間がわたしを斬ったところを偶然目撃しており、なんならマダラ様が引くほど千手扉間に対抗意識を燃やしている。

そのマダラ様はマダラ様で大変心配をおかけしてしまい、申し訳ない。

斬られてすぐ撤退したし、血はすぐに止まったし、我ながら素晴らしい回復力を見せ、今はそこそこ元気だ。

幼少期に真正面から斬られて寝込んだ時に比べればかすり傷だと思ふ。

まあ傷跡はがつつり残るだろうが、今更すぎる。

見舞いに来てくださったマダラ様に「筆下ろしって怪我しててもで

きますかね」と尋ねたら怒られてしまった。怒られたあとに謝られた。

怒られるのは構わないが、謝るのはやめてほしいな、と思った。

◇ ◆

五月十日

跡が残ったが傷口は塞がった。

イズナ様はまだ扉間に怒っているし、マダラ様も心配してくるが、もう怪我人ではないため普通に過ごしている。

「快気の祝いに美味しいものを食べさせてあげよう」とヒカク様に呼ばれた。

そう聞いて行かない理由はなく、足取り軽やかに宗家へ向かった。通されたのは客間ではなく台所で、「好きに作って構わない」と言われた。

なんでだよ。

わたしの祝いじゃなかったのか、わたしが主役じゃないのか。どうして主役自ら料理しなくてはならないのか。

しかし食材はふんだんに用意されており、流石宗家と言おうか質もいいものばかりだったため「ここで怒って帰るのは悪手」と考え、言われた通り好きに作った。

母と二人暮らしのため、家事全般はできる。母はそのあたりはちゃんと教えてくれている。基本的には良き母なのが逆に嫌だ。

明らかに一人分以上の食材が用意されていたため、自分の分だけ作るのは流石にな……と思いついて、とりあえず三人前ほど作った。食事というものは一気に大量に作った方が楽し美味い。

何故かわたしの料理姿をずっと見守っていた（本当になんでだ、毒入れるとも思ってるのか）ヒカク様に「手際がいい」「彩りも考えられているな」など割と絶賛されたため、調子に乗って「マダラ様にも褒めていただける程度の腕はあります」と言ったら「へー」みたいな顔をされた。

完成した料理はヒカク様と食べた。

ヒカク様に箸使いを褒められた。



五月十七日

ヒカク様にまた呼ばれた。暇なのか？

呼び出し理由がまたも「お前の怪我が問題なく治った祝い」だったため、ヒカク様もしくはわたしのどちらかが地味な幻術にかけられている疑惑がある。

ただ今回は「食事」でなく「着物」をわたしに与えてやろう、とのことだった。

大名の姫君でもない限り、新しい着物はそう手に入るものではない。布は貴重なのだ。寸法が合わなくなったりほつれたりしたら、新しいものを手に入れるのではなく自力で仕立て直してまた着る。

美味しい食事以上に着物の方がもらって嬉しい。何故ならわたしの着物を見る間に寸法が合わなくなってきたおり、それは確実に成長をやめる気配のない乳のせいだ。

仕立て直すにも限界はある。

なのでウキウキ宗家へ向かった。

着物に仕立てる用の布を手渡され、思ったより良い生地だな、ありがたいなと思ったわたしはそれを持ってちやっちやと帰ろうとしたが呼び止められ「まあここでやっていけ。道具は貸すから」と言われた。

なんだろう、先日の料理といい、ヒカク様はわたしが何かを作っているのを見るのが趣味なのか。

終始腑に落ちない顔をしながら生地のカ断から縫い合わせまでやったが真隣にヒカク様が張り付いており、意味がわからなくて怖かった。

しみじみと「家事の腕は母上譲りだな」とか「トウカ殿も昔から、何をやらせても器用で」とか言ってきて、そういえばこの方も母の昔を知っているんだなと思い、その娘に隔意なく付き合ってくれるのはありがたいことなのかもしれないなとも思った。

「男物も仕立てられるか」と問われ、やったことねえからわかんねえよウチは女2人しかいねえんだからよ、を可能な限り丁寧に戻した。

完成した着物を持って夜に帰宅。

◇ ◆

五月二十八日

「そーいや筆下ろしっていつどこでやるんです？」とマダラ様に聞いたところ、無言でのたうち回られ本当に怖かった。悪霊に憑かれたのかと思った。

「マダラ様の覚悟が出来次第」らしい。

いつなんだ。

あと覚悟が必要な感じなのか、いったい何がどうなるんだ。なんとなく聞いてはいけない気がして、何も聞けなかった。

◇ ◆

六月七日

うちはは千手とのみ争っているわけではない。同族以外は全員敵だ。

それでもやはり千手とやり合うことが多く、お互い見たくもない顔を見合っている。

とはいえ戦場でしか見ないしな、と思っていたが、前線から自陣まで戻ると、捕虜になった知らない千手がいた。かなり珍しい。秒単位で命のやり取りが行われる場所では「相手を捕らえる」余裕などなく、命を取るか取られるかしかない。仮に捕まえたとしても「一族の秘密を吐くくらいなら自害しろ」と躡けられているわたしたち忍びは、逃げられないと判断した瞬間、死ぬ。

死んだ人間から情報を引き出す術など聞いたこともないし、これからもないだろう。死人に口なしだ。わたしも、もうにっちもさっちも行かなくなったら、周囲を巻き添えに爆死するつもりだ。

その珍しい千手の捕虜は、自害することすら妨害され、尋問を受けているようだった。こういうとき写輪眼は便利だ。相手の心を挫くのに幻術は有効だから。

と言ってもわたしには幻術の才はほぼない。せつかく発現したこの眼も持ち腐れである。

その捕虜くんだが、まだ子どもと言っていい年齢であることもあ

り、どうやら碌な情報は持っていなかったようだ。

だが聞き捨てならないことをひとつ吐いた。

わたし、つまりこのうちはケイカは、千手で「うちの放火魔」と呼ばれているらしい。

呼んでいるのは、主に柱間くんの弟の扉間らしい。

いやふぎけるなよ。

「生ける炎」と呼ばれるのはまあいい。「それわたしじゃなくて母なんだよな」とは思うが、畏怖を感じるなかなか良い異名だ

放火魔ってなんだ、ご丁寧に「うちのの」と付けるんじゃないか。

マダラ様の友人だったこともあり、柱間くんのことはなんとなく

くん付けで呼んできたわたしだが、扉間のことは一生呼び捨てすることを誓った。

先日腹を斬られた怒りもある。

千手扉間、近日中に燃やす。覚悟をしておいてほしい。

◇ ◆

七月九日

夏だな、とマダラ様に言われた。

はあそうですね、と星を見ながらわたしは返した。

お前の誕生日が近い、とマダラ様は重ねて言った。

まあそうですね、と星を見ながらわたしは返した。

何か言おうとしては口ごもり続けるマダラ様にわたしはそこそこ苛ついており、「仕方ない、また乳に埋めるか」と抱きかかえようとしたところ、そつと拒否された。

自分でも驚くほどシヨックで凍り付いていたら、マダラ様に「お前を抱いてもいいか」と聞かれた。

「あっなんだ嫌じゃなかったんだ!？」と思い、どうぞどうぞと両手を広げた。マダラ様は静かにわたしを見て、「花嫁修業は絶対にやりたくないと言ったのはお前だからな」と唐突に言った。

そりやそうだが、それがどうしたよ。

など思っていると、マダラ様が「明日、夕飯前にうちに来い。ひとりで」と言った。

わざわざひとりで、と言われなくても、呼ばれたらひとりで行く。一緒に宗家に遊びに行く友人などわたしにはいない。

じゃあ明日、行きますねと約束をして別れた。

マダラ様の雰囲気がいつもと違った気がする。

◇ ◆

七月十日

宗家へ出かける前に、この日記を書いている。

そろそろ出かける準備をしようか、というかわたしはどうして今日呼ばれたんだろうなど考えていると母がやってきて、「マダラ様を傷つけるようなこと言っちゃだめよ?」と言った。

最近は言っていないはずだし、言ったつもりもない。

キョトンとしていると「多分とても緊張しているだろうし、失敗するかもしれないけど、最初はそんなものだから」と言われた。

何の話題なのか全くわからず、「何の話題なのか全くわからない」と素直に言ったところ、「今日やるんでしよう? 筆下ろしを」と言われた。

そうなの?

今日なの? マジで? 結局一切練習とかしてないのにな?

どうして本人が聞いていないのに母が知っているのかも不明だ。ヒカク様あたりから話が行っていたんだろうか。わたしにも言ってくれよ。

「今夜は向こうに泊まることになるでしょうから、ゆっくりしてきなさい」だそうだ。

筆下ろしってそんな、時間がかかるものなのか。15分くらいで終わるんじゃないかとボンヤリ思っていた。そんな長時間プランなら朝から呼んでくれ、どうして日が落ちてから呼ぶんだ。

しかし文句を言っても仕方がない。

何をさせられるのかわかっていないが、ヒカク様や母の言葉を信じるなら、ぶっつけ本番でなんとかなるらしい。

とりあえずはその言葉を信じてやってみようと思う、マダラ様の筆下ろし。

というわけで行ってきます。明日の日記にはその感想でも書こう。

◇ ◆

七月十一日

◇ ◆

七月十二日

◇ ◆

七月十三日

◇ ◆

七月十四日

母に「マダラ様が来てくださっているけれど、会わないの？」と部屋の扉越しに声をかけられた。

会わない、帰っていただいてください、と頼んだ。

◇ ◆

七月十五日

もう、三日だか四日は経っているのに、立ち直れないし、部屋から出られない。

マダラ様が

マダラ様が男の人だった。

男の子だったのに、あんなのまるで男の人で、知らない人みたいで、でもどう見てもマダラ様で、すごく必死で、見たことない顔をしていて、わたしに覆いかぶさるから抱きしめてほしいのかなと思って、でも違って、逃げたいと思ったのに逃げられなくて、それはマダラ様の力が強かったのもあるけど、マダラ様が「逃げないでくれ」って言ったからで、

わたしはマダラ様の師匠だから、若君からもマダラを頼むって言われたから、マダラ様に教えてあげられることは教えてあげたいと思って

でもわたしが教えられることなんてなかったじゃないか。

◇ ◆

七月十六日

裏庭からマダラ様が侵入してきて度肝を抜かれた。

「もう一生マダラ様と顔を合わせられない」と思っていたのに、ふと庭を見たらマダラ様とバツチリ目が合い、人間は驚きすぎると喉がヒュツて鳴るんだなという気づきを得た。

宗家の次期頭領がなぜ盗人みたいに裏から来るんです、と尋ねたら「玄関から訪ねたらトウカさんに追い返される」と言われた。

追い返せと言ったのはわたしなので返す言葉もない。

少しだけ、以前のように自然に話せた。けれど次第に数日前のことがちらついて、駄目だこれ、これ以上は話せないとマダラ様を置いて部屋の奥に引っ込もうとしたら、マダラ様もついてきた。

あまりにも自然についてくるものだからそのまま同伴してしまい、部屋に入ってから「いやなんですか」と言った。

ここ数日ほぼ臥せていたので布団引きっぱなしだったし。

マダラ様その布団を見た、と認識した瞬間に動揺が頂点に達し、布団を燃やした。

マダラ様を燃やさなかっただけ褒めてほしい。

一瞬で灰になったそれを見ながら、マダラ様が「お前の嫌なことは絶対にしない。約束する。だから話をしてくれないか」と言った。

いやだ、気まずすぎる、帰ってください、そっちが帰らないならわたしは帰る。

と思っただのだが、マダラ様あまりに悲しそうな顔をしていて、はいとしか言えなかった。

そう広くはない自室の隅と隅に座り、ぽつぽつと話をした。

マダラ様曰く、悪いことをしたとは思っていないが、怖がらせたのは申し訳ないと。

怖がっていないが？

別に全然怖くなかったが？

「おぼこなのは知っていたが、あそこまでは思っていないかった」とも言われた。

まさか途中で医者を呼びに行こうとするとは思わなかったと。

それに関してはお前は絶対に悪くない。マダラ様のがあんな風になってるのを見て、病気が怪我かと思わない方がおかしい。以前わたしが骨を折った時並みに腫れていて、その腫れている状態がある意味普通と言われても納得できるはずもないだろう。

しかもその腫れてるやつをわたしに

やめよう、思い出すな。

「別に怖くはありませんでしたが、うちの一族の子を持っている人は、皆あんなことをしているんですか」と聞いたら肯定されて嫌だった。

うちの一族どころか、人間は全員あれをやっているらしい。

本当だろうか。

嘘を言っているようには見えなかったの、本当なのだろう。

「せめて事前に、口頭でもいいから概要を教えておいてほしかった」と伝えたら、そもそもそれを拒否したのはお前だ、と返された。

わたしと同年代の女子はとくに花嫁修業的なことをしていて、その一環として子を作る方法もちゃんと学んでいるんだと。

嫁入りしたくない、戦場にいたいと強硬に主張したのはお前だろうと。

確かにそうだが、「だから何も知らないままマダラ様にあんなことをされても仕方ない」とは思えなかった。

何をされているのか、何が正解なのかわからないまま気づいたら終わってたし、マダラ様が知らない男の人みたいで怖かつ

怖くはなかったが、自分のペースを無視されて好き勝手された感はある。

それが悔しい。わたしが優位だったらこんな気分にはなっていない。

やっぱり一発くらいは殴らせてくれないかなあと考えていると、マダラ様ありがとうと言った。

お前のおかげで男になれたと。

あれをやると性別が確定するのだろうか。

「じゃあわたしは女になったんですか」と聞いたら、何故だかすごく嬉

しように「そうだな」と言われた。

何嬉しそうにしてんだ、こっちは痛かったし、怖か

怖くはなかったが、終始「よくわからないが、とんでもないことを
されているのはわかる」状態だったんだぞ。

けれど、あれがマダラ様に必要なことで、わたしがその役に立った
というのであれば、それはよかったな、とは思う。

あんなこと、気心の知れていない相手とはできないだろう。

だから怒っても仕方ない、のかもしれない。

わたしの苛立ちや動揺が収まってきたと察知したらしいマダラ様
がわたしの手を取った。

そして、「これで、堂々とお前を娶ることができる」と言った。
なんて？

約束

マダラだって別に、最初からうちはケイカを己の妻にしようとも、手籠めにしようとも思っていたわけではない。

そもそも彼女が嫁入りとか、女としての幸せとか、そういったものに全く興味を持っていないことはわかっていた。

彼女の傷の責任を取って娶ろうと言った、幼い日の言葉に嘘はない。マダラは本気だった。

だがそのうち、ケイカは長男である兄の下へ嫁がされるのだろうことに気付いた。

彼女は実母から、有り余る火遁の才を継いでいる。ケイカも子を産んだなら、その子は優れた忍びになるだろう。

そんな「優秀な雌」が次男に下賜されることはまずない。

宗家の次男という己の立場に自覚的だったマダラはそれをわかっていて。

しかし「己の立場」をわかっていない、わかっているとしても我が強すぎたのがケイカで、彼女はあろうことか宗家長子の求婚を袖にした。

マダラ含むほとんどの者が「マジかよ」と思った。

彼女の母の若い頃を知る古参の者は「あの母にしてこの子ありだな」と思った。

すっかり怒られるはずだったケイカがそうされなかったのは、張本人である長男が彼女を庇ったこと、頭領であるタジマが事前にこの事態を察していたことが大きい。

何より、ケイカに何かを無理強いすれば、後ろから母親が出てくる可能性がある。

よって彼女はお咎めなしとなり、そして間もなく、うちは長子であるキセノが他界した。

ケイカはひどく悲しみ、その嘆きようを間近に見たマダラは「やはり兄が好きだったのでは」と感じ、亡き兄への愛情や劣等感、ケイカへの執着心から精神を拗らせかけたが、拗らせている場合ではなかった。

彼女はもともと肉体的な成長が早く、豊かな胸部や臀部を有していた。そしてそれを「ただの脂肪」としか捉えておらず、胸を鬱陶しがって挽ごうとするわ、たゆんたゆんさせながら歩くわ、挙句の果てにそれをマダラの顔面に押し付けてくるようになった。

思春期の少年を誘惑しようとしたわけではない。むしろそちらならよかった、自分の肉体が他者からどう見えているのか自覚できているのだから。

彼女はただ、マダラという可愛い弟子をあやすためにそうしていた。弟子の成長から目を逸らすために無意識に過剰な子ども扱いをしていた部分もあるのだろうが、前提として、異常なレベルで性知識がなかった。嫁入りの準備を一切していないとしても不自然なほどに。

普通なら、同年代の女子や両親から少しづつ知識を得ていくものだろう。肉体の成長に伴ってそういった方面へ興味が出てくるのは一般的なことで、しかし彼女は己の興味をほぼ全て「火」及び「戦闘」に振っており、それに何とか「食」が続く体たらくだった。

結果として「いつまでもお姉さんぶって自分を子ども扱いし可愛がってくる、ボディタッチが激しい、性知識ゼロの巨乳美少女」が爆誕した。

童貞の白昼夢か？

とマダラは思ったが、夢ではなく彼女は確実にここにいた。妄想でない以上、マダラは彼女を守らなくてはならなかった。敵から、そして同族の童貞野郎共からだ。

ケイカの戦闘スタイルは「とりあえず戦場に出てきて、周囲を広範囲に焼く」という敵味方双方にとって迷惑なものであったが、「味方への被害は出さないようにする」スタンスがあるぶん、彼女の母より万倍マシであった。

そして彼女には「近くで味方がピンチだったら、助ける」だけの良識も有しており、実際に彼女に助けられた男衆も少なからず存在する。

ただでさえ「最前線で戦っている女子」というだけで目立ちまくっ

怯むだろうと思われたマダラ様は何故か堂々としており、なんかやたらと自信に満ちている様子で、もしかするとわたしとしたあれが原因なのかもしれないが、ひと回り大きく見える。

そんなビッグマダラ様は言った、お前の処女を受け取った以上、お前を嫁にするしかない。そういうものなんだと。

聞いてない、なんだそれ、そういうしきたりでもあるのか。あるらしい。

ならどうして教えておいてくれなかったのか。

「ヒカクから聞いているはずだ」と言われたが、ぜったい言っていない、聞いてない。

知っていたらあんなことしなかった。

だって嫁、わたしがマダラ様の妻？

そんな人生想定していない。

い、
どんなに大きく強くなってもマダラ様はマダラ様で、わたしの可愛い、

◇ ◆

七月十八日

怒り狂いながら宗家へ。

マダラ様ではなくヒカク様に会うためだ。

のこのこ出てきたヒカク様に「テメー筆下ろしやつたら自動的に妻にならなきゃいけないとか言ってなかったよな!？」ということを知った。

「言った」とヒカク様は言った。

嘘じゃん。

威風堂々たる佇まいで「確実に言った、お前が覚えていないだけ」と言い切られた。

正直記憶力には自信がない。あまりにはつきり言い切られ、そうなのかも……と思いかけ、いややっぱそんなはずねえよと思ひ直した。

そんな衝撃的なこと、言われて忘れるはずがない。

だって筆下ろししたらその男の妻になるなんておかしい、じゃあ筆下ろし役をやる人が多いとかいう後家の人はどうなんだ、嫁ぎ直し

た話なんて聞いたこともない。

ヒカク様曰く「筆下ろししたらその男の妻になる」のではなく、「女の初めてを奪ったら、その責任を取って妻にする」が正しいらしい。妻にする気がないのなら、最初から未通女に手を出してはならないのだと。

そして、もしマダラ様がわたしを娶らなかった場合、マダラ様は稀代のカス野郎、無責任クズ男、女の敵としてうちは一族に名を残すであらうと。

どうしてそんなこと言うの？

そんな、わたしのせいでもマダラ様が周囲からそんな風に扱われるなんて言われたら怯んでしまう。人質を取られた気分だ。

そんなことになるなら、最初から言っておいてくれれば……と言ったら、だから言った、確実に言った、と言われた。

頭がぐるぐるしてきたので一時撤退。

◇ ◆

七月十九日

やっぱ聞いてないって絶対

◇ ◆

七月二十日

「やっぱ聞いてないです」と伝えに宗家へ。

ヒカク様に「仮に初耳だったとして、それがどうしたんだ」と言われ、本格的に殺意が芽生えかける。

ど、どうしたもこうしたもなくない……？ と慄いていると「マダラ様の何が不満なんだ、宗家の正当な跡取りだぞ」と言われた。

嫁ぎ先としてはそれが嫌だし、そもそも嫁ぎたくない、戦場にいたい、わたしに誰かの奥さん役なんて無理だ。

「マダラ様がお前以外の女のものになっていいのか」と言われた。

お前以外の女に笑いかけて、お前以外の女が作った食事を摂って、お前以外の女との子を腕に抱いていいのか。

本当にいいのか？ と。

嫌すぎる

本当にいやだ



七月二十八日

マダラ様に会いに行こうと考えていたら、向こうから会いに来てくれた。

わたしは一人で夜空を見ていて、マダラ様がいつもの装束で暗闇の中から現れて、闇に溶ける色の装束なのに、どうしてかマダラ様だけ浮かび上がっているように見えた。

二人で星を見るのはいつぶりだったろうか。

しばらくお互いに押し黙り、相手が何かするのを待っていた。

沈黙に負けたのはわたしの方で、ずっと考えていたこと、「もう、あなたに足枷を付けて座敷牢に監禁するくらいしかないんじゃないかと思うんです」と言った。

マダラ様は一瞬「わけがわからん」みたいな顔をして、それでも怒らずに「どういうことだ」と聞いてくれた。

ヒカク様に、マダラ様が他の人のものになっていいのかと聞かれたこと、それがすごく嫌だと思ったことを伝えた。

けれどマダラ様は跡取りで、妻帯しないなんてことはあり得ない。

じゃあもう閉じ込めるしかない。

「そうしたらあなたはどこにも行かないじゃないですか」と言ったら、マダラ様は困ったような嬉しそうな顔をした。

座敷牢は駄目だそう。マダラ様は一族を率いなくてはならなくて、牢の中からではそれはできないからと。

そりやそうだよなあ、でも嫌だなあと膝を抱えると、マダラ様がわたしの真横まで近寄ってきて、妙に甘やかすような声で「お前がオレの妻になれば、オレは他の女のものにはならないぞ」と言った。

それから、「お前が妻になっても、お前を戦場から引き離したりしない」とも、「お前が警戒してるほど、妻としての面倒な仕事なんてねえよ」とも言った。

でもあなたは可愛いマダラ様なんです、ずっと守ると約束した、可

愛い男の子なんですと返したが、我ながら覇気のない情けない声で、笑われた。

「旦那が可愛くて何か悪いことがあるのか」

とマダラ様が言っつて、

そう言われてみれば、可愛くて悪いことはないのかなと思つた。

押し黙っているのと、いつの間にかゼロ距離に居たマダラ様が、信じがたいことに、甘えた声で「なあ、ケイカ」と言つた。

あのマダラ様が、年齢ひと桁の頃すら見せようとしなかつた「甘え」を、まさか今になつて、ここにきて見せるなんて。

抗えない。

マダラ様の声が、甘えているのに低い。

いつの間にか突き出ていた喉仏に触れた。

急所に触れられたのにマダラ様はぴくりともしなくて、強い、わたしより大きい、男の人になつたんだと、わたしは多分この時、心から認めた。堪忍した。

「嫁になつてくれるよな」と、菓子でもねだるように言われて、「いやちよつとそれは」と言つたつもりが「はい」と答えていた。

あつヤベツと思い「すみませんタンマ」と言いかけたが、マダラ様がそれはもう良い笑顔で、だ、だめだわたしにはこの笑顔を崩せない……となつて、それからしばらくマダラ様の胸に抱かれていた。

若君みたいにもつと強引に言われてたら断れたんだけどなあと思いつつ見上げた南のひとつ星は、相変わらず綺麗で、わたしたちになど何の興味も無いように見えた。



七月二十九日

マダラ様に抱えられるようにして宗家へ。

猫が獲つた鼠を披露するみたいに、タジマ様やヒカク様に「これを妻にします」と見せられた。

両名とも、いまだかつて見たことないレベルの満面の笑み。

ヒカク様に「料理も裁縫も戦闘もできる、良い嫁になる」と言われ、多分誉められたのだが、まさか先日唐突に料理作らされたり着物縫わ

されたりしたのは花嫁試験的なものだったのだろうか。

釈然としない顔をしていると奥からイズナ様が出てきて、兄さんよ
かったねやつとだねえ、ケイカさんこれからもよろしくね、と言った。

◇ ◆

七月三十日

そういや母に嫁入りのこと話してなくない？　と思い伝えたら、マ
ダラ様から聞いてるわよーと返された。

なんでだ、わたしへの報連相はどうなってるんだよ。

◇ ◆

八月四日

明日にも祝言を挙げるみたいな雰囲気になっていてビビる。展開
が早くないか。

マダラ様曰く、お前はぶつちやけ行き遅れ一歩手前だから急ぐくら
いでいいんだそうだ。

わたしって行き遅れ一歩手前だったのか。

じゃあマダラ様は貰い遅れですか、と尋ねたら、「適正だ」と言われ
た。

なんだよ。

拗ねていると「姉女房は身代の薬と言うだろう」と慰めているんだ
かなんだかわからないことを言われた。

それは、年上の女房は家事とかが得意で家庭円満になるよ的な言い
回しじゃなかったか。

今更だが「良き妻」になる自信なんてない。

「3歩下がってついていく、とか、無理ですよわたしには」と、やや恐
る恐る伝えると

「それでいい、オレは後ろに立たれるのが嫌いだ」と返された。

そういえばそうだった。

ついでに聞けなかったことを聞いておこうと思い、「他の女の人を
困ったりしますか」と聞いたら驚かれた後に怒られた。

妻がいる身でそんなことはしない、オレをそんな不誠実な男と思っ
ているのかと。

そうじゃないし、タジマ様だってそんなことはしていないと思う。けれど先に聞いておきたかった。

「あなたが他の女の手に手を出したら嫌だし、もしかすると殺そうとすらしてしまいそうでとても怖いから、先に心づもりをしておきたかった」と伝えた。

我ながらかなりやばいことを言ってしまったな……これは引かれただろうな、と後悔していると、マダラ様が嬉しそうにしていたので引いた。

しかも「オレが浮気したら殺していいぞ」と、明らかに自分が殺されることを想定した言い方をされたのもっと引いた。

もしかして「ケイカにオレは殺せまい」と舐められているのだろうか。だとしたら許せない。

気持ちの面はともかく実力的にはできるからな。相打ち覚悟になればだが。

◇ ◆

八月十六日

来月だか再来月には正式に輿入れするらしく、祝言の段取りの説明などをされた。

婚礼衣装は白か黒の二択で、白無垢は「旦那の色に染まります」、黒無垢は「旦那の色にもう染まっています」みたいなことを表しているらしい。

心底どっちでもいいという思いが拭えず、マダラ様に「あなたの好きな方を着るので選んでください」と投げた。

「しばらく時間をくれ」だそうだ。

◇ ◆

八月二十日

マダラがまだ白無垢か黒無垢か決めかねている、悪いが祝言当日はどちらも着てくれないか。

とタジマ様から言われる。

そういえば割に優柔不断なところがあった、マダラ様は。

もう何でも着ますよ、好きにしてくれ。

輿入れ前から身を清める必要があるだとか、当日の流れだとかの説
明を受ける。

計100回ほど「面倒くさい」と言いかけたが耐えた。

◇ ◆

八月二十六日

マダラ様がここ最近ずっとそわそわしている。

用も無いのにうちに来てはわたしの顔を見て帰っていく。

「嫁いだら一緒に暮らすんでしよう?」と言ったら「うん」と言われた。
かわいっ

◇ ◆

九月六日

そういえばわたしたちはどこに住むんだ?

多分わたしは家を出て、マダラ様と一緒に住むんだろう。

マダラ様は宗家から離れることはないだろうけれど、わたしは宗家
に間借りする形になるんだろうか。

マダラ様に聞いたところ、宗家のお屋敷を少し増築して、そこで暮
らすらしい。贅沢な話だ。

マダラ様がちよつと照れながら、オレはもともと大勢に囲われて世
話を焼かれるのは苦手だとか、しばらくはお前と2人で過ごしたいな
ど言った。

若干、嫌な予感がした。

「あの、お手伝いさんのような方はいるんですよね」と言ったらきよと
んとされた。

屋敷全体の管理をする者はあるが、家事手伝いを新居に入れるつも
りはない、いいよな? と言われ、「いいわけないだろ」と掴みかかり
そうになった。

もしかしなくても、掃除とか炊事洗濯とか、わたしに全乗せしよう
としているな?

家事を舐めるな。汚れた衣服はひとりで綺麗になる訳ではない
し、食事は待っていても出てこないんだぞ。

確かに今までも家事全般はやっているけど、母と二人で分担だし、

手を抜いてもある程度は許される。

けどこれからはちゃんと言わなきゃ駄目なんだろう、だってマダラ様は宗家の跡取りだ。皺のついた着物とか着せられない。

そのへんをフォローしてくれる下働きの人はいるんだろうなあ、なんだって宗家だし、と思っていたわたしが甘かったのか。

反論しようかとも思ったが「お前も、同族とはいえ他人と共に過ごすのは嫌だろう」と言われ、「それはそう」と思ってしまった。

わたしもマダラ様も、人間嫌いとはまではいれないが、人との交流を好むタイプではない。そのあたりが得意なのはイズナ様だ。

◆ 今更だが、人好きがしない者同士で番っていいのか。

◆ 九月十日

タジマ様にしみじみと「お母上に似ましたね、本当に」と言われる。その場にマダラ様もいたのだが、何故か背に隠された。

◆ 九月十三日

月が変わらないうちに祝言をやることになった。

嫁いだら、もう実家には来ない方がいいんだろうかと思っただが、母曰く「帰ってきたときにそうすればいいでしょう」らしい。

◆ そのあたり緩いのだろうか。

あと、穢れを避けるだかなんだかで、戦場に出ることを止められている。

◆ こうしているうちにもうちはの子らが一人で死んでいっていると思うと歯痒い。

わたしははずれマダラ様の子を産んで、その子がある程度大きくなったら、その子も戦場に出て、小さい子は弱いから、わたしより先に

◆ あまり考えたくない。

◆ 自分の子をなくした時、マダラ様は耐えられるだろうか。

◆ 九月二十日

嫁入り修行と名の付くものを碌にしていけないわけだが、いいのか。嫁入りつてこんな、ぶつつけ本番でやるものなんだろうか。他の人はどうしているんだろう。

タジマ様たちが何も言わないから、いいんだろうとは思うが。

月末に正式にマダラ様に嫁ぐ。

当日の流れはもう頭に叩き込んだから平気だ。

うちのは祖と、他の一族の人の前で誓いを立てるらしい。夫を支え、妻を守り、末永く、何なら来世でも共にいますと。

重くない？

約束するからにはそうするつもりだけでも。

◇ ◆

十月一日

もう二度と祝言挙げたくない、疲れた。

白無垢と黒無垢両方着るなんて言わなきゃよかった。

婚礼衣装があんなに重くて動きづらいとは。

マダラ様が嬉しそうだったのはよかったけど。

祝言の後の宴で、わたしがマダラ様を拒否したらどうなることかとハラハラしていたよ、とヒカク様を筆頭に、宗家の関係者の皆さんに言われた。

「今だから言えるけど……」みたいなテンションで言われたけど、そんなに心配をかけていたのか。申し訳ないような、そんなこと言われてもと言いたいような。

◇ ◆

十月七日

目が覚めると実家じゃないし、隣にマダラ様いるしで毎回ぎよつとす。

いつになったら慣れるんだろうか。

跡継ぎに嫁いだんだから、跡継ぎを産まなければいけないわけで、そりゃ子づくりをしないとイケないのはわかっていたけれど、こうも毎晩するものとは知らなかった。

なんとなく、十日に一回くらいやればいいものなのかなと思ってい

た。
毎晩するのが普通らしい。マダラ様が言うのだからそうなのだろう。
これにもまだ慣れない。毎回、暴風雨に巻き込まれている気分になる。
いつか慣れるのだろうか。第一子が生まれるまでに慣れればいいが。

◇ ◆
十月十三日

「実家に帰ろうと思うんですが」と言ったら、マダラ様をかつてないほど動揺させてしまった。

通りがかったイズナ様も「ちよつと兄さん何やらかして姉さん怒らせたの」と慌てさせてしまった。

イズナ様がわたしを姉さんと呼んでくれて嬉しい。

別に怒ってない、ちよつと実家に取りに行きたい小物があるだけだから、と説明するのにやたら時間を要した。

◇ ◆
十月十七日
久々に戦場へ。

人妻になっても戦闘行為から引き離しはしない、というマダラ様の言葉に嘘はなくて、わたしが有用と見なされた戦場には今まで通り出されている。

ただ、マダラ様はめちやくちや嫌な顔をした。

できれば家においてほしいと思っっていることが伝わってきて、無視した。

◇ ◆
十月二十日

夜、ほぼ寝かけているわたしの腹をマダラ様が撫でてくるので、な、なんだよ……と思っっていたけれど、夢うつつに「ガキができたなら、ここから出さないからな」と言う声が聞こえた。

流石に妊娠した状態で戦場に出ようとは思わない、敵のいい的だろ

うし。

子どもつていつ頃できるんだろう。授かりものというから、時期を自分では選べないんだろうが。

◇ ◆

十月二十七日

想定以上に優しくしてもらっている、宗家の皆さんに。

跡継ぎの嫁だから優しくせざるを得ないのかもしれないが、単なる義理とは思えないほど、何か困っていることはないかとか、果物をあげようとか、たくさん声をかけてきてくれる。

大きくなりましたね、貴女がマダラ様に嫁いでくれて嬉しいと言ってくれる人もいる。

若君にくつついて、幼い頃幾度もここへ通ってきては飯だけ食って帰っていく、当時のわたしのことを覚えている人だ。

我ながらふてぶてしい子どもすぎる、よく嫁いでくれて嬉しいと言えるな。わたしとマダラ様がどう見えているんだろう。

マダラ様が上機嫌で何よりですと言ってくる人もいる。

そういえば、わたしは「わたしの前のマダラ様」しか知らないわけで、他の一族の前でどう振舞っているのかはわからない。

普段はご機嫌ではないのですかとその人に尋ねたら、言葉を濁しつつも、貴女を娶る前は気を張っていたのか、あまり機嫌よさそうではなかったと教えてもらえた。

◇ ◆

十一月十日

体温が馬鹿高いわたしにはよくわからないが、今年は冷え込むのが早いらしい。

マダラ様がわたしに引つ付きながら、そんなことを言っていた。湯たんぽとして愛用されている。

人前では頑としてくつついてこないし、わたしに笑いかけすらしないのに、二人になった途端にベタツ……としてくるのはなんなんだろう。

本人に聞いてみたら、うちの跡継ぎとして、女にデレデレしてい

るところを一族に見せるわけにはいかない云々言われたのでイラつとして乳に埋めた。

見る間に大人しくなって面白い。

子どもの頃から変わってないじゃないですか、と言ったら、お前夜になつたら覚悟しておけよと言われた。

最近、やつと子づくりに慣れてきた気がする。

要はコミュニケーションの一種だ、あれは。

痛いとか怖いとかマイナスなことは遠慮せずに最初に伝えるべきだし、やつてもらって嬉しかったことも逐一言った方がいい。そう考えると、少しだが、最中のマダラ様を観察する余裕も生まれてきた。子どもが生まれたら、もう子づくりはできないんでしょうか。それは少し嫌ですと言ってみた。

子どもが生まれてもするそうさ。

子を作る必要がないなら不要なことなんだろうけれど、触れてもらうのは嫌いではないので、まあ、悪い気はしない。

戦場で負った傷のせいでおなかとかズタズタだけど、マダラ様は気にしていないみたいだし。

◆ ◆

十一月十三日

なんだかんだ毎日が楽しい。

炊事洗濯に時間を取られはするが、マダラ様と自分のことさえなんとかすればいいし、マダラ様はもともと自分のことは極力自分でやる方で、あちこち散らかしたりもしない。

一日の終わりにお前の飯を食うと落ち着く、とも言ってくれている。

わたしに人妻なんて絶対に無理だと思っていたけれど、案外なんとかなるものだ。

母親になつてからも、同じように思えるだろうか。

そうだといい。

◆ ◆

十一月二十日

母が死んだ。

無貌

十一月二十一日

母の訃報を聞いて、おそらくわたしだけが妙に冷静だった。千手扉間が下手人かな、と思ったのだ。

彼はまだ若いが凄腕の水遁使いで、「力押ししてくる敵の間隙を突いて無駄なく殺す」のが異常に上手い。

チャクラの塊みたいなの、あの千手柱間を近くで見続けているからだろうか。格上を仕留めるのが上手いのは。

母と戦闘スタイルが近いわたしも、かつて千手扉間に文字通り刺された。あと少し反応が遅れていたら即死だったろう。

だから、母もなのか、と思ったのだ。僅かな隙を突かれ心臓でも刺されたのではないかと。

けれど違った。

母を殺したのは千手扉間ではなく、千手柱間、かもしれない。多分違う。けれど目撃者は、あれは柱間だったと言っている。

我ながら何を書いているのかわからない。

明日が通夜だ、今日はもう寝よう。

マダラ様の顔色が悪いのが気にかかる。

◇ ◆

十一月二十二日

母の子として、宗家の妻として、常に立ち働いている通夜だった。やることが多いと悲しむ余裕もないのだなと気付く。

暗い通夜だった。

明るく楽しい通夜なんてそりゃあないだろうけど、若君のそれとはまた異なる暗さと混乱に満ちた、足元が不安定に揺れているような、そんな通夜だった。

きつと狂っていて、娘であるわたしすら時に殺そうとする、とんでもない母ではあった。

それでもあの人は、一族の支えだったのだ。

単純な強さだけで言うならもしかしたら族長すら凌いだかもしれない

ない「生ける炎」の急死が皆に与えた衝撃は大きく、悲しみよりも「これからうちにはどうなるんだ」という不安、動揺が広がっていた。わたしは「ああこれは泣いたりとかしたら駄目なやつだな」と思い、そもそも忙しくてその暇もなく、終始真顔で喪主を務めた。

マダラ様が影のように、わたしに寄り添っていた。

◇ ◆

十一月二十三日

母の死に対し思うことは「千手との戦力差が広がったな」と、「気持的には案外大丈夫だな」だ。

だがマダラ様曰く、大丈夫ではないらしい。

一族は大丈夫でも、わたしが大丈夫じゃないと。

そうかな大丈夫だけどな、と納得してない顔をしていたんだろうわたしに、マダラ様は「お前、最後にまともに食事をしたのはいつだ」と言った。

いつだろう。

◇ ◆

十一月二十七日

イズナ様がやってきて「姉さんがちゃんとはん食べるまでオレも食べない」と言い出した。

食べていますよ、と言ったら、小鳥の餌くらいの量しか食べてないでしょとしっかりめに怒られた。

イズナ様はまだまだ食べ盛りの男子なので、単なる脅しだろうとは思うが、気持ちがありがたかった。

◇ ◆

十一月二十九日

イズナ様が本当に食事をしていないことが発覚し、戦慄する。

マダラ様に「イズナで足りないなら、オレも食を断つが」と言われた。

どうしてこのご兄弟はこうも情が深いんだろうなあ。

◇ ◆

十一月三十日

マダラ様イズナ様に監視されながら昼食を摂った。

イズナ様に「あれも食べて、もつと食べて」と勧められるまま口にした結果、本気で戻しかける。胃が弱っていたようだ。

イズナ様が落ち込んでしまつて申し訳なかった。

マダラ様が「泣かないのか」「泣いていいんだぞ」「泣いた方がいい」と執拗にわたしを泣かせようとしてきて嫌だった。

◆ ◆

十二月三日

母のことを、というか、母を殺したものを考える。

本当はもつと早く考えて対策を取るべきだったとわかつてはいた。でもできなかった。

母は戦場で死んだ。それはいい、仕方がなかった。あれだけ殺した母が殺されて文句を言うのはお門違いだ。

問題はいつたい誰が母を殺したかだ。

母が死んだとき周囲にいたうちにはほとんど死んでいる。母の炎に巻き込まれてだ。それでも奇跡的に生き残った数人がいて、彼らは「うちはトウカを殺したのは千手柱間だった」と供述した。

それだけならいい、納得するしかない。

だが彼らはこうも言った。

「その千手柱間には、顔がなかった」と。

なんだそれは。

わたしも、当然ながらマダラ様も、なんだそれはどういうことだと彼らを詰問し、けれどはつきりした答えは得られなかった。

彼らは一様にひどく怯え、話すことが要領を得ず、まるで悪夢を見た幼い子のようで、歴戦の忍びにはとても見えなかった。

顔がないなら何故千手柱間とわかつたのだろうか。

そもそも其れは本当に柱間だったのか？

顔がないのはもういい、いったん置いておく。柱間だつて顔がない日だつてあるかもしれない。

だがわたしとマダラ様が「其れは柱間ではなかつたのでは」と思わざるを得ない理由はもうひとつある。

「柱間は、うちはトウカを嘲笑していた」

「トウカと共に炎に包まれながら、この世の全てを嘲るように笑い続けていた」

そう、目撃者である彼らは証言した。

それは千手柱間じゃない。

千手柱間は、戦場で相対した敵を、それも女を嘲り笑うような男ではない。

柱間の友だったマダラ様と、会いたくもないのに幾度も柱間と相まみえているわたしの共通認識だった。

じゃあ誰なんだよ母を殺したのは。

他に情報はないのかと目撃者たちに幾度も問いかけたが、「千手柱間（仮）を前にしたうちはトウカは見たこともないほど怒り狂っていた、宿敵を前にしたようだった」くらいしか新しい情報は出てこなかった。

そして、それもおかしな話だ。

母が怒り狂っているところなんて想像もつかない。狂ってはいたかもしれないが、怒ることはない人だった。

うちとは千手は確かに宿敵同士だが、母は千手のことなど、よくも悪くも気にしていなかった。

ならどうして母はそんなにも怒ったのか、嘲られたから？

だから柱間は人を嘲るような男じゃない。

わからない。

何もわからない。

わからないから気持ちが変わるい。

臓腑に土でも流し込まれたように胸が塞ぐ。

◇ ◆

十二月九日

母の最期を目撃した彼らの心身が一向に回復しない。

特に精神面が深刻で、情緒不安定さと挙動不審さが日に日に増して、とても戦場に出せないそうさ。

彼らは何を見たのだろう。

◇ ◆

十二月十日

千手柱間は普通に生きているらしい。

「うちにはトウカの炎に包まれた」と証言があったから、死んでいる可能性もあると調べを出したところ、まあ普通に健在だそうさ。

だろうな。

これで本当に、千手柱間が母を殺した張本人であるなら、もううちは千手には勝てないと思っただ方がいいだろう。

母の炎に包まれて生きているなんて、人ではない。

人ではなかったんだろうか、母を殺した者は。

母が炎の神に傾倒していたように、千手にはまた違う神がついていたりするのだろうか。

その場合何の神だろう。

森の千手と呼ばれる彼らだ、土とか森とかを司る神だろうか。

よく燃えそうさ、燃やす。

◇ ◆

十二月十二日

森の千手というだけあって、彼らは深い森に暮らす一族だが、その森を、すみかを燃やしたくてたまらない。

どうしてだろう。

わたしなら燃やし尽くせるといふ確信も、なんならもう燃やしたことがある気すらする。

どうしてだろう。

◇ ◆

十二月十三日

おかしい。

こんなにも千手が憎くはなかったはずだ、わたしは。母が殺されたから？

千手柱間ではきつとないのにな？

千手が邪魔で仕方ない、そう考えてはわたしはどうしてしまったんだと頭を振る。

胸を焼くこの憎悪はいったい何なのか。

屋敷を飛び出して奴らの住処の森を焼き尽くしたい、その衝動を抑え続けている。



十二月十六日

母の最期を見た彼らが、遂に完全に発狂した。

心身衰弱が治らないどころか悪化していくばかりとは聞いていた。その中でも特に酷かったひとりが、深夜、笑いながら庭に穴を掘っているところを一族の者に発見され、もはや始末するほかないと殺されたそうだ。

笑うその彼の周囲には、彼の家族が遺体となつて、折り重なるように倒れていたのだという。

と、族長の長子であるマダラ様に報告がきて、わたしも一緒に聞いた。

ここまで嬉しくない報告もそうない。マダラ様も絶句していた。発狂した彼につられるように、他の目撃者も次々とおかしくなつた。

なんでも、己の手を食べようとしたり、相手の言葉をただひたすら繰り返したり、狂気に吞まれたとしか思えない言動甚だしく、身内によつて始末されるか、狂死したりした——のだと。

一族の雰囲気は常になく暗く、重く、不安定だ。

単に母が殺されただけならこんな雰囲気にはなっていなかったと思う。

「わからない」「理屈が通らない」ことがこんなにもストレスを与えるものだとは知らなかった。

精神的な抛り所を求め、一族の皆が宗家に縋っているのがわかる。

族長であるタジマ様は流石に堂々としたもので、「別になんでもありませんよ」という顔を保ち続けている。

イズナ様は母が死んで以降ずっと激怒し続けている。よくも姉さんの母上を、と。恐れや不可解さを怒りに転換できるのはイズナ様の強さだなと思う。

マダラ様もしつかりしたもので、一族の前で不安そうな顔は見せていない。

けれどわたしと二人きりのとき、心配ごとのある顔をしているので「大丈夫、敵はわたしが焼きますから」と言ったら「何よりお前が心配だ」と返された。

千手柱間もどきよりもそれを見た者の狂気よりもわたしが心配だと。

わたしなら何も心配いらなと言いたかった。

言えなかった。

わたしは何かがおかしい、その自覚はある。

その自覚すら消えることが怖い。

◇ ◆

十二月二十日

年の瀬だ。

タジマ様に呼び出された。

マダラ様と離縁しろとかだったらどうしようと思いつつ行ったがそんなことは言われなかった。

何度聞いたかわからない「貴女は母君に似ている」をまた言われ、それはもうわかったから……と辟易していると「だからこそ心配だ」と重ねられた。

マダラ様どころかその父君にまで心配されているのかわたしは。

見た目ではなく、雰囲気や日に日に母に近づいていつていられるらしい。

母は、うちはトウカは、外見や振る舞いはいつも落ち着いていて動揺を外に出さない人だった。

けれど内側に名状し難いなかを抱えている人で、自分はずいぞ、それが何だったのか芯まで知ることにはなかったとタジマ様は言った。タジマ様から見ても奇人だったようだ。

何かもなにも、母が抱えていたのは信仰による狂気だったのではと思う。

わたしは神への信仰心はない。母とは違う。

けれど、母の幼馴染だった、母へ何やら大きな感情を抱いているらしいタジマ様が仰るのだから、わたしは本当に母に似てきているのかもしれない。

タジマ様は言った。

「うちはトウカが、内に何かを抱えながらも、それでも最後まで踏みとどまったのは夫と娘がいたから」と。

つまりわたしの父と、わたしだ。

愛しい家族が楔となつて、母を人の枠に留めていたのだろうと。

人の枠つてなんだ。

タジマ様はタジマ様で、母のことを神聖視というか特別視し過ぎているきらいがある。

愛しい家族、つて、あの人わたしのこと何度か燃やそうとしてきましたけども。

などとタジマ様に愚痴つても仕方がないので、はあ、と気の抜けた返事をするに留めた。

わたしはともかく、母が父を大切に思っていた、少なくとも何かしら大きな感情を抱いていたのは間違いないだろうとは思う。でなければ嫁がないだろう、あの母が。

母にとつての父が、わたしにとつてのマダラ様なら、そりやあ大切ではあつたのだろう。つくづく早くに他界したことが悔やまれる。

唐突に「貴女自身のために、早く子を産んだほうがいい」と言われかなりぎよつとした。

タジマ様はあまりそういったことに口出しするタイプではないと思っていた。一族の長なのだから、口出しする権利はお持ちなのだが。

跡取り息子必要ですもんね、最善は尽くします、と言うと、いやそうではないのだと返された。

確かに跡取りとしての子が必要だが、宗家としてではなくそれ以前に、貴女の、うちはケイカのために、早く子を得た方がいいと。

血を分けた実子は必ず貴女を繋ぎ止めてくれると。

なんだろうタジマ様はわたしたち母娘のことを浮草か何かだと

思っているのだろうか。

風が吹いたら飛んでいくと思われている疑惑がある。

なし崩し的ではあったとはいえ、わたしはマダラ様の妻だ。

あの方が生きている限りわたしはどこにも行くつもりはないし、行つてはいけない。

ただ、今すぐに千手の森へ駆けていきたい気持ちを否定はできない。

あゝ森を一面の赤に変えられたらどんなにいいだろう。

◇ ◆

十二月二十七日

星を見るのがわたしの趣味で、それは唯一母とお揃いの趣味でもあり、月が好きならマダラ様と共に夜空を見上げる時間はわたしにとつてとても大切な、心が満たされる時間だったはずで、だからこそ夫婦になつてからも二人で空を眺める習慣は続けていた。

なのに、美しかった星が、「目」に見える。

目に空から見られているような気がする。

そんなわけがない。星に意識なんてない。

理性ではわかっているが本能がそれを認めず、わたしを見下ろしてくる満天の目が怖くて、怖くて、夜空を見られなくなつた。

マダラ様はわたしを星好きだと思つているから、気晴らしにとわたしを星がきれいに見える場所へ連れ出そうとしてくれて、その気持ちが嬉しかったからついでにいつか。

師走のこの時期にわたしに時間を割いてくれる心遣いを無下にできなかつた。

けれどやっぱり駄目だった。無数の目がわたしを見ている、そう思うととても顔を上げられなかつた。

せつかくの澄んだ冬空で、きつと星は綺麗なのに、それをマダラ様と共有できないことも嫌だった。

うつむくわたしを気遣つてマダラ様が、ほらあの星がいつとう綺麗だぞとか話しかけてくるのがまた心にくる。

ここで「星に見られてる気がして嫌なんですよね」とか言つたら余

計に心配させるだけ、と思うとそれも言えなかった。

家に帰りましようとも言い出せず、ずっとマダラ様の胸に顔を埋めて目をつぶっていた。

おそらく、というか確実に、甘えていると思われただろうことが悔しい。

マダラ様が背を手で擦ってくれて、正直に書くが、すごく安心した。

◇ ◆

一月四日

三が日が終わった。

一族内の異様な空気は、全て霧散したわけではないものの、薄らいではきたようだ。

人間というものは遅しい。

家族が死んでも、見知った敵を殺しても、身内が狂っても、それでも来る今日になんとかついていくことができる。

どんなに酷いことがあっても日は昇る。

そうである以上わたしたちは生きるしかない。

久々に、千手と争い合っていることをひどく滑稽で愚かしく思った。

生きることでもこんなにも精一杯なのに、わたしたちはどうして殺し合っているんだろう。

◇ ◆

一月二十五日

真冬は子づくりの季節らしい。

戦がほぼなく田畑の世話をする時期でもなく、今のうちに子をなしておくべき時期なのだという。

そうして生まれた子はまた戦場に送られるが、産まない選択肢はわたしたちにはないのだから、今のうちにそうしておくべきなんだろう。

わたしは他の女たちと違って未だ戦場に立っている。

いつ子が産めない身体になってもおかしくないし、というか死ぬかもしれないし、その前に跡継ぎを一人でも産んでおくべきだ。

子どもがほしい。

嫁ぐことさえ断固拒否していた頃のわたしが聞いたらひっくり返りそうだが、マダラ様との子が欲しい。

跡継ぎがどうかじゃない。

タジマ様が仰ったように、自分のために子が欲しい。

わたしの何かはずっとおかしいことにマダラ様も気づいている。

母や一族の不審死がショックなのだろうと見守ってくれているが、きつとわたしがおかしいのは母達の死のせいじゃない。

何かが変で、おかしくて、それをどうしたら正常にできるのかわからない。

星が見ている。わたしを見ている。

◇

二月十日

冬が明けたらまた戦が始まる。

そうしたらまた戦場へ出られる。

そうしたら千手と会って、柱間もいるだろうから、わたしは彼と戦って、殺そう。

殺してどうなるんだ

マダラ様はきつとまだ柱間のことを大切に思っていて、わたしが柱間を殺したら千手との和解の道は閉ざされるだろうし、それは若君の望みでもない。

そういえば母が死んでから、あの方の夢を見ない。

冬が明けてほしい。戦場へ出たい。わたしの居場所はあそこしかない。

本当にそうだろうか。

マダラ様を守ると約束したから

そうするためには千手を皆殺しにすればいいんじゃないのかって、わたしは

わたしなら奴等の棲家を焼き尽くせる

あの森を

太陽が真上にあるのに視線を感じる。

◇ ◆

二月二十六日

硬い顔のマダラ様に改まって呼び出され、お前がオレとの子を産むまでは、戦場へ出さないと言われた。

約束が違う。

嫁いでも戦場から離さないって、奥に閉じ込めるようなことはしないって、そう約束したじゃないですか。

約束を破るんですかと言ひ募ろうとして、マダラ様があまりにも悲壮な顔をしていたから言えなかつた。

それに、どこかで安心している自分もいた。

外に出ない方がいい気がする。

火を見ない方がいい気がする。

わかりました、子ができるまで、戦場に出ませんと言った。

マダラ様は驚いて、それから申し訳ないような、悔しいような、困っているような、とにかく良くはない顔をした。

ここ最近マダラ様が笑った顔を見ていない。

わたしが嫁いでしばらくは、少なくとも母が殺されるまでは、機嫌よさそうに、幼い頃のような笑顔を見せてくれていたのに。

わたしのせいだろうか。

わたしのせいだ。

苦しい。

◇ ◆

三月二十日

庭の桜が咲いた。

宗家がわたしのために設けてくれた部屋は、ここまでしてくれなくてもいいのにといいくらしい広くて明るく、庭が美しく見える。

そこに植えられた桜が綺麗に綻んだ。

それを眺めていたらいつのまにかマダラ様が隣にいて、しばらく寄り添って桜を見ていた。

花はいい、星と違ってこちらを見てこないし。

明日、戦がある。

千手との戦だ。

わたしはここでマダラ様の帰りを待つことになる。

嫌だ。

◇ ◆

三月二十八日

戦に出られない、ただ待つしかないことの精神的な負担がこれほどまでとは思っていなかった。

いやもう本当に、きつい。

すごくきつい。

身体を思い切り動かせないのが嫌とか、敵を叩きのめせないのが嫌とかではなく、「ただ帰りを待つしかない」無力感が心身に堪える。

わたしは戦えるのに。

怪我か病で戦えないというならまだしも、わたしは少なくとも肉体的には健康で、今すぐだって戦えるのだ。

なのに家にこもっているしかない、この閉塞感、戦で死にかけた時の百倍つらい。

火を炊事の時くらいしか見なくなったこと、星が出る時間帯には部屋に籠るようになったことからなのか、精神的には安定した気はする。

しかしこれは安定というより沈澱で、周囲の明度が下がって見える。

これを書いている間にも、うちの子やマダラ様の身に考えたくもないことが起こっているかもしれない。

わたしにとって戦はずっと「命をかけて参加するもの」であって、「帰りを待つもの」ではなかった。

長じてからはわたしは主戦力で、大きな戦ほど駆り出されてきた。

わたしが出たからって皆を守るわけじゃない、今までだって、わたしがいた戦場で多くの一族が死んでいった。

それでも、わたしが家にいるうちに死ぬよりは、いつそ隣で死んでほしい。

産むまで戦うなと言ったマダラ様は、わたしという戦力がなくなる

ことを差し引いても、様子がおかしいわたしを守るためにそう決めたのだろう。

もともとあの方はわたしが戦場に出ることを望んではいなかった。屋敷で待っていてほしいと、そう思っているんだらうなと感じていた。

男として生まれていればよかつたんだらうか。

まさかこの年になって、女である痛みみたいなものを感じるようになるとは。

他の女性たちはどうやって耐えているんだらう、この、ただ待つしかない苦痛に。

◇ ◆

四月十二日

何もしていないと気鬱が酷いため、ひたすら家のことをしている。何事にも限度はあつて、掃除しすぎて床に顔が写りそうだし、庭は手入れしすぎて生活感が消え失せた。

そもそもマダラ様と暮らすこの屋敷は宗家のもので、共用部分は下働きの人が綺麗にしてくれているし、寝室のような他人を入れないスペースも元から綺麗だ。マダラ様は少し潔癖の気があるし、わたしもそれなりに綺麗好きだし。

となると本当にやることがない。

戦っているマダラ様たちを待つことしか。

◇ ◆

四月十七日

わたしを戦から引き離さないという約束を反故にしたのはマダラ様で、あのととき、素直に聞き入れないでちゃんと抵抗しておくべきだったのかもしれない。

随分と長く、血も火も見えない気がする。

実際にはそこまで長い月日が経ってはいないとわかつてはいて、でも、毎日がひどく長い。

星から身を隠すように、陽が沈んでからは内にこもっている。戦闘の勘が鈍っていくのがわかる。

一族は大丈夫なんだろうか。

母がいなくなり、柱間は生きていて、きつとうちはは千手に押されている。

わたしがいないのは痛手のはずだ。

明日になったら、ヒカク様達に会いに行こう。明日は屋敷におられるはずだ。

戦の趨勢を聞いて、それから、わたしが戦場に必要だと言ってもらいたい。

きつと言ってくれ。

わたしはあの母の、生ける炎の娘なんだから。

◇ ◆

四月十八日

ほとんど何も教えてもらえなかった。

貴女はただ、

屋敷であの方を待っていていればいいと言われた。

この屈辱、守るべきはずの一族に感じる、憎悪のような、悲しみのような

わたしは彼らの仲間だった。

命を預け合える仲間だった。

マダラ様よりも先に軍議に参加させてもらっていて、女の身でそれを許されていたのはわたしだけだった。

けど、もう違うんだって。

わたしはもう、宗家長子の妻でしかない。

戦わせてもらえないならただの女でしかない。

わたしはうちの生ける炎の名をいつの間にか母から継いでいて、それに誇りを持っていた。

誇りを持っていたんだと、それを否定されて初めて気づいた。

なにか大切なものから切り離されたような気がする。

◇ ◆

四月二十七日

戦と日常は地続きで、普通に暮らしていたと思ったら急に呼び出さ

れて刀片手に駆け付けることもあれば、もう勝負はついたからと半ば唐突に帰されることもある。

マダラ様が不意に帰ってきたから、戦が一段落して戻ってこれたんだなと思った。

驚きはしなかった。そういうものだとは知っている。わたしだって少し前までそうだったのだから。

変わったことはなかったか、と尋ねられ、ええ何も、と返した。

◇ ◆

五月二十九日

昼間もあまり外へ出なくなった。

それで別に、困らない。

家のことはちゃんとしている。

妻として求められていることはこなしているつもりだ。

あれだけ恐ろしかった星を眺めると落ち着く。

深夜に寝室から這い出して、縁側で夜空を眺める。

星がこちらを見ていて、わたしも見ているのに、目が合わないのが不思議だ。

マダラ様はわたしが星を見るのが何故か急に嫌になったらしく、すぐに後を追ってきて、脱走した犬猫相手みたいにわたしを掴んで布団に引き戻す。

あーあと思いつながらも大人しく連れ戻される。

なんだよ、少し前までむしろわたしに夜空を見せようとしてただけだろ。

◇ ◆

六月七日

夜、庭から室内へ連れ戻されてもめげずに外に出て行くのを繰り返していたら、動けないように朝まで抱きかかえられるか、気を失うまでされるかの二択になった。

マダラ様も疲れると思うしやめた方がいいと思う。

久々にイズナ様が会いに来てくれて、「どうして」と言われた。どうして？

◇ ◆

六月十日

マダラ様がヒカク様たち宗家の方と言い争っていたようだった。すぐ通り過ぎたので詳しくは聞いていないが、千手との戦がどうかケイカがこうとか言っていた。

ケイカってわたしでは。

わたしに関係することを話していたのだろうか。

そうであるなら、必要なら誰かがわたしに言うだろう。

興味が持てない。

星を見たい。

夜が待ち遠しい。ずっと夜ならいいのに。

◇ ◆

六月十二日

戦や軍議以外の自由時間のほとんどを、わたしの隣で過ごすようになった。

マダラ様が。

やることは多くあると思うのだが、暇なのだろうか。

悪い気はしないが特段嬉しくもなく、ところで最近首が痛い。

ずっと上を見ているからだろう。

空を見ようと思ったたら首をのけぞらせるしかないから。

と黙っていたらマダラ様が、空を見上げるわたしを発見すると、部屋に引き戻すのではなく、その場にわたしを横たえるようになった。

仰向けになると首を曲げなくても空が見えるから便利だ。

転がって空を見るわたしの隣にマダラ様も無言で横になっている。

何か、昔にもこんなことをしていたような

なあそうだ、まだお互い子どもだった頃、一緒に星と月を見ていたんだった。

思い出したのでなんとなくマダラ様の顔を胸に押し付けてみたらびっくりしていたようだった。

◇ ◆

六月十五日

振り子のようだと思う、自分の精神が。

今日はまともな方に振れていて、首を痛めるほど星を見る気にはならないし、ひとり無言で空を見上げるわたしはさぞ不気味だろうなあと客観視することもできる。

けれどきつと、明日か明後日あたりには反対に振れているんだろう。

申し訳ない。

マダラ様に申し訳ない。

やっぱり戦場に戻りたい。あそこでならどんな精神状態でも役に立てるだろうに。

◇ ◆

六月十九日

マダラ様が不在の折に、母の友人と名乗る女性たちがわたしを訪ねてきた。

母の友人と名乗る女性たちがわたしを訪ねてきた。

信じられなさ過ぎて2回書いてしまった。

しかもひとりじゃなくて、3人も来た。

いやだって、嘘じゃん、友達？ あの母に友達？ あの母の？

絶対にそんな人いないと思っていた。

孤高の人だと思っていたのに、信じられない。実家で暮らしていた時にだって会ったこともなかったのに。

また「狂」側に振れてきていた感覚のあった精神を無理やり反対側に引っ張られたような感じで、動揺しながらも自室に招き入れて話を聞いた。

彼女たちはうちは分家の女性方で、母と同年代か少し上のように見えた。

宗家に嫁いでくるまで周囲と碌にコミュニケーションを取ってこなかったわたしだ、戦闘要員でもない彼女たちのことは当然のようにほぼ記憶になかった。「そーいや見たことある気がする」くらいだった。

彼女たちはわたしを見て、ああ本当に大きくなられてとかお母さん

にそっくりとかここまで生きていてくれてよかったとか言った。

かなり気圧された。

中年女性複数名に囲まれるのって怖い。悪気はない、どころか好意が伝わってくるけれども。

あの、本当に母の御友人だったのですか、と聞いたら肯定された。親しく話すことも、遊ぶこともなかったし、トウカさんが私たちのことをどこまで認知していたかもわからないけれど、友人だったと。

それ本当に友人か？

母じゃなくてこの人たちがヤバい気がしてきた。

慄くわたしに、彼女たちは言った。

トウカさんは私たちの憧れだったのだと。

うちの女は戦場には出ない。女だからだ。子を産み育て、家を守る事が役目だから。

そんな中、当たり前のような顔をして男たちに交じって戦いに出て、男以上の戦果をあげ続けるトウカさんは、多くの女たちにとって、恐ろしくはあったけれど、とても眩しい存在だったと。

女は男たちを家で待つしかない。それが口惜しくて、辛いけれど耐えるしかないから。

そうしなかったトウカさんは本当に凄かったのよ彼女たちは言った。

わたしは、母がまさか女性たちの希望みたいな存在になっていたことへの驚きと、

やっぱり男性陣の帰りを家で待ってるしかないのって辛いよなという共感で口をつぐんでしまった。

特に後者の衝撃が大きくて、やっぱり嫌なものなんだ、家で戦ってる夫の帰りを待つのは、と思った。

ところでどうして急に、わたしに会いに来てくれたんですかと尋ねた。

彼女たちの話を統合したところ、どうやらわたしの、うちはケイカの様子がおかしいということが、分家にもだいぶ漏れ始めているようだ。

千手に押されているというのにぱったり戦場に出なくなり、それどころか人前に出てこなくなり、懐妊したのかと思いきやそうでもない様子で、マダラ様に訊ねても「妻のことはオレに任せろ、口を出すな」としか言われぬ。

周囲の心配を跳ね除けてしまうところが最高にマダラ様という感じだが、原因がわたしのようなので笑えない。

あの方はただ、わたしを守ろうとしているんだろう。

しみじみと「わたしなんかマダラ様の妻になるべきじゃなかったよな」と考えていると、母のご友人（仮）に「だから貴女と会おうと思っただの」と言われた。

あのトウカさんの娘が、生ける炎の名を受け継いだ女傑が、意味もなく戦場から下がるとは思えない。

夫にも、宗家の男たちにも言えない悩みや苦しみを抱えているんじゃないか、話を聞くだけでもしてあげられないか——と。いい人たちだよ。

わたしという戦力がヘタレたままだと、巡り巡って彼女たちの害にもなるから「いいから早く戦いに出ろ」と遠回しに言われているのかもしれないが、それでも放っておかないだけ優しすぎる。

その優しさと、「母の友人」（ではない気がするが）という肩書きに絆されたんだろうか。

誰にも言っていないかった「戦場に出るな」とマダラ様に命じられて、宗家にも戦力として期待されていなくて、家で帰りを待つしかなくて、それがとてもキツイ」ことを彼女たちに話してしまった。

一生分の「まあ！」を聞いたと思う。

一生分の「もー！」も聞いた。

彼女たちはまるで自分のことのように憤ってくれて、最終的に「だから男って駄目なのよ、女の話なんて聞きやしない」と主語が馬鹿でかくなっていた。

「あの……男性陣も一族やわたしたちを守るために一生懸命なだけだと思うので……」と何故かわたしがフォローに回ってしまった。

彼女たちは皆、夫か息子を戦で亡くしていた。

どんなに強くても殺される時は一瞬で、大切な人が戻ってこない痛みを彼女たちは知っている。

だから、マダラ様が貴女を閉じ込めておきたがる気持ちもとてもわかるのよ、と同意したところで「だからって貴女の意志そっちのけで閉じ込めていいわけないわよね!？」とデカめの声で言われて仰け反った。

いいわけないのか、そうなのか。

「ケイカちゃんはどうしたいの」と遂にちゃん付けで呼ばれつつ、いやまあ戦いたいですよ正直……言えないですけど……と返したら「じゃあ私たちがマダラ様に言ってあげるから」と言われた。

そうはならないか？

母とわたしがイレギュラーなだけで、分家の女性はもつとこう、宗家に傳えているものと思っていたのに。

直訴なんかしたら彼女たちが怒られるのではないか。

心配になって止めようとしたのだが「大丈夫、私たちはマダラ様やイズナ様のおしめを替えたこともあるし、なんなら授乳した」と言われ思考が止まった。

授乳で。確かに貰い乳をするのはなんら珍しくはないし、マダラ様の御母堂は病がちだったらしいから、周囲の母親たちから授乳もされていただろうが、それにしてもマダラ様に授乳、授乳か。

なんだろうこの気持ちは。

吸ったのか……わたし以外の乳を……。

名状しがたい顔で黙り込むわたしをどう思ったのか、「男なんて結局女に支えられないと何にもできないんだから、話くらい聞かせるわ」と言われた。

だから主語が大きすぎないか。本当に大丈夫なのか。

気持ちだけで充分なので、その、ともごもご言うわたしの手を取って、母の友人だという女性は、「いつまで続くのかしらね、争いは」と悲しげに言った。

その言葉が、妙に耳に残っている。



六月二十三日

疲弊したマダラ様に唐突に「何なんだあの女どもは」と言われた。何の話だ、何なんだはこちらの台詞だ。

「どうしました」と尋ねたところ「お前の母親みたいなものと名乗る分家の女3人に囲まれて責められた」と教えてもらった。

もしかしくなくてもあの人たちだろう。

ヤバすぎる、なんなんだその行動力は。本気だったのか。その場のノリで言われただけだと思っていたのに。

なんて言われたんですかと聞くと、「今日は調子が良さそうだな」と返された。返事になっていない、そんなに最近のわたしは調子が悪そうなのか。まあそうですね。

要約すると「妻の気持ちをもっと考えろ、散々戦の道具として扱っておきながら今度は子を産む道具にするのか」って言われたんだって、マダラ様。

宗家の長子にそれを言える彼女たちの心の強さどうなってるの？

無礼打ち一歩手前だが。

おそらく実際はかなり言葉を選びながら丁寧に伝えたのだろうが、それにしてもどうなんだ。

一族の悲願は敵を、主に千手を殲滅すること、そのために優秀な子を産み続ける必要がある。だからわたしの扱いは別におかしくない、むしろ正しい。

マダラ様は嫁のチョイスを間違えたとは思っているが、出陣を禁じられたこと自体は理不尽とは思っていない。嫌だけど。宗家の嫁が戦場の只中にいるのがおかしいことくらいわたしにもわかる。

だからマダラ様は、彼女たちの進言を一蹴してよかったし、そうするのが普通だ。

けれどマダラ様はわたしに「戦いたいか」と尋ねた。

びっくりしてしまって、その問いへの返答もせず「聞くんですか、あなたが、矜持が馬鹿高いあなたが、宗家でもない女の言葉に耳を貸すんですか」と問い詰めてしまった。

わたしだって元は分家の女だが、母が族長の幼馴染だったし、何よ

りマダラ様の師だ。

そんな縁もない女たちの言葉を簡単に受け入れる人だったか、マダラ様は。

マダラ様曰く、分家の女が宗家に忠言するなどあり得ない。

自分の母親世代の女たちに「ケイカ様のことでお話があります」と唐突に包囲され、その時点で「只事ではない」と感じたらしい。

そして、マダラ様が「ケイカとちゃんと話をする」と言うまで、彼女たちはその包囲網を解くことはなかった。

「……それは、怖かったですね」と言ったところ黙り込まれたので、怖かったんだろう。

一定の年齢を重ねた女性って、独特の凄みがあるよな。集団になると余計に。

ここで「そういえば彼女たちの乳を吸ったんだよなマダラ様（乳児）」は」と思い出して不快な気持ちになり、「流石のあなたでも乳を吸った相手には逆らえませんか」と言ったら怒られた。

想定の5倍怒られた。

人生においてお前以外の乳を吸ったことなんざない、冤罪だと。

「赤子の頃授乳されてたらしいですよ、覚えてないでしょうが」と教えて差し上げたら「そんなもん勘定外だ、強制授乳が乳吸った内に入るか！」と怒鳴られた。

「強制授乳」がツボに入ってしまった文字通り笑い転げてしまった。

駄目だ、面白すぎる、字が震える。マダラ様の口からこんな面白いワードが出てくる日が来るなんて思ってたなかった。

立てないレベルで笑ってしまいマダラ様の足元にうづくまっつていと、お前が笑ってるのを久々に見た、と真顔で言われて余計に面白かった。

次の戦までに懐妊の兆しがなかったら、また戦場に立たせてもらおうと約束し直した。

そして、決してマダラ様より先に死なないとも。

マダラ様が祈るような顔でわたしの腹部に触れて、わたしは、やっぱりまだ空から視線を感じるな、と思った。

間もなく、母が愛したあの星がいちばん美しく輝く季節が来る。